

仇話集  
三  
三









非  
和

集

集

天之卷

附石之句  
卷之二

吉成





序

佻諧者死常色而中格妙門也  
世人妄謂一時戲言綺語也豈  
夫然耶蓋能致知而達理之常  
變氣之順逆固守自得遊心於  
太虛則語默作之無有不善故



棄名利而造之靜安可獲焉誠  
意而為之身脩家整舉不外乎  
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風  
靡今雖其流間有涸者泝源者  
亦不少也屬者社友集錄翁一  
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行殊矣傳曰法不自顯弘  
之在人湖子其人乎是為序  
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼蒼菴

林中之谷神齋 函蘭



一葉集叙

人の世にあるや瞬息の間のと駟馬のときも歲月の  
ゆくまおよひかたを忘はらくも意ま適へる事をた  
のしむとせむや花の晨月の夕形を外に思ひをや  
り心を寰外に遊はむあるを友かきのへたてなく  
風流の源を探り彼我の間を忘る凡宇内乃際何の樂  
かこれに加へん今俳氏の道こそ此に近しとやいふ  
へけれ此道の大に起る蕉翁よりす蕉翁武辨の家に  
生れ富を辭して貧に居售るゝを求めすして名實  
の高き其述る處海内に徧し是兒童走卒も知所余か  
多言を待へらすすむかたあれと編録せしむの遺失



して少し爰に幻窓湖中子蚤くこの道に志し見ぬ世  
の人を友とし元祿のむかしに遊ひ是を集めむその  
願ひ久しく遠をもとめ近を探るのたらざるをなけ  
き始て績を果し梓に上するに至るの功淺くなら  
し湖中子また武辨の家に生れ翁を篤信し閑居編述  
を好む其名蕉翁となく朽さらむか

文政戊子冬太田一經筆を尾花庵南軒に採

俳諧一葉集序

花になくうくひす水にすむ蛙の聲をさけい生としいけるものい  
つれの歌をよまさりけるとかや實にさく人によりて詩も俳諧も  
こゝにはつるゝとなかるへとをもく芭蕉庵桃青翁の三十あま  
りのころより佛頂禪師につきて参禪しまたひろかに莊周か胡蝶  
に俳諧の底をさゝはして七情よくゆるゝ病ひをはふきつゝいな  
く渾沌を活して此道は古人をさと代々の弊風を轉して古今集の  
はいかい歌にもとつき杜律山家集の腸をあはせて貞享の初年は  
しめて狂句は絶外の洒落を發し人情を連句は盡し文章を記賦に  
をなへて終に道の神とあふかれ給ふ其徳生前より四海にあふれ



馬夫もはせを、知棹郎も桃青を稱す門弟子國々にちくく其  
風を唱ふる人幾千といふ數を知らず然れとも灰を吞て胃をあら  
ひ大意に通じたるハおほからす予斗符の量殊に邊土に生れ師友  
にともしく此うれい明くれ止すひと日古學庵とはりて祖翁の  
一世よくちすさまれし物を坐右よして常よたしくをしへを受  
はやと發句より消息遺語のまけきに至るまであま集めて只ひと  
つ葉の一といふにならひて俳諧一葉集と題し都て九卷となすさ  
れとかれに訂しこれに正すに非あり是有て空しく村肝をささ  
て功なし舍を道旁よつくれは三年までならんといふ諺にひと  
ありしか友人坎窩の函底をたゝきて全きとをえたりなまなかの

師につきて大事乃日を費さんよりハちを此仙境に入て遊んに  
ハれはかた乃人の心法を捨ていたつらに句作を好む水に畫き氷  
よちりはめて巧拙を争ひ一生を名利に何やまるるなさけなき俳  
諧を勉て速に俳諧をわすまさて其のちに俳諧ハいふへくと云吾  
翁の詞をりて門窓の燈下に誌し

文政丁亥仲秋

四 辟 堂 湖 中



凡例

一發句の部寛文延寶天和時代の分り四季ともは帖のはじめに置  
貞享元祿の分り前後にかゝはらす其類によりて載無季の分り  
卷末に出す

一同疑しき書に見たる句或は行脚の話或は俳友の語に傳へて古  
書より所見なき分私に捨るものは、かりあれは考證として其季其  
季の末に載

一附合の部は延寶より元祿まで年歴をくく次第して祖翁一世  
の流行をしらふ

一同二句三句或は五句七句宛の物は其年歴の末に載

一同古集大かた寛文中は宗房とあり延寶天和に至て桃青或は芭  
蕉と有貞享より下は翁とあり依て是に倣ふ

一文の部石臼の頌は不猫蛇に越人の作なるを明らけし故にはふ  
くまた煤掃の説翁の作なる事疑し然れども文集に蝶夢かえら  
ひ入たれはとたりは省す據なけれは末帖に載

一文混合としたるは辭説賦のたぐひのみにあらは紀行などの中  
に在て粗なるあり精なるあり又疑しき物も是はらく記して後  
人の考をまつ

一遺語の部祖翁の語はたとへ一時の戯れとなりとも脱するは  
のひすして擧



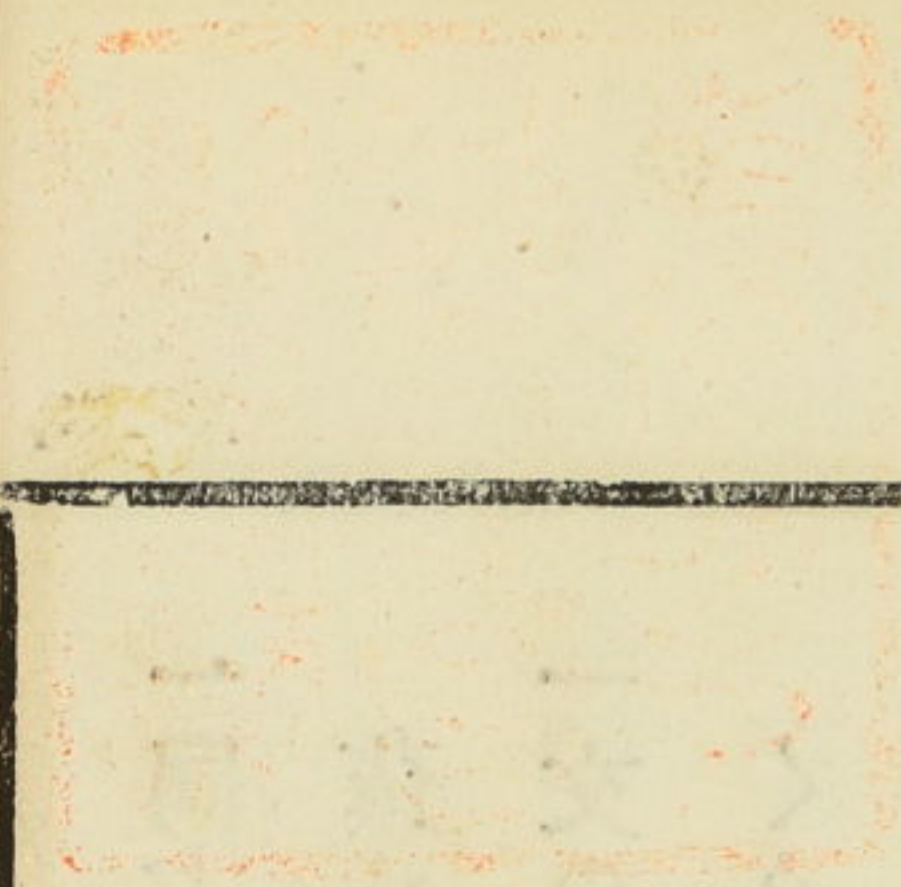
一同かの書にハミカク此書ハ長クあるもの其大同小異を私  
ニ脱せんもハハリあれハ重複をから載

併譜  
葉集發句春之部

古學庵佛兮 編  
幻窓湖中  
坎窩久臧校

寛文延寶天和年中

庭訓の往來誰文庫よりけさの春  
發句あり芭蕉桃青宿のはる  
我年を棚へあけてや若えひす  
年や人よとられていつもわか夷  
齒朶の葉もあきよもちひの鏡かな  
かひたんもつくのせけり君か春  
もて來つる是そ年玉ころ玉  
於あ春はると大オ哉カ春はると云イと





元朝感あり

餅を夢よ折詰齒朶の草枕

季吟勸進巻頭

和歌の跡とふや出雲の八重かすみ  
此梅よ牛も初音と鳴つへし  
古郷の梅や難波の二年越  
梅かしまえらしおちくは京太郎  
まはしりの尻もすいらぬ春の駒  
梅柳さそ若衆かな女かお

杉風夢想

さしけたり二月中旬はつ茄子  
去年のはやそこへすされよ次郎月  
ねこの妻へついの崩れよりかよひけり  
藻よすたく白魚やとらぬ消ぬへき

石川北鯉生の舎弟山店子我つれく慰ん  
とて芹の飯よさせて深川まで持來るこれ

青泥坊庭の芹よやあらむと千代の侘も今  
更よおほゆ

我ためか鶴哺残す芹の食  
悲しまんや墨子芹焼を見ても猶  
さかりなる梅よすて引風もかな  
梅咲や白の挽木のよき曲り

竹内一枝軒よて

世よ句へ梅花一枝のみそさしむ  
あち東風や面よさはき柳髪  
餅雪をしら糸となすやなき哉  
けふひかん菩提の種を時日かな  
まら魚よ價あるこそうらみあれ  
苣摘て貧ある女機よよる  
内裡雛人形天皇の御宇とかや  
名所八休の内二句  
貝よする風の手まなや和歌の浦



瑛石よ啼かはしたるさしす哉  
摘けんや茶を木枯の秋ともしらて  
山吹の露菜の花のかこち貞なるや

憂方知酒聖貧始覺錢神

花よりさき世我酒まろく食黒し

雨降けれん

草履の尻折て歸らむ山伏たち  
花の顔よはれうてしてや朧月  
花の賤の目よも見へけり鬼薊  
うち山や外様しらすの花さかり  
箸の先よ花咲せけり櫻海苔  
紅毛も花よ来よけり馬よ鞍  
姦櫻咲や老後のおもひ出  
糸さくらこや歸るさの足もつれ  
吹風の尾細くなるや犬さくら  
艶なる奴花見るや誰哥のさま

夏近し其口たはへ花の風

初瀬みて人く花見けるよ

うかれける人やはつせの山櫻

花のもどよて發句望れ侍りて

花よ明ぬなけきや我が歌袋  
春風よ吹出し笑ふ花もかな  
まつ花や藤三郎かよしの山  
てきちよくよもててふ来るや花見酒  
初花よいのち七十五年ほど  
さかりしや花よそしろうき法師ぬめり妻  
先知や宜竹か尺八よ花の雪  
京の九万九千群集の花見かな  
氏もよし生立もよしや藤の棚

遁世の時

雲とへたつ友かや雁の活わかれ

季下芭蕉を贈る



はせを植て先よくむ荻の二葉哉

貞享元禄年中

春立や新年古き米五升

庵よりて

いく霜よこしろ芭蕉の松かさり

山家迎春

誰増そ齒朶よ餅かふ丑のとし

伊勢か賣家よも來たり千代の春

嵐雪か亨たる正月小袖を着たれい

誰やらか姿よ似たり今朝の春

空の餘波をしまんと舊友の來りて酒興し

けるよ元日の晝まで臥わけほの見はつし

て こもちくひ

二日もぬかりいせしな花の春

たかき屋よのほりて見れいの製の有か

たきを今も猶

慮慮よてよきはふ春の庭かまと

京ちかき所よ年をとりて

こもを着てたれ人います花の春

湖頭の無名庵よ年をむかふ時三日口を閉

て題四日

大津繪の筆のはしめい何佛

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

年くや猿よ着せたるさるの面

元日かの田毎の日こそ戀しけれ

蓬菜よ聞はや伊勢の初便

子日しよ都へゆかむ友もかな

古畑よ薺摘ゆくをとことも

一とせよ一度つまるゝ薺かな

蒟蒻よけふの賣かつわか菜哉

風姿亭

春立てまた九日の野山かな



大日枝やしの字を引て一かすみ  
春なれや名もなき山の朝霞  
正月も美濃と近江や閏月  
うくひすの笠落したる椿かな  
相國寺よて

鶯鳥よ感ある竹のはやし哉  
鶯や柳のうしろ藪の前  
うくひすや餅よ糞する椽の先  
ある人の草の戸を尋侍けるよそよ出け  
るよしよて年老たるをこのひとり留主  
を守居けるよ垣穂の梅さかりなりけるを  
これなんあるしといひけれのかのをのこ  
隣の梅よてさふらふとやすよいよく興  
うしなひて歸り侍るとて

留主よ來て梅さへよその垣根哉  
伊賀のある方よて

旅鳥古巢の梅よなりよけり

訪山隠

梅まろしきのふや鶴をぬすまれし  
梅咲てよろこぶ鳥のけしき哉  
紅梅や見ぬ戀つくる玉すたれ  
梅折て椿よまよふ袂かか  
山里の万歳運し梅の花  
奈良よて

阿古久曾の心のしらすうめの花

卓袋亭月待

月まぢや襟かたけゆく小山伏

山家

手涕かむ音さへ梅のさかり哉  
伊賀の山家ようよといふ物あり土底より  
ほり出して薪とす石よもあらず木よもあ  
らず黒色よしてあしき香ありそのかみ高



梨野也これを考て日本艸は石炭と云物有  
いかゞや傳て此國のみ焼きたりしけん  
いとめつらし

香よ匂へらよはる岡の梅の花

一とせ都の空は旅ねせしころ道よて行脚  
の僧よ知人よあり侍るよ此春みちのおく  
見よゆくとして我草庵を訪けれん

又もとへ藪の中なる梅のはな

伊勢よて **子良成の後み梅ありといへん**  
か子良子の一もとゆかし梅の花

網代民部か息よ逢て

梅の木よ赤ほやどり木や梅の花

里の子よ梅折殘せ牛の鞭

園女亭

暖簾のおくものゆかし北の梅

乙州之東武行餞別

梅わか菜まりこの宿のどろく汁  
春もやしけしきとくのふ月と梅  
かそへ來ぬ屋しきくの梅柳

去來か許へ亡人の事などいひつかいすと  
て

蒔蒔のさしみもすこし梅の花

何某新八去年の二月身まかりしを一周忌  
のほどよ父梅九子の方へやつかしける

梅か香よむかしの一宇あられこ  
うめかしよのつと日の出る山路かな  
葉よそむく椿や花のよそころ  
落さまよ水こほしけり花ついなき  
迹水や椿なかるく竹のおく

二月吉日とて是橋か剃髪して醫門よ入を  
賀す

初午よ狐のそりし天窓哉



伊勢よて

神垣やおもひもかけすねはん像  
貞享五年ささらきの末伊勢詣つ我は白  
洲の土を踏と既五たひよ及ひ侍りぬひ  
とつくどしのくらしれるよまたかひて  
かけまくもかしこきおはん光りも思ひま  
される心地してかの西行の涙の跡をまた  
ひ増賀のまを悲しひて内外のほ前よぬ  
かつきなから袂えはるはかりよなん侍る  
何の木の花とらしらすよほひ哉  
裸よのまた衣更着の嵐かな

塔山旅宿

陽炎の我肩よたつ紙衣哉  
陽炎や柴都の原の薄くもり

伊賀新大佛寺

丈六よ陽炎高し石の上

枯芝やまた陽炎も一二寸

野州室の八島よて

糸遊よ結ひつきたるけふり哉  
入かゝる日も糸遊の名殘かな  
百景や杉の木間よいろみ草  
木曾の情雪や生ぬく春のくさ  
雪間よりうす紫の芽獨活哉

二月堂

水取や氷の僧の沓のおと

泊瀬よて

春の夜や籠人ゆかし堂の隅  
春風やさせるくはへて船頭殿

奈良行

春風や人聲うつる三笠山

笠寺奉納

笠寺やもらぬ窟も春の雨



よし野西行庵二句

陳翁て筆よ汲ほす清水哉  
春雨の木下よつたふ車かな  
はる雨や蓬を伸す草の道  
赤坂庵よて

不性さやかき起されし春の雨  
春雨や簑吹かへす川柳  
春雨や蜂の巢傳ふ屋根の漏  
在原寺よて

うくひすを魂よ眠るか嬌柳  
猿唄よ對して

もろくのこしる柳よまかすへし  
古川よこびて芽をはる柳哉  
吹たひよ蝶の居直るやなき哉

贈杜國

笠の緒よ柳わかねる旅出かな

種ものよさいる柳のまなへかな  
からかさよかしわけ見たる柳かな  
春の雨いとまつかよ降てやかてはれたる  
頃近きあたりなる柳見よ行けるよ春光さ  
よらかなる中よ滴りいまたをやみなけれ

八九間空て雨降柳かな

蝠蝠も出ようき世の花よ鳥  
世よさかる花よも念佛申けり  
蝶鳥のういつき立や花の雲  
奈良七重七堂伽藍八重櫻

訪山隱

檀の木の花よかまひぬすかた哉

湖水眺望

からさきの松の花より臈よて

逢古人



我ふたつの中も活たる櫻か  
山さくら瓦ふくもの先ふたつ

昆沙門堂の花春四王天の榮花もこれより  
いかてまざるへきうへなる黒谷下河原む  
かし遍昭僧正のうき世をいとひし花頂山  
わしのみやまの花の色枯よし鶴の林まで  
思ひまられてあられ

観音の薨見やりつはなの雲  
花咲て七日鶴見るふもどかな

物皆自得

花も遊ふ此なくらひそ友雀  
鶴の巢も見らるゝ花の葉こし哉

草庵

花の雲 鐘の 上野か 淺草か

あすの檜木とかや谷の老木のいへるとあ  
りきのふの夢と過て翌のいまた來らす只

生前一樽のたのしみの外もあすのくくと  
いひくらしして終る賢者の譏をうけぬ

さひしさや花のあたりのあすならう

伊賀の上野薬師寺初會

はつ櫻折しもけふはよき日なり  
咲みたす桃の中より初さくら  
景清も花見の坐より七兵衛

探丸子の別墅

さまくの事もひ出す櫻かな  
瓢竹庵も膝をいれて旅の思ひいと安かり  
けれ

花を宿よはしめ終りや廿日ほど

同亭より旅立けるよ

此ほどを花も禮いふわかれ哉

笠のうらら書付ける

芳野もて櫻見せうそひの木笠



龍門二句

龍門の花や上戸の土産よせん  
酒のみよかたらむかゝる瀧の花  
櫻狩きとくや日よ五里六里

芳野

花さかり山の日頃の朝ほらけ  
まはらくの花の上ある月夜哉

草尾村よて

花のかけ謠ひよ似たる旅ねかな  
大和國を行脚して葛城の麓を過るよそ  
の花の盛よて峯よかすみわたりたる曙  
のけしさいとし艶あるよかの神のみかた  
ち悪しと人の口さかきく云傳へ侍れり

猶見たし花よわけゆく神の良

支考之東行餞別

此こゝろ推せよ花よ五器一具

尾張の門人より淡酒一樽木曾の獨活茶一

種おくりけるを人くよすしむるとて

飲わけて花いけよせん二升樽

春の夜の櫻よ明てままひけり

草庵よ桃櫻有門人よ其角嵐雪有

兩の手よ桃とさくらや草の餅

示門人

子よ飽とヤ人よ花もなし

肅山の需よて探雪か書し琴の譜

散花や鳥もおとろく琴の蔭

僧專吟餞別

鶴の毛のくろき衣や花の雲

露沾公よまかりて

西行の庵もあらむ花の庭

良よ似ぬ發句も出よ初さくら

句空への文よ



うらやましうき世の北の山櫻

嵐山

花の山二丁のほれの大 悲 閣

玄歸子か深川の旅舎を訪

花見よとさす舟遅し柳原

さくらをいなど寝處よせぬそ花よぬ春の鳥のこころよ

花よ寝ぬこれもたくひか嵐の巢

上野の花見よまかり侍りし人く幕打

さわき物の音小唄の聲にさまくなりよけるかたはらの松蔭よたのみて

よつ五器の揃ぬ花見こころかお

古沓や花の旅出の拾ひはき

聲よくうたいたんものを櫻ちる

鐘きへて花の香の撞ゆふへかな

山家

鶴の巢よ嵐の外のおくら哉

半日の雨より長し糸さくら

歌よみの先達おほし山櫻

二見の圖を拜みて

うたかふち潮の花も浦の春

路草亭

紙衣のぬるしどもをらむ雨の花

伊賀國花垣の庄のそのかみ奈良の八重櫻

の料よ附られけると云傳へ侍れり

一里のみな花守の子孫かや

扇よて酒くむかけや散さくら

似合しや豆の粉めしよ櫻かり

藤堂喬木子亭

土手の松花や木深き殿造り

木のもとよ汁も繪もさくら哉

洒落堂記



四方より花吹入て鴉の湖

路通かみちのくよおもむく時

草枕まことの花見しても来よ

萬乎別野

年くやさくらを肥す花の塵  
花のかけ硯よかはる丸かはら

上醍醐

留主といふ小僧なふらむ山櫻

古郷このかみか園中又三草の種をもりて

春雨や二葉よもえる茄子種

此たねと思ひこささし唐からし

芋種や花のさかりよ賣ありく

木白興行

はたけ打音やあらしの櫻麻

伏見願岸寺

我衣よ伏見の桃の車せよ

煩への餅こそ喰ね桃のはな

尙白と浪華へ下る

只一夜桃よ宿かる木幡かな

古寺の桃よ米ふむをとこ哉

舟あしもやすむ時あり濱の桃

はるけき旅の空おもひやるよもいさしか

も心よさいらむものむつかしけれの日頃

住たる庵を相えれる人よ譲りて出ぬ此人

なん妻を具しむすめ孫など寄る人なりけ

れり

草の戸も住替る代そ雛の家

重三

青柳の泥よまたるし沙干哉

かどろへや齒よ喰わてし海苔の砂

老慵

蠣よりの海苔をり老の賣もせて



淺草千里か許よて

海苔汁の手際見せけり淺黄梳  
あけほのや白魚えろき事一寸  
常陸下向ふ江戸を出る時送りの人よ  
あゆの子の白魚送るわかれ哉

鯉子圖讚

えらうをや黒き目をあく法の網  
よし野を下る時

飯貝や雨よ泊りて田よし聞  
古池や蛙飛こむ水の音  
蛙子の目すり鱈を啼音哉  
まどふとさ犬ふみつけて猫の戀

田家

麥めしよやつるゝ戀か猫の妻  
猫の戀止どき閨のおほろ月  
膳所へゆく人よ對して

瀬のまつり見て來よ瀬多の奥  
山路來て何やらゆかしすみれ草

悼呂丸

當歸より哀の墳のすみれ草  
よく見れぬ薺花咲かきねかな  
圓角扇よ讚を望むよ

前髪もまた若草のよほひかゑ

菩提山

山寺の悲しさ告よ野老ほり  
捨ものよ梨の接穂や山屋しき

茶店二句

つししいけて其かけよ千鱈さく女  
菜はたけよ花見貞なる雀かな

隣菴の僧宗波旅よ赴れけるを

古巢只あはれなるへき隣かな  
原中や物よもつかす啼雲雀



なにかき日も嘯りたらぬひはり哉  
雲雀より上又休ふたうけかな  
ひはり啼中の拍子やきしの聲

高野よて

父母のまきり又戀し雉子の聲  
蛇くふときけいふそろしきしの聲  
煤ほりて埃たく家又啼燕  
雀子と聲鳴かす鼠の巢

莊子書讚

もろこしの俳諧問ひ飛胡蝶  
物好や匂いぬ草よとまる蝶

乍木亭

蝶の羽のいく度こゆる塚の屋根  
起よく我友よせんぬる胡蝶

畫讚

裾山や虹はく跡の夕つし

西河

ほろくと山ふき散か瀧のおと

畫讚

山吹や宇治の焙爐のよほふとき  
山ふきや笠よさすへき枝の形

大和行脚の時丹波市とかやいふ處よて日  
のくれかすりけるよ藤の覺束なく咲こほ  
れけるを

草臥て宿かるところや藤の花  
暮おそき四谷過けり紙草履  
峰入や一里おくるよ小山伏

此筋よ望れたる茅舎の畫讚

葎さへ若葉やさしや破れ家  
二葉軒

藪椿門は葎のわかばかな  
逢龍尙舎



物の名を先とふ萩のわか葉哉  
ゆく春よ和歌の浦よて追付たり

留別

行春や鳥啼魚の目は涙

田家よ春の暮を怪

入相の鐘もきこへず春のくれ

鐘つかぬ里は何をかはるの暮

望湖水惜春

ゆく春を近江の人とをしみける

考證

まぢ兼て隣の梅を折よゆく

自畫自贊

恵方から曳やとしも牛の玉

元日やおもへんさひし秋のくれ  
四方よ打薺もまともどろかき  
勢ひなり氷きえてい瀧津魚

上野の奥

花よ酔り羽織きて語れ指す女

孤名かみちのく行を送る

むく起よ隣の花のよほひかな

坦堂和尚を悼

地またふれ根よより花のわかれ哉  
袖よこすらむ田螺の蟹のひまをなみ  
まふくたか袴よそふかつくくし

楠部

盃よ泥な落しそむら燕

怒誰か製して贈りける筆の心殊よよろし

けれい

君や蝶我や莊子か夢こころ



那須の雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋て  
留守よ来て棚さかしする藤の花

發句夏之部

寛文延寶天和年中

啼やなけ耳のすうなるほとしきす  
時鳥まねくか麥のむら尾花  
口すへれ油月夜のほとしきす  
戸の口よ宿札あ のれ郭公  
黒焼釜わつて捨けりほとしきす  
まはし間もまつやほとしきす千年  
子規正月の梅の花さかり  
清く聞む耳よ香炷て郭公  
岩つしし満る涙やほとしきす  
菖蒲うり軒のいわしの鬪體  
愚まくらく荆をつかむはたる哉  
燕子花似たりや似たり水の影  
時鳥いまた俳諧のあき世かな  
五月の雨岩檜葉の翠いつまてそ



さみたれよ物遠や月の泉  
降音や耳もすうある梅の雨  
五月雨も瀬ふみ尋ぬみなれ川  
さみ雨れや龍燈あける宵太郎  
さみたれや此笠森をさしも艸  
こしも三河むらさき麥のかきつはた  
榎の實や花あき蝶の世捨酒

名所八体の内二句

秋や須磨須磨や秋しる麥日和  
汗水やよし野泊りの笈山伏  
夕かほよ見とるしや身もうかりひよん  
ゆふ顔の白く夜の後架よ紙燭とりて  
杉風生夏衣いときよらかよ調して贈りけ  
れり

いてや我よき布着たり蟬衣  
雪の河豚左勝水無月の鯉

美しき其ひめゆりや后さま  
箔押よとちも身のため夕すしみ  
闇夜狐下はふ玉眞桑  
梢よりあたよ落けり蟬のから

小夜の中山よて

いのちなりわつかの笠の下すしみ  
不卜の母追善

水むけて跡とひ給へ道明寺

甲斐の郡内といふ處よ至る途中の苦吟

夏馬ほくく我を繪よ見るこしう哉

貞享元祿年中

ひとつ脱てうしろよかひぬ更衣  
夏木ても只ひとつ葉のひとつかな

奈良よて

濯佛の日よ生れあふ鹿子かな  
濯佛や皺手合する珠敷の音



招提寺

わか葉して御目の車ぬくはらや  
日光山

あらたふと青葉わかはの日の光

裏見の瀧

まはらくの瀧を籠るや夏のはしめ  
おもひ出す木曾や四月のさくら狩

甲斐山中二句

山賤の願閉る葎か

ゆく駒の麥もなくさむやとり哉  
青さしや草餅の穂も出つらむ

逢桑門

いさともも穂麥喰ひむ草枕

五月十一日武府を出て故郷へ赴く人々

川崎まで送り來りて餞別の句をいふ其か  
へし

麥の穂をたこりよつかむ別かな  
麥の穂やなみたよ染て啼雲雀

悼大巖和尚

梅戀て卯の花拜むなみた哉

其角か母五七は追善

卯の花もはしなき宿そすさまじき  
うの花やくらき柳のおよひこし

尾張より東武へ下る時

牡丹蕊深くわけ出る蜂の名残哉

桃隣新宅自畫自賛

寒からぬ露やはたんの花の蜜

大坂まで

燕子花かたるも旅のひとつかな

山崎宗鑑やしきよて近衛殿の宗鑑か姿を

見れのかきつはたどあそはしけるを思ひ

出て心の中よいふ



有かたきすかたかかまむ燕子花  
鳴海知足亭

かきつはた我よ發句のおもひあり  
歸菴

夏衣いまた風をとり盡さす  
わかればや笠手よさけて夏羽織

大垣の城主君 日光御代參勤させ給ふ  
扈從する岡田氏何某よ寄

篠の露袴よかけし茂りかな  
嵐山藪の茂りや風の筋

須磨寺よ頼ぬ笛さく木下闇  
靈岸寺

木つしきも庵の破らす夏木立  
幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立

別舊友

二またよわかれ初けり鹿の角  
子規啼や黒戸の濱 鹿  
橋やいつの野中の時鳥

鉄蓋か峰よのほる二句

須广の海士の矢先よ鳴や郭公  
ほととさす消ゆく方や島ひとつ

裏見の瀧

時鳥うらみの瀧の裏おもて  
みちのく一見の桑門同行二人那須のまの  
はらを尋てなを殺生石見むといそき侍る  
ほとと雨ふり出けれ先此家よとしまりし

落来るや高久の宿のほととさす  
那須野よて

野を横よ馬ひきむけよ郭公  
時鳥聲横たふや水の 上



一聲の江よ横たふや杜宇  
京よても京なつかしや時鳥  
嗟峨よて

ほとくさす大竹藪をもの月夜  
時鳥啼や五尺のあやめ草  
さし竿書たる扇よ

鳥さしも竿や捨てむほとくさす  
仙臺よて

田や麥や中よも市の時鳥  
あけほのやまた朔日は杜宇  
不卜一周忌琴風興行

時鳥啼音や古き硯箱  
ほとくさす啼く飛そいそか  
木隠て茶摘も聞や郭公  
鳥賊賣の聲まさらぬし時鳥  
するかの國よ入て

駿河路や花たちはなも茶の匂ひ

落柿舎

袖の花よ昔をえのふ料理の間  
道芝よやすらひて

どんみりと楞や雨の花くもり  
白けしや時雨の花の咲つらむ

贈杜國

白けしよ羽もく蝶のかたみ哉  
須磨

海士の良まつ見らるしやけしの花  
岱水亭

雨折く思ふとなき早苗哉  
芦野

田一枚植てたち去柳かな  
奥州今のえら川よ出二句

西かひかしかまつ早苗よも風の音



早苗よも我色黒き日數かな  
みちのくの名所く心よ思とめて先關屋  
の跡なつかしきましまふる道よかきりて  
今の白川もこへぬ頓て岩瀬郡よ至て乍單  
齋等躬子の芳扉を押かの陽關の出て故人  
よ逢なるへし

風流のはしめやおくの田植歌

まのふの郡忍ふの里とかや文字摺の名残  
とて方二間はかりふる石有此石の昔女の  
思ひを石と成て其面よ文字有とかや山藍  
すりみたるも故よ戀よよせて多くよゆめり  
今の管間よ埋れて石の面の下さまよ成た  
れいさせる風情も見へす侍れどもさすか  
よ昔覺てなつかしけれい  
さなへとる手元やむかしまのふ摺  
尾張の舊交よ對す

世を旅よ代かく小田の行戻り

藏田氏の亭

柴つけし馬の戻りや田植酒  
晝見れい首筋赤き螢かな  
草の葉を落るより飛螢哉  
木曾路の旅思ひ立て大津よとまるころ瀬  
田の螢を見よ出て

此ほたる田毎の月よくらへ見む

上林三入亭

螢見や棹郎酔て覺束な  
ふのか火を木よの螢や花のやと  
秋の坊を幻住庵よとしめて  
我宿は蚊のちひさきを馳走哉  
まよ須磨明石の共さかひいはひわたる  
ほとしいへりける源氏のありさまもおも  
ひやるよそ今いまほろしの中よ夢をかさ



ねて人の世の榮花もはかなしや

蝸牛角ふりわけよ須磨あかし

許六か木曾路よ赴く時二句

うき人の旅よもならへ木曾の蠅

椎の花のこころよも似よ木曾の旅

尿前の山家

蚤まらみ馬の尿するまくらもと

清風亭

はひ出よかひやか下のひきの聲

竹の子や稚き時の繪のすさひ

小督墳よて

うきふしや筭となる人の果

四たひ結ひし深川の庵を立出るとて

木因亭竹睡日

訪隠者

世の人の見付ぬ花や軒の栗

又こえむ小夜の中山はつ松魚

かつを賣いかなる人を酔すらむ

鎌倉のいきて出けん初松魚

やみの夜や巢をまといして啼千鳥

えら川よ住何兵衛へ文をつかはすはしよ

關守の宿を水鶏よとはしもの

大津湖仙亭

此宿は水鶏もしらぬ扉かな

露川かともから佐谷まで道送りして俱

よ隠士山田氏か亭よかり寝す

武隈の松よて

水鶏啼と人のいへはや佐谷泊り

櫻より松の二木を三月越

みしか夜や驛路の鈴の耳よつく



俗士よいさなはれて五月四日吉岡求馬

を見る五日はや死すと聞て

花あやめ一夜も枯し求馬哉

留別

あやめ草足も結はむ草鞋の緒  
ちまき結片手もはさむ額髪

病中自脈

髪生て容顔青し五月雨

さみたれもかくれぬものや瀬多の橋

阿武隈川の水源よて

五月雨の瀧降埋む水かさ哉

醫王寺よて

笈も太刀も五月もかされ紙幟

藤中將さねかたのつよの道より一里はか  
り笠島といふ處もありといへとさみたれ  
降つしきてみちもいとあしけれのわりな

く見過して通りぬ

笠しまのいつこ五月のぬかり道

中尊寺よて

さみたれの降残してや光堂

もかみ川二句

五月雨をあつめてはやし最上川  
風の香も南よちかしもかみ川  
日の道やあふひかたふく五月雨

信濃の洗馬

入梅はれのわたくし雨や雲ちきれ

落柿舎額破

さみたれや色紙へきたる壁の跡

五月雨やかひこ煩ふ桑の畑

露川へ侍る

さみたれも鴉の浮巢を見も行む

さつき三十日の不二の思ひ出らるしよ



目よかゝる時や殊さら五月富士

五月の雨風まきりよ落て大井川水出侍り

けれいとしめられて島田よ逗留す如舟如

竹なといふ人の許ありて二句

昔のまた青葉なからよ茄子汁

五月雨の雲吹おとせ大井川

稻山や柴して展る夏の雨

那須の光明寺よて

夏山よ足駄を拜む首途かお

夏山や杉よ夕日の一里鐘

夏山や紙すく里の食時分

紫陽花や帷子時のうす浅黄

子珊亭よて

紫陽花や敷を小庭の別坐しき

重行亭よて

珍らしや山を出羽のはつ茄子

關の住素牛何かし大垣の旅店を訪れ侍り

しまかの藤えろみさかといひけん花の宗

祇のむかしは句ひて

藤の實の俳諧よせむ花のあと

正成之像

鐵肝石心此人之情

なてしこまかゝる涙や楠の露

酔て寐ん撫子咲る石の上

高館よて

夏草やつはものともか夢の跡

殺生石よて

石の香や夏草赤く露暑し

遠淺や夏の日の出の舟こゝろ

清風亭二句

行末の誰肌ふれむ紅の花

眉掃を拂よして紅のはな



己百亭

やどりせむ藜の杖よなる日まで  
落梧のぬし稚きものをうしなひけるを  
悼みて

もろき人またとへむ花も夏野哉  
秣おふ人をまをりの夏野かな  
うき我をさひしからせよかんと鳥  
能なしの眠たし我をさやうし

稻葉山よて

撞鐘もひしくやうの蟬の聲

立石寺よて

まつかさや岩よまみ入せみの聲  
無常迅速

やかて死ぬけしきり見へす蟬の聲

盤齋うしろ向の像

世の中をうしろよなして山里よそむきは

てしもすみそめの袖といふよ

團扇もてあふかむ人のうしろ向

奇香亭よて

鼓子花のみしか夜眠る晝間哉  
ひるかはよ米つき涼む哀なり  
子どもらよひるかは咲ぬ瓜むかん

平田の李由の許へ文の音信よ

ひるかほよ晝寐せうもの床の山  
夕かはや酔て貞出す窓の孔  
ゆふ貞よ干瓢むいて遊ひけり  
住ける人の外よ隠れて葎生えける古跡  
を訪て

瓜作る君かあれなと夕すしみ

河野松波庵よて古き長瓢よ瓜の花をいけ  
て下よ無絃の琵琶を置て花生より落る草  
を撥面よ受たり



瓜の花まつくいかなるわすれ草  
落梧亦よかしのまねきよ應じて稻葉山の  
松の下納涼して長途の愁をなくさむほど  
山かけや身を養はん瓜はたけ  
花と實と一度よ瓜のさかり哉  
幻住庵よこもれる頃  
夕よも朝よもつかす瓜のはな  
初具桑たてよやわらむ輪よやせむ  
去來か別野にて  
朝露よよこれて涼し瓜の泥  
柳骨離片落りすしはつ具桑  
之道よ對して  
我よ似な二よ割し具桑瓜  
瓜の皮むいた處や蓮臺野  
曲翠亭よて  
夏の夜や崩れて明し冷し物

さしれ蟹足はひのはる清水哉

岐阜山よて

城跡や古井の清水先問む

那須の温泉明神拜殿よ八幡宮を迂し奉り

て兩神一方よ拜れ給ふ

湯を結ふちかひも同じ石清水

結ふよりはや齒よひしくえみつ哉

須广二句

月を見ても物たらぬすや須广の夏

月のあれと留主のやうに須广の夏

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

手を打つ筈よ明る夏の月

夏の夜やこたまよ明る下駄の音

夏の月御油より出て赤坂や

晋の淵明をうらやむ



窓なりよ晝寢の臺やたかむしろ

秋鴉主人の佳景よ對す

山も庭もうこそさ入るや夏坐しき

井符氏水樓

世の夏や湖水よりかふ浪の上

名よしおへる鶉飼といふものを見侍らん

と暮かけていささひやされし人くい

なは山の木かけは席を設け盃をわけて

又たくひなからの川の年魚鱈

うふねも通り過るはと又歸るとて

おもしろうてやかて悲しき鶉舟哉

本間主馬か亭よまねかれしよ太夫か家名

を稱して二句

ひらくとあくる扇や雲の峰

蓮の香よ目をかよはすや雨の鼻

枝なくて世よかしのらぬ蓮かお

雲のみねいくつ崩れて月の山

六月や峰よ雲おくあらし山

水無月や鯛のあれども鹽鯨

清瀧や浪よ散こむ青松葉

みな月のふく病やみの暑かな

かたられぬ湯殿ぬらす袂哉

松風の落葉か水の音すし

石川丈山の像

風かほる羽折の襟もつくろひす

書音

辨慶の夏もかみこの羽折哉

小倉山常寂寺よて

松杉をほめてや風の薫る音

游力亭二句

さしなみや風のかほりの相拍子

湖やあつさを惜む雲の峰



蛤の口をめて居る暑かき  
破風口より日影や弱る夕すしみ

風瀑饑別

わすれすの小夜の中山よてすしめ  
千草か身まかりけるを聞てみのし國より  
去來か方へつつかいし侍りける  
なき人の小袖もいまや土用干

十八樓記

此あたり目よ見ゆる物みな涼し  
清風亭

涼しさを我やとよしてねまるこ  
皿鉢もほのかよやみの宵すしみ

羽黒山よて

有かたや雪を薫らす南谷  
すししさやほの三日月の羽黒山  
文麟子出山の像を贈られけれり

南も佛草の臺も涼しかれ

新莊風流亭

水のおく氷室尋る柳かな

袖の浦の眺望

あつみ山や吹浦かけて夕すしみ  
寺島彦介亭

暑き日を海よ入たりもかみ川

象瀉や雨よ西施かねふの花

汐越や鶴脛ぬれて海涼し

西行法師

ささかたのさくら波うつもれて花の  
上こくあまのつりふね花の上こくとよみ  
給ひけん古き櫻もいまた蛸満寺のえりへ  
又残りて陰波をひたせる夕はれいと涼し  
けれり

夕晴やさくらよ涼む波の花



小鯛さす柳すししや海士か軒  
川中の根木よよころふすしみ哉

四條の河原納涼とて夕月夜の頃より有明  
過るころまで川中又床をならへて夜すか  
ら酒のみ物くひ遊ふ女の帯の結めいかめ  
しく男の羽折長う着なして法師老人ども  
またしり桶屋鍛冶屋のてしこまていと  
まえかはよのしるさすか又都の景色な  
るへし

川風や薄かき着たるゆふすしみ

曲翠亭題田家納涼

飯あふくかしか馳走や夕すしみ

雪芝亭

涼しさや直又野松の枝の形

野水新宅

涼しさの指圖よ見ゆる住ひかな

東武より上りて人くよ對す

東路の毛牒はつかし床すしみ

野明亭

涼しさを繪よ寫しけり嵯峨の竹

なまぐさし水蘆か上の鮠の腸

大津木節亭よて

秋ちかきころのよるや四疊半

考證

笈負僧 虫損

みえはやな出立くのはとしさす

長貞亭

海のはれてひえ降の寺五月かな

松島



島くや千くよくたきて夏の海  
松しまや夏を衣裳の水と月

野明亭

清瀧の水くみよせて心太

發心の時

散ちれ千里一風の鉄線花

拙虫損 杯野の臥もたのしきやなどあ  
るしの問れけれの

さみたれよ寒いましなり旅すかた

李青く竹笠破て石あふなし

或人云信州よての吟なりと

のりたやと子の聲くらき鶴舟哉

光明寺よて

汗の香よ衣ふるのむ行者堂

發句秋之部

寛文延寶天和年中

張ぬきの猫よ見えけりけさの秋

秋来よけり耳を尋て枕の風

秋来ぬと妻乞ほしや鹿の波

水學ものりものかさん天の川

月弓や壻の一藝男七夕

七夕のあはぬこしちや雨中天

名所八休の内二句

星合の中や絶あむ龍田川

八朔や天の橋立たはね鬘斗

憶老杜

毳風を吹て暮秋影するの誰か子を

三日月や朝かほの夕つはむらむ

月をわひ身をわひつたなきをわひてわふ

とこたへむとすれと問人もなしなをわひ



くくて

侘てすめ月侘齋か奈良茶歌  
見渡せり詠れり見れり須磨の秋  
六介六兵衛の二人は芭蕉庵を訪れて古郷  
の安否を聞

いく千里へたつおもひや秋のくれ  
角髪やおくを出羽のすまひ取

畫替

鶴啼や其聲は芭蕉破ぬへし  
脚何と音を何と啼秋の風

於君崎

松なれや霧えいさらえいとひくほどよ  
寝たる萩や容顔無禮花のかほ  
よるへをいつ一葉は虫の旅寐して  
月よまゐるへこなたへいらせたひのやど  
桂男すますすなりけり雨の月

廿日過出るや名残三日の月  
影り天の下てるひめか月の顔  
實や月間口千金の通り町  
色つくや豆腐は落てうす紅葉  
秋かせのやり戸の口やとかり聲  
これもまた水生木やもみち鮎  
武藏守泰時仁愛を先とし政以去欲先とす  
とあり

名月の出るや五十一ヶ條  
重くと名月の夜や茶臼山  
詠るや江戸よのまれな山の月  
木を伐てもと口見はやけふの月  
有蘭草菊宜止  
鍼立や肩は縫打から衣  
武藏野や一寸ほどな鹿の聲  
萩の聲こや秋風の口うつし



交ならぬいろはもかきて火中哉  
後家の秋物のあわれをどしめたり  
雪の旅それらてのあし秋のくれ  
雨の日や世間の秋を堺町

茅舎の感

芭蕉野分して鹽も雨を聞夜哉  
とらへたき聲はかり見る若間かな  
ひれふりて牝鹿もよるや牡鹿島  
夜竊も出の月下の栗を穿ッ  
愚案するも冥途も斯や秋の暮  
秋のくれ男の泣ぬものなれのこそ  
花木榿裸童のかさしかな  
唐黍や軒端の萩の取ちかへ  
重陽

さかつきの下ゆく菊や朽木盆  
近江路を通り侍る頃日野山の邊よて胡摩

といふものよ上のきぬとられて  
剥れたる身よの礎のひくきかな

貞享元祿年中

鳴海眺望

初秋や海も青田の一みどり  
はつ秋やたしみなからの蚊帳の積

直江津よて

文月や六日も常の夜よの似す  
出雲崎よて

荒海や佐渡も横たふあまの川  
合歡の木の葉こしもいとへ星のかけ

素堂の母七十あまり七としの秋七月七日  
よとふきするも草葉の七種をもて題とす  
是よつらなるもの七人此結縁よふれてお



のく又七叟の齡ならぬ  
七株の萩の 手本や星の秋  
何かしの代官は隨身して四國へ赴く人  
よ

七夕やはたか硯の 俄旅  
吊雨星

高水よほしも旅寐や岩の上  
野童亭よて

七夕や秋をさたむるはしめの夜  
當麻寺よて

僧朝かほいく死かへる法の松  
朝かほの花よ鳴ゆく蚊の弱り  
嵐雪か畫は讚望みけれ

朝良の下手の書さへあわれなり  
更科行首途

薺の酒もりしらぬさかりかな

閉關

あさかほや晝の鎖かろす門の垣  
朝顔やこれも又我友ならず  
和其角蓼螢句

朝かほよ我のゆしくふをとこ哉  
丸岡の天龍寺を出る時金澤の北枝と別よ  
望みて

物書て扇ひきさくわかれかな  
ある草庵よいさなはれて

秋涼し手毎よむけや瓜茄子  
栗津の庵よて残暑の心を

ひやくと壁をふまいて晝寐哉  
寄季下

稻妻を手よとるやみの紙燭哉  
宿敦賀

あの雲の 稻妻をまつたより哉



或智識のしたまはくなま禪大疵の基どか  
やいと有かたくて

いあつまよ悟らぬ人のたふとさよ  
稻妻や雷の方ゆく五位の聲

本間主馬か宅よ骸骨どもの笛鼓をかまへ  
て能する所を書て舞臺の壁よかけたりま  
とよ生前のたはふれなとか此遊ひよとな  
らむやかの鬮體を枕として終よ夢うつし  
をわかたさるものも只此生前を示さるゝ  
ものこ

いな妻やかほの處かすゝきの穂  
よし野西行庵にて

露とくく試よ浮世すゝかはや  
書 讚

西行の草鞋もかゝれ松の露  
曾良よ別る

けふよりや書付けさむ笠の露  
二見の浦よて

硯かど拾ふやくほき石のつゆ  
崑崙の遠く開蓬萊方丈の仙の地なりまの  
あたり土峯地を拂て蒼天をおさえ日月の  
爲よ雲門をひらくかどむかふ處みなおも  
てよして美景千變す詩人と句を盡さす才  
士文人も言を斷書工も筆を捨てはしるも  
し貌姑射の巧の神人ありて其詩をよくせ  
むか其書をよくせむか

雲霧の暫時百景を盡しけり  
霧時雨不二を見ぬ日そおもしろき  
秋海棠西瓜のいろよ咲よけり  
玉川の水よおほれそをみなへし  
ひよろくどきを露けしや女郎花  
くすし何かしの像



むら雨を背中よおふて柴胡堀

馬上の吟

道はたの木槿の馬よ喰れけり

高田醫師細川青庵亭

薬欄よいつれの花を草枕

加賀國よ入

早稻の香やわけ入右の有磯海

小松といふ處よて

まほらしき名や小松吹萩すしき

萩原や一夜のやとせ山の犬

観水亭

ぬれてゆく人もおかしや雨の萩

種の濱

浪の間や小貝よまじる萩の壘

いろの濱

小萩ちれますすほの小かひ小さかつき

書讚

まら露をこほさぬ萩のうねり哉

ひとつ家よ遊女も寐たり萩と月

藤堂玄歸子の庭なかはよ作りしを見て

風いろやまどろよ植し庭の萩

敦賀守榮院

門よ入の蘇鉄よ蘭の匂ひかな

悦堂和尚の隠室よまねかれて

香を残す蘭帳蘭のやどり哉

茶店よて

蘭の香や蝶のつはさよたきものす

遊女の書讚

枝ふりの日よくかはる芙蓉哉

きり雨の宿を芙蓉の天氣かな

草いろくおのく花の手から哉

此寺の庭一はいのはせをかな



秋草莽

道ほそし角力取草の花の露

伊勢の斗從山家を訪れて

蕎麥のまた花てもてなす山路哉

三日月の地のおほろ蕎麥の花

知足の弟金右衛門か新宅を賀す

よき家や雀よろこふ背戸の粟

初秋中の一此處遊て青瓢の題を得

夕かほや秋のいろくの瓢かな

加賀國をさる

熊坂かゆかりやいつの玉祭り

鳥部山

玉祭りけふも焼場のけふり哉

尼壽貞か身まかりけると聞て

數ならぬ身となふもひそ玉祭り

蓮池やをらて其まゝ王まつり

甲戌の秋大津は侍りしをこのかみの許より  
り消息せられけれの舊里は歸て盆會をい  
となむとて

家のみな杖は白髪の墓参り

骸骨の讚

夕風や盆挑灯も糊はなれ

むかしきけ秩父殿さへすまひ取

許六か畫よ

勝角力いつも上手は米の食

庵はかけんとて句空か書せける兼好の繪  
よ

秋のいろぬか味憎壺もなかりけり  
まつかさや繪かゝる壁のきりくす  
盆過て宵やみくらし虫の聲  
床は来ていひきよ入やきりくす  
朝なく手習すくむきりくす



太田の神社よて

むさんやなかふどの下のきりくす  
白髪ぬく枕の下やきりくす  
さひしさをや釘よかけたる蓋  
草の戸はそよ住わひて秋の風の悲しけな  
る夕くれ友たちの方へつかひしける

みの虫の音を聞よ来よ草の庵  
蜻蛉や取つきかねし草の上  
胡蝶ももならず秋ふる菜虫哉  
老の名の有ともしらて四十雀

田中の法藏寺よ遊ひて

苜跡や早稻かたくの鳴の聲

田家

かりかけし田面の鶴や里の秋  
覆の寒ちる棕鳥の羽音や朝あらし

田莊酒家

桐の木よ鶉啼なる堀の内  
鷹の目もいさや暮ぬと啼鶉  
稻すしめ茶の木はたけや逃處  
青くても有へきものを蕃椒  
かゝさぬそ宿り菜汁よ唐からし  
大風のあしたも赤し唐からし  
木曾塚の舊草よ在て敵戸の人よ對す  
草の戸をまれや穂蓼よ唐からし

柳陰軒よて

散柳あるしも我も鐘を聞

全昌寺よて

庭掃て出はや精舎よ散柳

畫讚

雞頭や鴈の來る時なを赤し

壁田よて二句

病鴈の夜寒よ落て旅ねかな



海士の家の小海老よましろいと哉  
目よかふる雲やまはしのわたり鳥  
奈良よて

ひいと啼尻聲悲しよるの鹿  
いたしいて落穂拾ひむ關の前  
俱利伽羅や三度起ても落し水  
杉の竹葉軒といふ草庵を尋て

粟稗よまつしくもわらす草の庵  
故人よ逢て

冬瓜や互よかはる貝の形  
西行谷

芋洗ふ女西行あらぬ哥よまむ  
山中十景題高瀬漁火

かすり火よ鯁や浪の下むせひ  
嵐雪か四國よ渡る時

旅鳥二百十日も船支度

のまもとも吹るよのはけ哉  
吹飛す石は淺間の暴風かな  
三日月やはや手よ障る草の露  
小夜の中山よて

馬よ寝て残夢月遠し茶の煙  
神路山よて

三十日月なし千とせの杉を抱嵐  
見る影やまた片形も宵月夜  
雲折く人を休る月見かな  
いさかななる處よ旅立て舟の中よ一夜を  
あかして曉の空蓬よりかしらをさし出し  
て

明ゆくや二十七夜も三日の月  
川舟やよい茶よひ酒能月夜  
坐頭かど人よ見られて月見哉  
古將監か古實を語りて



月やその鉢の木の日の下おもて

鹿島根本寺よて二句

月はやし梢の雨を持なから

寺よ寝てまこと良ある月見か

賤の子や稻すりかけて月を見る

いづもの葉や月まつ里の焼鳥

大曾根成就院より歸る時

何事の見立まも似す三日の月

あの中よ詩繪書たし宿の月

姨捨山よて

姉や姨ひとり泣月の友

いさよひもまた更科の郡かな

善光寺よて

月かけや四門四宗も只ひとつ

仲秋の月の更科の里姨捨山よ慰めかねて

猶あはれさの目よもはなれすなから長月

十三夜よありぬ

木曾の瘦もまたなほらぬ又後の月

淺水の橋をわたる俗よあさくつと云清少

納言の橋いと有一條あさむつのと書る處

とそ

あさむつや月見の旅の明はなれ

月見せよ玉江の蘆を茹ぬ先

湯の尾塔下

月よ名をつくみかねてやいもの神

燈山

義仲の寢覺の山か月悲し

氣比の明神

月清し遊行のもてる砂の上

敦賀夜泊

名月や北國日和さためなき



濱

月のみか雨は角力もなかりけり  
仲秋の夜つるか泊りぬあるしの物かた  
りは此海は鐘の沈みて侍るを國の守のあ  
まを入れて尋させ給へと龍頭下さまは落て  
引揚へきたよりあしと聞て

月いつこ鐘のまづめる海の底  
木因亭よて

隠れ家や月と菊とよ田三反  
斜嶺亭

戸をひらけの西は山あり伊吹と云花よも  
よらす雪よもよらす只是孤山の徳あり

其まよも月もたのまし伊吹山  
伊勢の國又玄か宅よとゆめられ侍るころ  
其妻の男の心よひとしく物毎まめやかよ  
見へけれの旅の心を安くし侍りぬかの日

向寺の妻髪を切て席をまうけられし心は  
せ今更申出て

月さひよ明智か妻の嘶せむ  
悼遠流天實法印

其靈を羽黒よかへせ法の月  
名月のふたつ有ても瀬田の月

兼題  
夏かけて明月暑き涼みかな

打出の濱よて  
いさよひや海老よるほどの宵の闇

既望賦二句  
鎮明て月さし入よ浮は堂

安くと出ていさよふ月の雲  
正秀亭初會

月代や膝よ手を置宵のやと  
古寺衝月



月見する坐よ美しき良もなし  
月見の賦

米くるし友をこよひの月の客  
義仲寺まで

三井寺の門たしかはやけふの月  
名月や湖水よりかふ七小町

名月や兒達ならふ堂の椽  
名月や鶴脛高き遠千瀉

名月や我を筆架のかけほうし  
名月やわか家よ展る門徒坊  
消息

水あふらなくて寐る夜や窓の月  
柴のいほとさけいやしき名なれとも世

よこのもしき物よそ有ける此歌の東山よ  
住ける僧を尋て西行上人のよませ給ふよ  
し山家集よのせられたりいかなる主しに

やとこのもしくしてある草庵の坊よつかり  
しける

柴の戸の月や其まゝ阿彌陀坊  
石山よ詣ける道

橋桁のまのふの月の名残かな  
旅窓の長夜

こゝのたひ起ても月の七つかな  
深川

名月や門よさし來る潮かしら  
柱の杉風枳風か情を削り住ひは曾良傳水

か物數寄を侘を名月のよそほひよと芭  
蕉五もとを裁たり

はせを葉を柱よかけむ庵の月  
深川の末五本松と云處よ舟をさして

川上と此川下や月の友  
いさよひりわつかよ聞のはしめ哉



嵐蘭初七日詣墓

見しや其七日の墓の三日の月

東順傳

入月の跡の机の四隅かた

俗水亭よて

影待や菊の香のする豆腐串

伊賀の山中よて二句

名月の花かど見へて綿はたけ

名月よ麓の霧や田の曇

箕虫庵よて

今宵誰よし野の月も十六里

住吉の市よ立て

升買て分別替る月見かな

畦止亭題月下送兒

月すむや狐怖かる兒の供

其柳亭よて

秋もはやはらつく雨も月の形

名月や池をめぐりて夜もすから

山寒し心の底や水の月

わか宿の四角な影を窓の月

かけはしや先思ひいつ駒むかへ

棧やいのちをからむ蔦かつら

芳野夜泊

礎打て我も聞せよや坊かつま

聲澄て北斗よひしく礎かな

猿ひさの猿の小袖をきぬた哉

千里か舊里よて

綿弓や琵琶も慰む竹のかく

廬牧亭よて

蔦植て竹四五本のあらし哉

野の宮の鳥居も蔦もなかりけり

蔦の葉のむかしめきたる紅葉哉



鬼灯の實も葉もからもみち哉

よし野よて

御廟年を経てまのふり何を忍ふ草

母の白髪をおかみて

手よとらぬ消ん涙そあつき秋の霜

初茸やまた日數経ぬ秋のつゆ

松たけやしらぬ木葉のへはり付

松茸やかふれたほどり松の形

茸狩やあふない事よ夕時雨

怨水別野

籠り居て木の實草の實拾ひしや

木曾の椽うき世の人の土産かな

李由去來の二人よ

菊藜と柿とうれしき草の庵

片野望翠亭

まふ柿や一口の喰ふ猿のつら

堅田森瀬可休亭

祖父と親其子の庭や柿みかん

橙や伊勢の白子の店さらし

何喰て小家の秋の柳かけ

秋を経て蝶もなめるや菊の露

草葎の雨

起あかる菊ほのかへ水のあと

左極亭よて

はやくさけ九日もちかし宿の菊

蓮池の主翁また菊を愛すきのふり龍山の

宴をひらきけふ其酒の餘れるをすしめ

て狂吟たはふれとなす猶おもふ明年誰か

すこやかならむことを

いさよひのいつれか今朝も残る菊

山中の温泉よて



山中や菊いたをらぬ湯の匂ひ  
如行亭よて

瘦なからわりなき菊のつはみ哉  
菊の露落てひろへぬかこ哉  
田家よ舎る

稻こきの姥もめてたし菊のはな

堅田の何かし木既醫師の兄の亭よ招れし  
よみつから茶をたて酒をもてなされける

野菜八珍の中菊花なますいと芳しけれい  
蝶も来て酔を吸菊の鱧かな

九月九日乙州か一樽を携来りけれい  
草の戸や日暮てくれし菊の酒

見處のあれやのわけの後の菊  
八丁堀よて

菊の花咲や石屋の石の間  
琴箱や古物店の背戸の菊

園女亭よて  
えらさくの目よ立て見る塵もなし

奈良よて二句  
菊の香や奈良よの古き佛達

さくの香や奈良のいく代の男ふり  
くらかり畔よて

菊の香よくらかりのほる節句哉  
生玉邊より日をくらして

菊よ出て奈良と浪花の宵月夜  
菊花の讚

折ふしに酔よなる菊のさかな哉  
江上の破屋を出るとて二句

野さらしを心よ風のまむ身かな  
秋十とせ却て江都をさす古郷

憐捨子



猿を聞人捨子よ秋の風いかよ  
義朝のこころよ似たり秋の風  
秋風や藪もはたけも不破の關  
身よ玄みて大根からし秋の風  
一笑追善

墳もうこけ我泣聲の秋の風  
途 中

赤くと日につれなくも秋の風  
牛部屋よ蚊の聲弱し秋の風  
那谷観音よて

石山の石よりまろし秋の風  
贈桃夭号

桃の木の其葉散すな秋の風  
中村を過て

秋の風伊勢の墓原猶凄し  
秋かせの秋も青し栗の味

坐右の銘

ものいへん唇さふしあきの風  
暮秋のけしきを

秋風や桐ようこいて雉の霜  
伊勢紀行の跋

西東あはれさおなし秋の風  
悼松倉嵐蘭

秋風よ折て悲しき桑の杖  
野水か旅行を送る

見送りのうしろやさひし秋の風  
曲翠亭題夜寒

乳麵の一下焚立る夜寒かな  
鹿鳴神前

此松の實生せし代や神の秋  
留 別

送られつおくりつ果の木曾の秋



さらてさへ秋よ野寺のひとつ鐘  
種の濱よて

さひしさを須广も勝たる濱の秋  
幻住菴よて

旅癖や寝冷わつらふ秋の山  
小名木澤桐奚興行

秋よそふてゆかはや夢の小松川  
旅懐

此秋の何て年よる雲よ鳥  
車庸亭二句

秋の夜を打崩したる嘶かな  
あるしの夜遊ふことを好みて朝寝せらる

く人へ宵寝のいやしく朝起のせはし  
おもしろき秋の朝寝や亭主ふり

木因亭よて  
死もせぬ旅寝の「栗」の秋のくれ

いく秋のせまりて瞿子よかくれけり

深川の庵  
棹郎の尻聲さふし秋のくれ

枯枝又鴉のとまりけり秋のくれ  
雲竹の像

こちらむけ我もさひしき秋の暮  
所思

此道やゆく人なし又秋のくれ  
行秋や身よ引まよふ三布蒲團

蛤のふた見よわかれゆく秋を  
内宮の事をさまりて外宮の遷宮をかみ

侍りて  
たふとさよみなおしあひぬ御遷宮

ゆく秋のなほたのもしや青蜜柑  
芝柏亭よて

秋深き隣の何をする人を



清水の茶店も遊ふ  
松風の軒をめぐりて秋くれぬ  
行秋や手を廣けたる栗のいか

考證

悼仙風

手向けり芋の蓮も似たるどて  
壽海長老我草の戸よして身まかり侍るを  
葬て

何事もまねきはてたる芒かな  
武藏野の月の若生や松島の種  
夕かほやかいまはるほど秋の來ぬ

よし野西行庵

硯洗ふ智恵の出たり苔清水

一草庵の席上饗應を制して

えら露のさひしき味をわするくな

瓢の銘

米のなる時の瓢よをみなへし  
ゆのえしの床よも入やさりくす  
等裁よ尋わひて

名月の見處問ん旅寐せむ

人よ米をもらひて

世の中は稻蒨ころか草の庵  
鮭馬の影見む關のわたし舟  
秋の野や草の中ゆく風のおと  
嵐雪よかくる

さひしさを問てくれぬか桐一葉  
名月や西よもほしき窓ひとつ  
秋のくれ客よ亭主の中柱

此吟は井伊家の邸に許六を尋ねし時許六



たまし家あらず依てかれか歸るを待  
うちの作なりとそ其中柱といふものい今  
も猶井伊家ありと云

發句冬之部

寛文延寶天和年中

月の鏡小春よ見るや目の正月  
ゆく雲や犬の迹ほへ村時雨

戸田權太夫亭

一しくれ礫や降て小石川  
いつく時雨傘を手よ提て歸る僧  
火吹竹音やまぐれて小豆食  
むら時雨てれふれ町の名なるへし  
石かれて水まほめるや冬もなし

深川冬夜の感

櫓の聲浪を打て腸氷る夜や涙  
あら何ともなやきのふい過てふくと汗  
貧山の釜霜よ啼聲寒し  
茅舎買水

氷苦く偃鼠か咽をうるほせり



小野炭や手習ふ人の灰せり  
盥ふしてもいさとつてむ都鳥  
龍安寺よて

山鳥よ我もかもねん宵まとひ  
白炭やかかの浦島か老の箱

張笠の説

世よふるもさらよ宗祇のやとり哉  
霜かれよ咲の辛氣の花野哉  
浪の花と雪もや水よかへり花  
けさの雪根深を國の葉かな

耕月亭よて

雪をまつ上戸の貞やいな光り  
時雨をやもどかしかりて松の雪  
あられまじる帷子雪の小紋哉  
黒森を何といふとも今朝の雪  
子よおくれたる人の許よて

まほれふすや世のさかさまの雪の竹  
笠の緒や咽喰まむる不二の雪  
雪花の南の枝や遅さくら

みちのく名所の内猫山

山の猫眠りはいてや雪のひま  
雪の日や羅紗の羽折またしき靴  
夜着の重し吳天よ雪を見るあらむ  
雪の竹笛作るへう節あらむ  
ゆきの朝ひとり千雛をかみえたり

名所八体の内

松島や雪のまら地の衣くはり  
千代をふる天のてんつるあられ酒  
わすれ草菜飯よつまむ年の暮  
此わすれなかるし年の淀ならん  
乾雛や何かし殿の毛唐人  
なりよけりなりよけりまて年の暮



一休か土器かはむとしのいち

貞享元禄年中

元禄辛酉初冬九日素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふまたうけ侍ると  
其頃の花いまためくみもやらす菊花ひ  
らく時齋重陽と云る心より且展重陽  
のためしなきよしもあらねの猶秋菊を詠  
して人くをすしめられける事なりぬ  
菊のかや庭よきれたる履の底  
桐葉のぬし志淺からさりけれぬはらく  
としまらむとせしほとよ

此海よ草鞋を捨ん笠時雨

道のほとりて時雨あひて

笠もなき我をしくるしかこり何と  
草枕犬もしくるしか夜の聲  
時雨ゆくや舟の帆綱よ取付て  
雞の聲よ時雨る牛屋哉  
人の許へはしめてゆきて  
はつ時雨初の字を我時雨哉  
はやこなたへといふつゆのむくらのやど  
うれたくとも袖をかたしきておどまり  
あれやたひ人

旅人と我名よれむ初時雨  
一屋根はしくるし雲か不二の雪

伊賀山中

初時雨猿も小みのをほしけ

舊里の道すから

しくるしや田のあら株の黒むほと

美濃垂井宿矩外か許よ冬籠して



作り木の庭をいさめる時雨かき

嶋田驛塚本か家よ至る

宿かして名をなのらする時雨哉

馬士のしらし時雨の大井川

許六亭よて

けふはかり人も年よればつ時雨

新稿の出初てはやきしくれ哉

山城へ井出の駕かるしくれかな

草庵

人くを時雨よ宿の寒くとも

支梁亭よて

口切よ堺の庭そあつかしき

爐開や左官老ゆく鬢の霜

熱田よて

まのふさへ枯て餅かふやとりかな

霜の後筆をとひて

花みさ枯て哀をこぼす草のたね

菊跡や物よまされぬ蕎麥の莖

旅よ病て夢の枯野をかけ廻る

骨柴や斯と見るより蝶のから

大根引といふとを

鞍壺よ小坊主のるや大根引

消息

口上よ書落しけり士大根

玄虎子旅館よて菜根を喫して終日丈夫よ

談話す

ものふの大根からき嘶かな

菊のくち大根の外更よあし

笠の長途の雨よほころひ紙衣のとまりと

まりのあらしよもめたり侘盡したるわひ

人我さへあはれよあはしけるむかし狂哥

の才士此國またどりしとを不圖思ひ出て



申侍る

狂句木からしの身の竹齋も似たる哉

竹の畫讚

木からしや竹もかくれてしつまりぬ  
冬枯や世の一色も風のかと  
冬かれの磯も今朝見るとさか哉  
木からしや頬腫いたむ人の貞

耕雪亭別墅にて

木枯も句ひやつけしかへり花

三河新城の家士菅沼權右衛門宅

京も倦て此木からしや冬住ひ

鳳來寺も參籠して

風も岩吹とかる杉間かな

多度の權現を過る

宮人よ我名をちらせ落葉川

留守の間もあれたる神の落葉哉

大通庵主道圓居士芳名を聞と久しきま

まみえむ事を契りしは終も其日をまた

す初冬一夜の霜ときへぬけふいはや一め

くりもあたりぬといふを聞て

其かたち見はや枯木の杖の長

大津を過る

三尺の山もあらしの木葉かな

月の澤ときこへける明照寺も旅の心をす

まして

尊かる涙や染て散もみち

當寺此平田も地をうつされてより既も百

年よふよふとかや御堂奉加の辞も日竹樹

ひそかよ土石老たりとまとも木立物ふり

て殊勝も覺侍りけれ

百年のけしきを庭の落葉かな

ゑひす講酢賣も袴着せよけり



推うりの鴈あはれえゑひす講  
菊雞頭きり盡しけり御命講

消息

御命講や油のやうな酒五升

訪草葺

冬庭や月もいとなる虫の吟

冬籠又よりそはむ此柱

金屏の松の古ひや冬籠り

贈酒堂

湖水の磯をはひ出たる田よし一匹芦間の  
蟹のはさみをかそれよ牛よ馬よもふま  
るしとなかれ

あまはつや田螺のふたも冬籠り

權七又示す

舊里を去てまはらく田野よ身をさすらふ  
人あり家僕何かし水木の爲よ身を苦しめ

心をいたましめて其猿奴阿段か功をあら  
そひ陶侃か故奴をまたふ誠や道の其人を  
とるへからす物の其かたちよあらず下位  
よ在ても上智の人ありといへり猶石心鐵  
肝たゆむとなかれあるし其善をわする  
へからす

先祝へ梅をこころの冬こもり

千川亭よ遊ひて

折くよ伊吹を見てや冬籠

防川亭よて

香を探る梅よ藏見る軒端哉

熱田梅人亭蘆裏の閑を思ひよせて

水仙や白き障子のともうつり

三河よて白雪と云るものし子二人へ桃先  
樹後の名をあたへて

其句ひ桃よりしろし水仙花



さし籠る 棒の 友や 冬菜 賣

此里をほひといふとむかし院の御門の  
響させ給ふ地なるよりてほう美といふ  
よし里人のかたり侍るをいつれの文も書  
とどめたるともしらす侍れともいともか  
しこくおほえ侍るましま

梅 つのき 早咲はめむほみの里

打 よりて花入 探れ梅つひき

寒 菊や粉練のかゝる白のはた

池下の茶店よて

松葉を焚て手拭あふる寒かな

吉田の驛よて

寒けれと二人旅ねそたのもしき

綿弓や窓よ入日の影さふき

三河國鳳來寺に詣る道の邊より例の病ひ  
發りてふもとの宿よ一夜明すとして

夜着ひとつ祈出して旅宿かな

李下か妻の悼

かつさふす蒲團や寒き夜や凄き

元起和尚より酒を賜りけるかへし奉り  
ける

水寒く寝入かねたるかもめ哉

仙化か父の追善

袖のいろよこれて寒し濃鼠

盤鯛の齒莖もさふし魚の店

葱白く洗ひ立たるさふさかな

熱田よて

海暮て鴨の聲ほのかよ白し

桑名古釜亭よて

冬牡丹千鳥よ雪のほとしきす

一ひきのはね馬もなし川千鳥

ねさめり

松風の里

呼續り



夜明てから 笠寺の 雪の降日

星崎の闇を見よとや啼千鳥

杜國を訪ひける道すから

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎  
驚よつゝみてぬくし鴨の足

杜國か不孝を伊良古崎よ尋て鷹の聲を折

ふし聞て

夢よりもうつしの鷹そたのもしき

あまつ繩手よて

すくみゆくや馬上よ氷るかけはらし  
生なからひとつよ氷る海鼠かな

范蠡かちやうなんの心をいへる山家集の

題よならふ

一露もこほさぬ菊の氷かな

芹焼やすそ輪の田井の初氷

瓶われる夜の氷のぬさめ哉

十二月九日初雪降の悦ひ

初雪やさいはひ庵よまかりある

曾良何かしの此あたり近くかりよ居を卜

て朝赤夕なよ訪つとはる我くひ物いとな

む時の柴折くふるたすけとなり茶をよる

夜の來りて軒をたしく性隠閑を好む人よ

てましはりこかねをたつある夜雪よ訪れ

て

君火をたけよき物見せむ雪丸け

初霜や菊冷初る腰の綿

抱月亭よて

市人よいて是賣む雪の笠

おもしろし雪よやならむ冬の雨

杜國亭よて中あしき人のとなど取つくる

ひて

雪と雪こよひ師走の名月か



箱根こす人もあるらし今朝の雪  
ためつけて雪見よまかる紙衣哉

旅人を見る

馬をさへ詠る雪のあした哉

深川八貧の中

米かひよ雪の袋や投頭巾

寒山月畫賛

庭掃て雪をわするゝ帚哉

閑居箴

酒のめいいとねられねよるの雪

鳴海驛黃言亭よて

京まてのまた半空や雪の雲

熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

去年の侘寐を思ひ出て越人よ贈る

二人見し雪のとしも降けるか

憶信濃羈旅

雪散や穂屋の芒の菊残し

いさしら雪見よ轉ふ處まで

山中よ子供と遊ひて

雪の日よ兎の波の髭つくれ

元祿巳冬奈良大佛再興

はつ雪やいつ大佛の柱たて

初雪や聖小僧の笈のいろ

おのか音の誰人となん世よさたせられて

老の後志賀の里よ隠れ侍となり今大津

松本あたり智月と云老尼の許よ尋て斯る

事など語り出けるついでおもしろけれ

少將の尼のはあしや志賀の雪

湖水眺望

比良三上雪さしわたせ鷺の橋

大雪やはしひとり住藪の家



三秋を経て深川の艸庵へ歸けり舊友門  
人日々はむらかり來ていかよと問ひこた  
へ侍る

ともかくもならてや雪の枯尾花  
日頃よくむ鴉も雪のあした哉

小町の畫讚

たふとさや雪降ぬ日もみのと笠

草菴又士あり

木枕のあふらぬくふやよるの雪

深川大橋半かすりける時

初雪やかけかすりたる橋の上

初雪や水仙の葉のたわむまで

竹の畫讚

たわみての雪まつ竹のけしき哉

湖水から光り出しけり比良の雪

霜月のはしめ武江に至る

都出て神も旅ねの日かすかな

深川大橋成就せし時

有かたやいたしいてふむ橋の霜  
夜すからや竹氷らするけさのしも  
からくと折ふし凄し竹の霜

土屋四友子を送て鎌倉までまかる

霜を踏て蹠跋ひくまで送りけり

穠田も霜の花見るあしたかあ

かりてねむ案山子の袖や夜半の霜

紙子よも霜や置かど撫て見し

杜國か庵を尋二句

されのこそ荒たきまゝの霜の宿

麥生てよき隠家やはたけむら

葛の葉のおもて見せけりけさの霜

心地あしくて欄木起倒子へ万の事いひつ

かいすどて



くすりのむさらても霜の枕哉

古き代をまのひて

霜のしちなてして咲る火桶哉  
あらかねの土よりおこる火桶かな

少年をうしなへる人よ對す

埋火もきゆや涙のみえるおど  
きりくすわすれ音よ啼火燧哉  
住つかぬ旅のこしろや置火燧  
視このむ奈良の法師かこたつ哉

曲翠旅館

埋火や壁よの客のかけほうし  
五つむつ茶の子よ並ふいろり哉

貞徳翁の讚

稚名やしらぬ翁の丸頭巾

十二月九日一井亭まで

旅ねよし宿の師走の夕月夜

月えろき師走の子路かねさめ哉  
河豚汁や鯛もあるのよ無分別

ある家よ古き奴僕ありてかたく聖のをし  
へを守る

兄弟のくすしよくむやふくと汗

桑名よ遊ひて熱田よ至る

あそひ來ぬ鯛釣かねて七里まで  
鴈さわく鳥羽の田面や寒の雨  
いさ子供はしりありかむ玉あられ

自畫自讚

いかめしき音やあられの檜木笠  
石山の石よたはしる霞かき

膳所の草庵を人く訪ひける時

あられせよあしらの氷魚をよて出さん  
奥或人文

冬しらぬ宿や糶する音あられ



如行亭よて

琵琶行の夜や三弦のおとあられ  
雑炊よ琵琶さく軒の霞かな  
いさみ立鷹ひき居るあられ哉

落柿舎よ鉢叩をまちて

長嘯の墳もめくるかはちたしき  
納豆さる音えはしまて鉢たしき  
から鮭も空やの瘦も寒の中  
月花の愚よ鍼立ん寒の入  
かくれけり師走の湖のかいつふり  
年くれぬ笠着て草鞋はきながら

自得箴

愛たき人の數よも入む老の暮

書讚

ゆく年や汝か親の小松うり  
うかくと年よる人や古曆

年わすれ三人よりて暗嘩かな  
煤掃や暮ゆく宿の高いひき  
年の市線香かひよ出はやな  
月雪どのさりけらし年のくれ  
旅寐して見しや浮世の煤はらひ

旅行

煤掃の杉の木間の嵐かな  
すしはさりののが棚つる大工かな

歳暮の詞

古さとや膺の緒よ泣年の暮  
ぬす人よあふた夜もあり年の暮  
何よ此師走の市よゆく鴉

五百丸へ元服の祝として

春や立またた春を見む此師走  
節季候の來れの風雅も師走哉  
行脚の五器一具浪花よ残し置たるを年經



て路通か贈りけるを

是や世の煤も染らぬ古盒子

洛の御靈別當景桃丸興行

半日の神を友よやとしわすれ

また埋火のさえやらす臘月末京都を立出  
て乙州か新宅も春をまちて

人よ家をかひせて我の年わすれ  
魚鳥のこころのしらす年のくれ  
ゆく年やくすり又見たき梅の花  
せつかれて年わすれするさけん哉  
蛤のいけるかひあれ年のくれ

素堂亭年忘

節季いを雀の咲ふ出立かな  
分別の庭たしきけり年の暮  
有明も三十日よちかし餅の音  
海ある處も東ねたる柴を繪書て

### 無季之部

須戸の浦の年とり物や柴一把  
くれくって餅を符のわひね哉  
みち拜め二尺の七五三を年の暮

かちならば杖突坂を落馬かな  
朝よさを誰松島そ片こころ

酒のみ居たる人の繪よ

月花もなくて酒のむひとり哉

貞徳宗鑑守武之畫像

三翁の風雅の天工をうけえて心匠を萬歳  
も傳ふ此かけも遊んもの誰か俳意をあふ  
かさらんや

月花のこれやまとのあるし達



題花生

此槌のむかし椿か梅の木か  
四山の銘  
物ひとつ瓢はかるき我世かな  
布袋書讚  
ものほしやふくろの中の花

考證

越の新瀉よて

海よ降雨やこひしき浮身宿  
我爲よ日はうらく冬空  
深草や是も淺草火鉢かな  
書讚  
馬はくく我を繪よ見る枯野哉

はしめり夏野と云吟あんど一直有しよや  
猶書讚とあれ訂正の爲爰も擧

餅花やかさしよさせるよめか君  
大年の夜ぬすみあひて

梅干よかよふ黄鳥あはれなり  
幸崎夜雨

琵琶の湖雨よ疎顔か松の律  
栗津晴嵐

さそ野分人の淡たつ市の聲  
矢橋歸帆

夕かすみ赤石の浦を帆のおもて  
比良暮雪

さそへ雲白衣の天狗比良の雪  
石山秋月

沙やかぬ須磨よ此湖秋の月  
瀬多夕照



遅き日よかわかぬ網の左り袖

堅田落鴈

鳥の文かたしの鴈よ片便宜

三井晚鐘

盃よ片はれいあし花の鐘

右八景の宗房の時の吟なりと云

九のとせの春秋市中よ住わひて居を深川

の邊りよ移す長安の古來名利の地空手よ

して金なきもの行路かたしといひけん

人のかしこく覺侍るい此身のともしき故

よや

栗の戸よ茶を木葉かく嵐かな

消息

三十里尾張大根のはなしかな

畫贊

たのむそよ寝酒なき夜の紙衾

けし炭よ薪わる音か小野の奥

葺ようつりて

深川や根こしの芭蕉雪かこひ

頭巾着た貝さしこむや繩すたれ

ふたしひ芭蕉庵を造りいとなみて

あられ聞や此身のもとの古柏







たまさかよとよふもの下駄の音  
なを山ふかく入し居風呂  
よしやよしこぬか袋の濁る世よ  
千里をかける馬士のあれども  
西の月見ぬ六道の札の辻  
ゑんまの町く引わたす霧  
煩惱の本綱中綱末の露  
人足あれ山姥もあり  
谷の戸をたしき起して觸流し  
諸鳥の小頭うくひすの聲  
花をふんてすしめ千の歩行の衆  
上野下屋の竹の春かせ  
鏝目貫朝の霜よ朽果て  
鐘の毛され虫の音をいれ  
事あらはやせたれどあの花すしき  
もしとせの餓鬼も人数の月

青章青章青章青章青章青章青章青章青章

大無盡世尊を親よ取立て  
公儀の掟のかれ給のす  
土も木も三間はり野つら石  
此山ひとつ隠居料よと  
不二の嶽いたしく雪を剃こほし  
人穴ふかきはや桶の底  
蝙蝠や三角の紙の散まよふ  
山椒つふや胡椒なるらむ  
小枕やころくぶし引たふしの  
臺所より下女のよひ聲  
かよひ路の二階の少し遠けれと  
かしここの揚屋高砂の松  
とりなりを長柄の橋もつくるこ  
能因法師若衆のとき  
照つけて色の黒きや侘つらむ  
わたもちのみいる眼前の月

青章青章青章青章青章青章青章青章青章



飢饉とし弱りはてぬる秋の暮  
 多 くの 傷 寒 萩 の 上 風  
 一葉つし柳の髪やはけぬらん  
 これも虚空よはいしけし〜  
 判官の身うき雲のさためなき  
 時 雨 降 置 む かし 淨 瑠 璃  
 ふもくれたらうさいかたはち山端よ  
 松 吹 風 や 風 呂 屋 も の な る  
 君 ことしよもみの二布の下紅葉  
 契りし秋は産妻なりけり  
 月すこく草履のはな緒中絶て  
 河内の國へかよふ飛石  
 四疊半くつ屋の里も浦近く  
 浪よ 芦垣仕つたり  
 時の花入江の鴈の中歸り  
 やわら一流松よ藤まさき

全章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

名いてさらの魔法よ春をどめて見よ  
 七りんひしく入相のかね  
 薬鍋三井の古寺汲あけて  
 落させられし花のうち疵  
 階の九ツ目より八目より  
 湯立の釜よ置合あり  
 既神よしりあからせ給ひけり  
 白髭殿の御年よられて  
 つくくと向またてる鏡山  
 わけ入部屋の小野の細道  
 忍ふ夜の狐のあなよまよふらむ  
 あふらよ揚しねつなきの聲  
 唐人も夕の月ようかれ出て  
 古文眞寶氣のつまる秋  
 酒の露たのけ起つて白雲飛  
 天狗たふしや人のたふれや

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章











その夜の不二も足打の山  
かなな屑たいまつはつとふり立て  
見よく成佛はきための虫  
鶏の御齋をす今朝の月  
龍田の紅葉豆腐四五丁  
むら時雨衆道くるひの二道も  
人死の戀風さわくなり  
大火事を袖行水もふせき兼  
やうくこゆる土手の松山  
日本橋ちんは馬もて踏ならし  
方と見せうそ佐野の源介  
かいつかみはねうち拂ふ雪の暮  
鶯のかへつて鶯となりけり  
浪も聲声のものいふよの中も  
何とて松のすねて見ゆらん  
うす柿も茶もわかれぬ峰の雲

青章青章青章青全章青章青章青章青

浅間の土を焼かへしえて  
物語伊勢白粉とよまれたり  
平家の秋も瘞あれゆく  
かみそりも内侍所も水の月  
のうれんかけしとこやみの霧  
衣屋も既も彌勒の花待て  
かねの御嶽を両替の春  
岩橋やりんどかけたる一かすみ  
天よつらぬく虹のつらばり  
その四隅多門の手木を横たへて  
日傭の札も悪魔おさむる  
獨過都鄙安全もなすへしと  
慈悲のかみよりさかる米の直  
人として思ひさらんや親の五器  
願もよつて雪の竹箸  
いきの松ひねり艾葉の百までも

章青章青章青章全章青章青章青







練釘のわつかの事を今つのり  
露か積つて鐘鐃の功德  
嘘つき坊主も秋や悲むらん  
其一休も見せはやの月  
花のいろ朱鞘を殘す夕間暮  
いつやきつけの岸の山ふき  
よし野川春もなかるゝ水茶碗  
紙袋より粉雪解ゆく  
風青く楊枝百本削るらん  
野郎揃の紋のうつり香  
双六の菩薩もこゝよ伊達姿  
衆生の錢をすくひとらるゝ  
目の前よ島田金谷の三瀬川  
から尻沈む淵ありけり  
小蒲團よ大蛇のうらみ鱗形  
鉄の飯櫃湯となりし中

章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章

一二虹跡のさひしく暮過て  
月のむかしの親仁友たち  
筆無筆なわひそきりくす  
胸算用のすしきみたるゝ  
勝負も半の秋の濱風よ  
我よなりたる波の關守  
わらはれて石魂忽飛千鳥  
古い地藏の茅原ふけ行  
盪うりの人かよひけり跡見へて  
文正か子を戀路ならなん  
今日より新狂言を書くとき  
物よならずよものおもへどや  
ある時の藏の二階よ追こみて  
何そと問の猫の目の露  
月影や贅の琥珀よ曇るらん  
隠元ころもうつしか夢か

徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章



法の聲即身即非花散て  
名残の鴈も一くたりゆく  
三上下の越のまら山うす霞  
百萬石の梅よほふなり  
ひかし棹今の帝の御時よ  
守隨極の哥の撰集  
掛乞も小町か方へといそきい  
これなる朽木の横よ霖さうな  
小夜あらし扉落てり堂の月  
ふる入道いうせよけり露  
海尊や近い頃まで山の秋  
さる柴人かとの葉の色  
繩帯の其さまいやしと書れたり  
これそ雨夜のかち合羽なる  
飛のりの馬からうたや時鳥  
森の朝風狐てりないか

青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章

三二柱彌右衛門と見へて立隠れ  
三笠の山を引かふりつし  
萬代の古着買うと呼ふなる  
質のなかれの天の羽衣  
田子の浦波うちよせて負博奕  
不首尾て歸るあまの釣舟  
前い海入日を洗ふうしろ疵  
松か根まくら石の綿とる  
つしれとや仙女の夜なへ散もみち  
瓦燈の炷りよ倂の月  
我戀を鼠のひきしあしたの秋  
涙をみたる突きりの露  
衣装繪の姿うこかす花の風  
句ひをかくる願主白藤  
鈴の音一貫二百春くれて  
片荷のさいふめてり香久山

章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章



雲介のたな引空よ来よけらし  
幽靈と成て娑婆の小ぬすみ  
無縁寺の橋の上より落さるゝ  
都合其勢萬日まゐり  
祖父祖母はや打立や者ともどて  
鼓をいたき草鞋まめはく  
米俵口を結て肩よかけ  
木賃の夕風の三郎  
韋駄天もまはし休ふ早飛脚  
出せや出せとせむる川舟  
はしとこむ追手貞なる波の月  
すの請人か芦の穂の聲  
物の賭振舞よする天津鴈  
木鐘子の尻山の端の雲  
人形の鉄の下より行あらし  
はたけよかはる芝居淋しき

徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳

此翁茶屋をすする事七度まで  
住よし諸白砂こしの海  
淡路瀉かよひよ花の香をとめて  
神代以來お出入の春

説  
徳章青  
筆

延寶六戊午春

さそな都淨瑠璃小歌の夏の花  
かすみとしもよ道外人形  
青い面咲ふ山より春見へて  
かはらけの瀧のめいのむほど  
聲かたつ嵐よ浪の遊ひ舟  
鴈よ千鳥よ阿房友たち  
五間口さひしき月よ其名をうる  
松を證據よ禮金の秋  
ウ手かけもの相取のやうよ覺たり

信信  
桃信信  
徳章青徳章青徳章青徳章青徳



思ひのきつあまめころしえて  
木綿うらある夕暮の事なるよ  
門ほとくとたしく書出し  
録田殿進退むきをたのまれて  
二人の若の浪人小姓  
竹馬もちきれたりとも此具足  
つしけやつしけ紙はりの母衣  
心太水のさかまく處をい  
浪せき入て大釜の淵  
落瀧津地獄の底へさかさまよ  
鉄杖鯉のほねを碎くか  
酒の月後妻打の御振舞  
隣の内儀相客の露  
眉を取袖ふさかする花芒  
野風も今の世帯持なり  
鍋の尻入江の汐よ氣を付て

章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章

のつへいうしと鳴の鳴らむ  
山かけよ精進落て松の聲  
三十三年杉たてる庵  
調帳や俊成作の本尊かけて  
寂蓮法師小僧新發意  
いろは韻楨立山もなかりけり  
雲を増補よ時雨降秋  
影ひとり長月頃の氣根もの  
野の宮の夜すから裕一枚  
駕昇もうき世をわたる嗟峨なれや  
まよひ子の母腰かぬけたり  
傷寒を人くいかよとしかめしよ  
悪鬼と成て姿の其まも  
正三か書置れたるものかたり  
こしよ道春これもこれとて  
前の池東叡山の太やしき

徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章



花のさかりよ町中をよふ  
青柳の髪ゆひくくやい  
舞臺よ出る胡蝶うくひす  
連ふしよは唄うたひの蛙啼  
禿童か酌よ雨の夕くれ  
戀の土手雲な隠しそ打またけ  
御朱印使風の玉章  
心中よ山林竹木指さると  
末世の衆道菩提所の月  
三才の和尚のうら氣秋ふけて  
彌陀のかささま消やすき露  
蓮のいと組屋の店の風涼し  
わかいいものよる暖簾のなみ  
戀の淵水よおほる人相あり  
着たけの思ひ慎てよし  
うき中の中下焦もかれて弱くと

青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章

家くの書よ寝汗かゝるよ  
まなひ打大夜着の裏おもてまて  
鞍馬僧正床入の山  
若衆かたまつ筑紫よ彦太郎  
かつらすかたや右近なるらん  
暮の月橘の精あらはれて  
すもよ山もよ悉皆成佛  
言見性の眼の光り錫の鉢  
轆轤のめぐり因果すなはち  
ゑいやとさ夏よひとつの堅いもの  
まきかねとして十貫目はこ  
大八やまのひ車の忍ふらん  
日雇をめして夕かほの宿  
山雀の柿禪よ尻からけ  
青茶の目白羽折きてゆく  
膏藥よ木實のうみやあかすらん

章青徳 章青徳 章青徳 章青徳 章青徳 章青徳 章青徳 章青徳 章青徳 章青徳











土用まれ山ハ紺地の青あらし  
谷水たらしえて蓼酢のとし  
賣風者金柑淵ま投捨る  
吹矢を折て墨染の月  
秋の哀隣の茶屋もはやらね  
まつ虫鈴むし轡たふる  
戀草を連て走し末かれて  
其業平ま請人やなき  
木賊色の狩衣質ま置し時  
ひんほう神の社見かきる  
出雲まて世間嘯のわる口  
松江の浦の相店の凧  
ぬり桶ま鱸のわたをつみかけて  
平目白うらむく黒鯛  
花なるらん龍の都の驕りもの  
父大臣の金つふす春

青徳章全徳章青徳章青徳章青徳章青

三手道具や十二ひとへのうす霞  
笈の中より遠山の月  
小男鹿の妻をとられな宿かすな  
公儀のお觸むさし野の秋  
關所もの拂ふ露より草の露  
火付の螢とられゆくらん  
本三位綏子を張たるとくよて  
貢の箱や飴おこしなる  
かたく間ま難波の梅の兄弟  
貫之か筆朝書の春  
それのとし陶の氷解そめて  
鯁鮓さきり落す橋の下水  
釣ものよ中間の障子引はなし  
戀のやころさねたり来まけり  
買かすりまれぬ浮名を付かけて  
いつの大寄せいつの御一坐

章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章



朝比奈の三ふ様四郎さま五郎様の  
地獄やふりや芝居破りや  
小柄ぬき劔の枝のたわむまで  
滅金の日影握る修羅王  
千早振木て作りたる神姿  
岩戸ひらけて饅頭の見世  
銭の文字一分もいまた定らす  
掬のかかはる六道の月  
秋やむかし二代目の地藏出給ふ  
よるひ腹帯残し置露  
花の枝綺麗高麗さり取て  
よしめの人参甘草  
春霞氣をひき立るうす醬油  
杓子のこけて足のひよろつく  
良きはし下女どくの戦ひも  
赤前たれの旗をなひかす

徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳

酒桶よ引導の一句えめされて  
情以の人は穴くらし  
裏かへす壘破れて夢もなし  
蚤に喰れて來ぬ夜敷搔  
君はく爪の先ほと思ひぬか  
まのふるとのまくる点とり  
戀弱し内親王のほ言葉  
乳母さへあらし黒かねの楯  
疱瘡の神鬼神なりとも閨の月  
まじしてや面の張貫の露  
翁草布の衣装をひるかへし  
ぬいぐ代の青砥左衛門  
北條の宿を嵐よ尋ぬれぬ  
かれこれを潰して一よなる雲  
火雷たらしらを踏てひしくらむ  
菅丞相も本所の末

青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳



江戸の花延喜以来の時とかや  
鷺白鳥もふとろかぬ春

詠章

同年秋

於四友亭興行

須摩そ秋志賀奈良伏見でも是の  
ほのくの浦さしそへて月  
沖の石玉屋か袖の霧はれて  
足きられたてや鴈の鳴らむ  
山おろし小柴のかけよさつと吹  
えら雲かろき手水手ぬくひ  
紺淺黄鹿子ましと櫻さく  
籠の藤のつらら明ゆく  
ぬす人と三笠の春や呼ふらん  
火付の野守とらへられけり

似四桃  
春友青

青春全青全春全

草薙の風公儀より烈しくて  
御宿老よの白髭の神  
置頭巾額またとむさくなみや  
洲崎の松のひとり狂言  
てうちく真砂の鶴の子を思ふ  
涎の糸よ撥かよふらむ  
又や来る酒屋門前の物もらひ  
南朝四百八十八目米  
芳野山みたれて武士の世なりけり  
浪こす岩をきつてのはつての  
花の庭月の夜嵐ねめ付て  
青柳よわき女房あまつる  
血の道氣うらみ幾日の春の雨  
胸のけふりよさかす茶袋  
朝めしをまつ間ほどふる我戀の  
時雨の松の針立をよふ

青春青春青春青春青春青春青春青春青春



お夜詰よはひまつりし鶯かつら  
寝巻の月のいとうくらきよ  
焼亡やふんどしさわく秋の風  
芦の丸屋ようつけありけり  
浦千鳥ふまれて歸る浪のおど  
さし出の磯よ住あまのじやく  
甲斐か根や須彌の麓よ分入の  
日上人の影てらすなり  
瓦燈の火もらぬ窟よ小夜更て  
神代の鼠まくら驚く  
三明ぬれの萩原とのく鶉啼  
風よ薄のぬるい若黨  
お使よ行とも秋の果所なき  
二間はとかく文箱の露  
宿の月やりてや鞘をはつすらん  
既よよし原の合戦破れし

青春青春青春青春青春青春青春青春青春青春

はやりうたさすか名をえし其身とて  
てつち小坊主男なりひら  
冷食を鬼一口よ喰てけり  
是生滅法生姜梅漬  
煩惱の夢をさまして棚さかし  
冥きよまよふ道の紙燭て  
口惜の花の契りやぬく太郎  
ふられて今朝のあたら山吹  
三ひよんな懸笑止かりてや啼蛙  
あたまくたしよ通路の雨  
お情よあつかるほどの木なりとて  
根なしかつらのかしる涙人  
長髪の霜より霜よ朽んどの  
薬ちかひよ風寒るまて  
幾月の小松かはらや隠すらん  
とへと岩根の下女のこたへす

青春青春青春青春青春青春青春青春青春青春



磯清水汝なかれをたてぬかとい  
いかつよ情を杓てくみよる  
戀衣紺の袂よはし折て  
雲引かつく星のかよひ路  
ほとくと天の戸はその暮の月  
帝近所へ夜はなしの秋  
錦かど田樂染る龍田川  
山の時雨てすり粉木の音  
浮雲のそなたよ近き隠里  
日影を盗て仙境よ入  
幻を提灯持や尋ぬらん  
夢のやふれて杖と草履と  
まよはつれ此頃の禮お門まで  
衣を肩よかゝる仕合  
酒手乞白雲帯を解せたり  
秋風起て出るより捧

青春青春青春青春青春青春青春青春青春青春

氣違を月のさそへん忽よ  
尾を引すりて森の下草  
御神體則花の散給ふ  
つくしはるかよ春そ飛行  
捧けたる二ツの玉子かいわりて  
うちまた廣き國のかみへど  
雪隠よ伊與の湯桁も打渡し  
ふみ石九ツ中十六  
山作り硯よむかひ筆とりて  
夢窓國師もいてや此世よ  
物相を都の西よ参りつゝ  
茶の湯の古道跡の有けり  
太閤の下駄一足や残るらん  
高麗までも隣ありきよ  
秋の寢覺火入をさけて行もの  
暗氣の袖よ月を打わる

青春青春青春青春青春青春青春青春青春青春



忍ひ路の霧の妻戸をつき倒し  
喧嘩眼よくとく夕くれ  
薄情かゝりかまじき若いもの  
黒手よはねてころすのく  
追剝の跡の裳ぬけと成よけり  
蝦蟇鉄柵や吐息つくらむ  
千年の膏藥既よ和らきて  
折ふし松よ藤の丸さく  
より金の花郭公春のくれ  
山もかすみの唐て我を折

執

筆春全青全春全青春

同年秋

見渡せの詠れの見れの須亡の秋  
桂の帆はしら十分の月  
さかつきよふみをとこする鴈鳴て

似四桃

春友青

山の錦よ歌よむもあり  
ゑほし着て家よ歸ると人やいふ  
うけたまひりし日傭大將  
備よの鋤鍬魚鱗鶴のはし  
前のはたけよ峯高うして  
隠居よのおもしろき處よてい  
おし繪さまく松あり菊有  
金砂子打拂ふよも千代の秋  
みかゝれ出るお廣間の月  
木賊菊山のうしろよ長袴  
鷺か袂の木曾の麻衣  
身を墨よ何をうらみて鳴鳥  
菊見のよそ吹森の木からし  
揚錢を其後の桂の大はらひ  
長者のとき君よそありける  
供養する別れの鐘やひしくらむ

春全青全春全青全春全青春







股引脚半きそ始して  
御供よのなまくさるものゝ小殿原  
つゝく兵 鱈 大 根  
無書宿先をかけんもおとなけなし  
萬事の未來前世のあきなひ  
因果の夫秤の皿をまはるらん  
善男善四と説を給ひし  
又爰よ孔子字の忠二郎  
時よあはねの落す前髪  
不心中世よましりて何かせん  
君か唯笛我ほてつはら  
之のふ夜の取手よかゝる圍の月  
秋を通さぬ中の關口  
言寂滅の貝ふき立る初嵐  
石こつめなる山本の雲  
大地震つゝいて龍やのほるらむ

青春青春青春青春青春青春青春青春青春

長十丈の鯨なりけり  
かまほこの橋板遠く見わたして  
兼升瀬多より参包丁  
ぬれ椽や北よ出れの手盥の  
粉糠こほれて時雨初けん  
六藏か伊駒の山の雲早見  
河内<sup>の</sup>在所と<sup>し</sup>の秋風  
さられて<sup>の</sup>飯匙こほす袖の露  
貞の鍋ふた胸こかす月  
腫氣のさす姿忽花もなし  
春半よ<sup>り</sup>西瓜のく  
新道の温泉なかつらす氷  
代八車御幸めつらし  
伺公する例の與三郎大納言  
たのけ狂ひのよしの軍よ  
口舌よの空腹斬て伏たりけり

青春青春青春青春青春青春青春青春青春







所作らしし諸行無常の鐘の聲  
鼓の下手くそ寺の桂の  
小芝居を君もおかしと思召  
鬼こらへすを生捕よして  
天も花よ妻の酔狂月よ影  
顰のこてふの春よなりゆく  
聲霞む猫の却て野ら遠し  
へついの下よ草のもえなん  
夜の中よ名もなき茸のされんこそ  
金輪際より島山の露  
毘沙門の鋒のえたりり國の秋  
外道の首の落かゝる月  
蓋舌の八ッよやさけぬらん  
空誓文よ霜かれし中  
藥物右近か歌を煎しても  
古川のへよぶたを見ましや

澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春

先爰よパウの二けんの杉高し  
日待よ來たか山ほととさす  
ミヤやすき夜も寝ぬよ目覺すならちやすき  
雲のいつこよ句ふ焼みそ  
内熱よ遠の嵐やよくむらん  
松のすねたる入道相國  
花の飛袖の錦の長絹きて  
肌よなきむくらくひすの聲

澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春

同

青葉より紅葉散けり旅させる  
時を感じしての残る遠山  
頬杖よかたふく月の影消て  
座頭の肩を衣うつなり  
糸よせてえめ木わかぬる秋の風

似春桃

澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春



天下 一竹田 稻色よなる  
淀鳥羽も鏡のかけよ見へたりや  
やよ郭公 天帝のさた  
黄鳥の不受不施たるも置ぬ世よ  
やかて死ぬけしきい見へす蟬の聲

盤齋うしろ向の像

世の中をうしろよなして山里よそむきは  
てしもすみそめの袖といふよ

團扇もてあふかむ人のうしろ向

奇香亭よて

鼓子花のみしか夜眠る晝間哉  
ひるかはよ米つき涼む哀なり  
子どもらよひるかはほ咲ぬ瓜むかん

平田の李由の許へ文の音信よ

ひるかはよ晝寝せうもの床の山  
夕かほや酔て良出す窓の孔

ゆふ良よ千瓢むいて遊ひけり

住ける人の外は隠れて萍生えける古跡  
を訪て

瓜作る君かあれなど夕すしみ

河野松波宅よて古き長瓢よ瓜の花をいけ  
て下よ無弦の琵琶を置て花生より落る車  
を撥面よ受たり

瓜の花えつくいかなるわすれ草

落梧なよかしのまねきよ應して稻葉山の

松の下納涼して長途の愁をあくさむほど

渦きりくどまきし蜘蛛の巢

山ひとつこぶの根おろし花の雲

耳せしかくす岸の青柳

青澄春青

同

澄青春



鹽よしてもいさことつてん都鳥  
只今のほる波のあち鴨  
川淀の杭木や龍のつたふらむ  
千年よなる葎みどり  
又どのいかなるうそを岩根の月  
高う吹出す山の秋風  
ふらすこの見へすく空よ霧はれて  
油なまよ雪そあたる  
浦島や櫛箱あけて悔むらん  
鼠あれゆく與謝の夕浪  
捨小舟米蛇の跡さひて  
藏も籬も水草生けり  
今朝みれぬてこし女の貧報神  
大酒くらひ口そへて露  
一座の月八ツのかしらをふり立て  
はくちよなりし小男鹿の角

似春桃

青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春

數芝居ぬれてや袖の雨の花  
在郷寺を宿として春  
麥飯の井や爰よ霞むらん  
妙あるのりととろしとかるし  
幽靈の紙漉舟よわかひ出  
さかさまよはひよる淺草の浪  
股くから金龍山や見へつらむ  
聖天高くつもるそろはん  
帳面のえめを油よわけられて  
なかるし年の石川五右衛門  
まかなひをすいたの太郎左いかあらん  
既よ所帯も軍やふれて  
軒の月横町さして落給ふ  
後家を相手よ戀衣うつ  
其男かねよほれたる秋更て  
鶉の床よえめころし鳴く

澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春澄青春



産出すをみくるし野とや思らん  
きせうものなき天のかく山  
さほ姫のよめり時分も花過て  
古巢よかへる仲人の鳥

澄春青春

同

實や月間口千金の通り町  
爰よ數ならぬ看板の露  
新蕎麥や三嶋かくれ又田鶴啼て  
芦の葉こゆるたれ味曾の浪  
臺處棚なし小舟こきかへり  
下男よの與市その時  
乗ものを光悦流よかゝれたり  
藥草喻るくすりこしらへ  
眞鍮の彌陀の劍を戴て

桃二葉子  
紀二葉子  
下尺子  
二葉子  
桃尺青  
ト尺青  
紀尺子  
桃尺青

西をばるかよ緑青の山  
隈どりの峯より月の落かゝり  
秋を坐布の床の山風  
燒鳥の鶉啼なる夕まくれ  
精進あけの三位入道  
かゝと寝て花咲事もあかりしよ  
又孕せて蛙子よなく  
鶯の宿り金子をねたるらん  
龍田のおくよ博奕こうして  
毛氈を御門の目よ錦かど  
そよや霓裳羅漢舞する  
破れ袈裟雲のかよひ路吹とちよ  
鼠よ羽か郭公とぶ  
押入や淀のわたりの箱階子  
織もの巻物衣笠の森  
能大夫末の時雨の松見へて

二葉子  
紀尺子  
ト尺青  
桃尺青  
二葉子  
紀尺子  
二葉子  
桃尺青  
ト尺青  
紀尺子  
桃尺青



殿様かたへゆくあらし哉  
鴈鶴も高根の雲の立まよひ  
俎板の月摺鉢の不  
昔の秋三千餘人の拂物  
釋迦もこのよを欠落の時  
放埒は精舎のかねをつかひ捨  
大坂くつれ瓦のこれる  
神鳴の火入とかやん是とかや  
鬼一口よ伽羅を喰割  
花の時千方といつし若衆  
戀のくせもの王代の春

同七己未冬  
わすれ草煎茶よつまん年の暮  
竹籬味増こし岸傳ふ雪

二葉子  
紀子  
ト尺  
桃青  
ト尺  
紀子  
二葉子  
ト尺  
紀子

桃青  
千春

濱風の碁盤よ餘る音湧て  
磯なれ衣おもくかけつし  
鼠とりこれよも月の入たるや  
紙燭けしての鶉啼え  
あし誰しや下女か枕の初尾花  
百よきさらせてたはふれの秋  
仇し世をかるたの釋迦の説れし  
あるひにてつち十六羅漢  
又男か姿かたちかはらねど  
古い羽折よ老そしらるし  
つくしと記念のやよを寢させ置  
結ひもとめぬさんさりの露  
鎖かさもれて出たる三日の月  
雲井よ落る鴈の細道  
料理人ほ前を立て花の浪  
木具屋の扇沖の春風

信

徳春青  
徳春青  
徳春青  
徳春青  
徳春青  
徳春青  
徳春青  
徳春青  
徳春青  
徳春青



住吉の沙干又見へぬ小刀砥  
 箔の姫松縫ものをとく  
 玄ははし又襷襟も袖も絞りつ  
 枕ならへし腰ぬけの君  
 詣はつす天の浮はし中絶て  
 脛の白きよ錢をうしあふ  
 滑川ひねり艾又火をとほし  
 鶴か岡より羽帚の風  
 いはうきはう利久といつし法師有て  
 朝比奈の三郎よし秀の月  
 虫の聲つしり置たる判盡し  
 いさこ長して石摺の露  
 ミとんよなも今此時をいはひ歌  
 園生の末葉あらず四竹  
 馴てやさし乞食の妹春花よ蝶  
 うくひす啼てこものさぬく

青徳春青徳春青徳春青徳春青

思ひ川垢離も七日の朝霞  
 南無や稻荷の瀧つせの春

徳春

同年春  
 夢想

さしけたり二月中旬初茄子  
 天下のおかけ我等まで春  
 雨霞古藏ひろくおさまりて  
 えろき鼠よ雪を舞ゆく  
 雲間より赤い鳥のはのくと  
 谷の戸口よかゝる看板  
 上々吉有明の空吹あらし  
 千里の羽も金箱の秋

桃 杉 仙 龜 惣 杉 而 執  
 青 風 風 風 代 風 巳 筆



同

いろつくや豆腐も落て薄紅葉  
山をまほりし櫃の下露  
手水桶雲の廣袖月もどて  
こぬかみたる風夕くれ  
ある時餅ななかむる雪の空  
猿子をたいて峰の松はら  
朝日かけ岩根の床のわき風  
あつ湯をなかつ末のしら浪  
茶巾さはき袖より傳ふ風過て  
何と軒号窓のわけほの  
五十点あるか中もほとしきす  
ひとむら雲を繼紙もなむ  
籬箔も好んてとほる瀧の糸  
音羽あらしの松も姫君  
小夜時雨忍ひせ給ひけるほどよ

衫桃

風青風青風青風青全風全青風風青

はねのあかりしきぬくの末  
風匂ふ小便壺も涙こへて  
灰吹捨る跡の夕つゆ  
唐金の秋や袂も磨らん  
ろくしやう青き山のはの月  
島の氣色胡粉も寄る花の浪  
霞もそらよけふるかさから  
そき板の破も春のえらみ來て  
鼠の跡のえ方なりけり  
米俵ふるえてますそ有かたき  
心よかなふ長持のふた  
送り膳道すこしたも隔ねの  
普請のつもりよい手廻しの  
親父殿さて法躰のいつころそ  
されの夏たけ彼岸たつ空  
秋風や奇妙發願蟬の聲

青風青風青風青風全風青風青風青



草庵さひし森の下露  
此月よ藥罐の口もものをいへ  
酒のこはれてねふりおとろく  
乗掛のたまりもあへす馬上より  
四里のはりたる關の岩角  
見渡せの雲ははかれて雪の峰  
松のふくりよ下帯もなし  
またおかし磯打波の子安貝  
灘の塩屋の櫛箱の底  
破小舟削えらけて道具とす  
木賊まかふる真砂地の露  
其原やこゝよ築せて庭の月  
かうした處か木曾山の秋  
味増すこしさひしき旅の谷傳ひ  
三千せつかいよしや修行者  
つらくおもふ火宅の門や火吹竹

風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 全 青 風 青 風

時よ和尙のときしのり賣  
花くもり五ヶ庄より空はれて  
遠の里橋おもしるの春  
薄氷や繪書か胸よ流るらむ  
羽箒とれぬ風わたる  
窓ちかきふさしみたる竹の皮  
夕日こぼれて袖へし堅まる  
小徳利の露もあらしと山やおもふ  
いろかへぬ松を砕ともし火  
でかいたそ明日の足半牛の沓  
雑水の桶のからりとした  
上方のかたき忘れぬ使たて  
はねもとゆひよかさすさし櫛  
縁付や二度かへる事なかれ  
若もみつちやよ戀やさめなん  
岩橋のよるの小袖を引かふり

青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風 青 風



一汗をかす谷川の月  
手拭の車も涙やよこすらん  
六根罪障うたかたの淡  
とろし汁生死の海をたしへたり  
もて小たしみの無面目もて  
開闢の天地既も火砂鉢  
岩戸よかくし給ふ行燈  
つらからん鬼の目かけの袖枕  
おもひの煙りはての釜焦  
茶刀の先よりらみの盡すまじ  
後妻打や相槌のつゆ  
唐衣涙あらひし袖の月  
終よの無常早蕪の灰  
花紅葉明し暮して物とし  
葛籠一荷よためし夏冬  
古郷への裁付着てや歸るらん

青全風青風青風青風青風青風青

薄の宿を思ふ獅子舞  
笛の聲あらし風吹れたり  
義經是よて雪のあかつき  
玉子酒即時も須磨を打つふし  
冷も發らぬ大涙のあと  
痴氣持藻よ住吉の音絶て  
朝霧たしむ夜着の芦田鶴  
揚屋より月の雲井も歸らるし  
乙女のすかた白編子の帯  
呉服物後藤源氏のもの思ひ  
石山寺も残るうちしき  
夕暮はは前蠟燭飛盤  
是彼岸の浪草のなみ  
六度まで渡かねたる橋こえて  
よしなき(虫損) 千万  
夢なれや(虫損) 夢なれや

全風青風青風青風青風青風青



さてく荒し軒の宿札  
朝ほらけ原よし原を打過て  
一分よいくら相場さくこ  
折そへて薪よ花の花く  
みやこのくるり山里の春

風青風全青

次韻 天和元辛酉

表題

晋伯倫傳酒徳頌樂天繼以  
酒功讚青追之續信徳七百  
五十韻

二百五十句

あいさつを爰ていまたい花なれど  
又かさねての春もあるへく  
鶯のあし雉子脛長く繼そへて

桃  
青

這句以莊子可見矣  
禪骨の力たのらよ成まてよ  
えいらく風の松よおかしき  
夢よ來ていひきを語るほととぎす  
燈心うりと詠しけん月  
微雨ゆく鹿から山の木間より  
粟よ稗さく黍はらの守り  
侘すしめ畫眉を客よ呼遣らん  
慈悲齋か閑つれくよして  
木からしの乞食よ軒の下をかす  
先祖を見しる霜の夜かたり  
燈をくらく幽靈を世よかへす  
古きかうへよかつら引かけ  
武士の刃まつりをあれよける  
女いなくよとやきとていむ  
さまあしく鏡のひつみたる恨み

楊才共

青 齋 水 青 角 水 磨 角 青 齋 水 青 角 水 齋 角







同

鴈よ聞といふ五文字をうたふ

春澄よとへ稻負鳥といへる有  
とし此秋京を寝覺て  
月を連ふそしろ烏帽子をかふる  
籠よ陶を折かたけしや  
おほこさす川そひ草の葉をまき  
いやし山路よ錢とらせける  
夕こゆる關を吠よかくれ來て  
夜盜松風の音を相圖よ  
雨の闇よすけて敵を討せたる  
舞臺よ柴の庵枝折戸  
とひやう仁上氣より世を驚きて

桃揚才其

水磨角水青角磨青水磨角

犬さつて其聲を悲しく  
寝さま侘て雪の爐よ根深温むる  
あらしのいつく帳の紙室  
女の影歸ると見へて跡凄く  
若衆氣よしてやつれ凋るよ  
ストント茶入落していのちとも  
取あへす狂歌つかまつる月  
秋の末つかた嗟峨野をとり侍りて  
薄の院の御陵をよふ  
兎飼舎人の花よ隠るめり  
子丑の番を寅よあつけて  
渾沌翠よ乘て氣か遊ふ  
朝咲しらむ馬鹿くの山  
雲の別女房よ髭の有ありけり  
よし原君をぬすみいさなふ  
棒軍勇やつ防きとしまつて

水磨角水青角磨青水磨角



つき白のかけより杵よ砵ひて  
 富の家を徳明王の守ります  
 摩訶衛門苦奈國よ生る  
 愛を捨子を捨毗盧遮河毗羅呼  
 あらしと落ちて風はやり吹  
 夜の食とほしく寝覺ける頃  
 蚯蚓の音さへ耳よ腹立  
 月の秋うらみはこへの旦夕て  
 露よまからむ妹か落髪  
 二ものいふて鏡よ貞の残り見へよ  
 繪と酒もりの興盡て泣  
 小袖かす木枕よ帶さしそきて  
 納戸の神を齋し祭る  
 煤掃之禮用<sub>二</sub>於<sub>一</sub>鯨之脯  
 雁ひの翁齒朶かりよ入  
 風いたく牛さへ氷るなりけるよ

青磨角水青角磨青水磨角水磨青

荒屋よ馬の枯尿をたく  
 慄しと白骨の鉄漿付て居たる  
 曾呂利新話をよむよ夜長し  
 禪小僧豆鉄よ月の詩を刻む  
 雷益鳴て芭蕉よの風  
 花の今朝驛よ羊を直さる  
 樓よ草鞋をつるすころ春  
 三所帯わひ息子の去年の雪を掃  
 箕を着て寒く雀とるらん  
 木からしのからしの枝よ藁干せる  
 山彦嫁を抱てうせけり  
 忍ひふす人の地藏よて明過し  
 木槿のまなしと木爪の唇  
 細殿よ鬼灯の燈籠照したる  
 踊狩衣の裾よたつ涙  
 酒の月<sub>は</sub>伽坊主の夕榮て

青磨角水青角磨青水磨角水磨青



眞桑なかしやる奥の泉水  
河骨の葉もほれ歌を書やつ  
ほむらまたへて蛇見と化す  
築地ある根の底も車引と  
天火と闇の金ほりの尊  
岷江の磯等岸等いゑら浪も  
青海苔うたひ鱒琴を弾  
花の蓬屋芝も旅泊を賞る  
月も秋とふ東金の僧  
さひしさを蕎麥も露干す豆俵  
夕かほおもく貧居ひしける  
桃の木も蟬啼ころい外も寝み  
枕の清水香蒲散くむ  
夢の身を何と松魚もさめ兼て  
我れ聞く俗の口もきたなき  
生つらに蹴折かれてい念無量

青 磨 角 水 青 磨 角 水 青 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水

泥坊消て雨の火青し  
草のおく下妻か原も暮か  
狄の里の足あらひ鍋  
配所人芦の小着布を干かねて  
あらめの菌辛螺を枕と  
心地やむ鯛も針さす生小舟  
まれも尾多喜を出し山老  
麥星の豊の光りを覺しけり  
勅使芋原の朝臣燕房  
秋を啼鴉の鳥を迎へせし  
夏やきのふのほととぎすさよ  
津の國の生田の森の初月夜  
道さままたけよ乞食チンソウ壊す  
霜下て更ゆく里の粥配り  
寺くの納豆の聲あした冴え  
よすかなき密花うらの老を泣

讀人不知

青 磨 角 水 青 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角 水



同

團炭荷ふて小野よ歸りし  
臙をそ洗ふ臙の清水影とて  
茂みかくれよ牛迹したる  
竹の戸を人まつ下女か寝わすれて  
打そ磔ようらみこたへよ  
涙のみすほんくと鳴をれ  
千とせをくさる水の埋木  
葉傳ひて寸龍花よのほるかど  
如泉法師か春力あり

世よありて家立の秋の野中哉  
誘をく月よ株萩を買  
おはれども茄子の菊よ末枯て  
鮎さひすたり海生鼠漸く

共桃揚才

角青水磨

水青角磨青水磨角青

雪の客みそれの客とふるまへり  
蘇鉄の亭よ題を設る  
樂やつこかくれて風流林と呼  
樽よ羽折を着せてあふさし  
嬉しきや女房のせいて泣付を  
戀あふれたる弟手討に  
音更て楨の戸板をこち放す  
枯ゆく宿よ冬子うむ犬  
髮結の住けむ庭の蓬して  
卒都婆の男ゆかた凋れる  
骨刀かゝらけ鏝のもろさへ  
瘦たる馬の影よ鞭うつ  
内よ寝てもこころのふ羈旅  
米とく音の耳よ露けき  
さてもかびて簀子折たく秋しもそ  
無錢居士よて朝ふかき月

角青水磨青角磨水角青水磨青角磨水



筆耕す青磁の牛も花つけて  
燕茶水のなかれ汲らむ  
后宮の敷入車やどり経る  
ねたしや上の御若衆のさま  
頭巾かつき提て夜の雪踏の忍ぶ音  
提灯きつて霜のかけるひ  
風前の角内と身を悟りける  
入るの山ふみ狼よのり  
雷の斧丁々として音更よ  
玄く又玄し龍頭の國  
俗のいふ鹿島の海の底あるや  
朝の日の東本地赤螺  
何を覺て蛤の寝て夢見たる  
ひそかくと雨簑をもる  
月を暮夕芋の葉の片軒端  
粟かり敷て團子干ころ

水磨青角磨水角青水磨青磨水角磨青水磨青磨水

水汲起て帚尋ぬる  
釜かぶる人のまのひて別るなり  
槌を子よたたく弓の君  
古家の泣聲聞えさへなれり  
いたちのはこら風のあらふる  
麻の葉も生る小鮒を折ませて  
かた枝さすなる生の浦柚子  
きたなくて清き隣とすむ月も  
明て寝蔭をかけ渡す露  
晝夢の食たへほどよ夕暮る  
人死を待て生たはいなし  
石か日花のめてたく咲みけり  
木玉よかなて風を舞柳  
飛雨臺ノ跡ハ霞ニ空シキツ  
驢馬ノ進マサル躰キラくシ

水磨青角磨水角青水磨青磨水角磨青水磨青磨水



大根の寒越の關のこきたより  
雪のから鮭よ文付てやる  
おとろへや火桶の煙の腰寒よ  
有わひし床よ蒲團引つる  
もやくと寐入かぬくとくまたへて  
通す首の泣てたすむ  
まよひしな恨か原のめかけ塚  
横雲別之介修行し暮て  
こよひ月よ村風とや三味線を  
優しやすき涙こほすか  
秋の霜腹切草をこわれぬ  
住持ゆるして明る柴の戸  
言ふもしろく盃曲を狂ひしよ  
海老あらしたる海苔の青衣  
戀崎の松か娘の花の臺  
契り世よ残る雪の明神

水 磨 青 角 磨 水 磨 青 角 磨 水 磨 青 角 磨 水 磨 青 角 磨 水

ト向し鷺の翁のまらくと  
地の氣立て草の煩ひ  
笹深き皇居よ飯の紙帳釣  
清水の司麥を  
いつも参法味寺の醬色ことよ  
老尼断の叙ありけり  
哀餘る捨子拾ひよつかんして  
外里よ鹿の裾引て入  
松茸よ道しまかへの枯いはら  
栗の梢よ有明のいが  
侘竈よ蜚の音を忍ぶみる  
足袋さす宿よ風霜をまつ  
扇折女の夏よ捨られて  
夫の江戸よ戀わすれ咲  
むさし一步さすかよと讀てやみけり  
艶なる茶のみ處もとめて

水 磨 青 角 磨 水 磨 青 角 磨 水 磨 青 角 磨 水 磨 青 角 磨 水



夜々よ来て上るり語る聲細く  
法眼か書し武者繪とやらん  
宮造り虚の匠の名のりして  
熨斗を冠の纓よ折かけ  
いわしなる翠簾のうるめ枯残り  
故園今とへん蘭腥し  
風の月熱の御靈を鎮めける  
黄なる小僧のあやしさよ露  
山路わくいくちの笠を置忘れ  
篠の枝折を猿よことわる  
岩彦の栖を深く立のそき  
氣をうはしれし人のぬけから  
血を踏て風太刀を折音巖く  
古沓を取て野邊よ枕す  
行暮て花よ夜着から芝むしろ  
狐の酔て酔入

水 磨 青 角 水 磨 青 角 水 磨 青 角 水 磨 青 角 水

同餘興

附贅ひとつ爰よ置けり日く露  
無用の枝を立し犬蘭  
夜貞の朝咲花よあらそひて  
塵裡の四虫音を隠る之

楊 桃 其 才  
水 青 角 丸

天和二壬戌春

錦とる都よ賣む百つしし  
賣花さくら二番山ふき  
風の愛三弦の記をやはらけて  
雨双六よ雷をわするし  
宵うつり盡の陳を退りける  
せんしどころの茶よ月を汲  
霧かろく寒や温やの語を盡す  
梧桐か夕孺子を抱いて

麋 千 卜 曉 共 芭 素 似  
時 春 尺 雲 角 蕉 堂 春



孤村はるか悲風夫を恨むかど  
 媒酒旗も咲をすしむる  
 別るし馬手の山崎小鏡寺  
 猶ほれ塚を回向して過  
 袖浦もわすれぬ草のあはれ折  
 小海老爪白母をなくさむ  
 悴たる鷺の鬘を黒やかす  
 捨杭の精かいとりたてり  
 行脚坊卒都婆を夢の草枕  
 八聲の月も笠を揮く  
 味増樽ももる露深き夜の戸の  
 泣ておのしく萩の小女  
 妻戀る花馴駒の見入たる  
 柱杖も地をさるこころ春  
 陽炎の形をさして神なしと  
 紙鷲も乗て佛界も飛

非言執

雲水筆千尺曉堂蕉角雲似昨千時  
 曉時千似昨雲角蕉堂曉尺千筆

秦の代り隣の町と戦ひし  
 ねり物高く五錢よ一樓  
 露淡く瑠璃の眞瓜も錫寒し  
 蚊の聲氈も血をふくむらん  
 夜ヲ離蟻の漏より旅立て  
 槐のかくるしまて歸り見しはや  
 句落香も酒を買とてろ  
 強盜春の雨をひそめて  
 嵐更破戸矢つまよる音凄く  
 鎧の櫃も餅荷ひける  
 末の五器頭巾も帯て夕月夜  
 猫口はしる萩のさし  
 守の更霜を身も着る  
 此處難波の北の濱なれや  
 紀の舟伊勢の舟尾張船

角蕉堂雲尺似昨千時  
 時千似昨雲角蕉堂曉尺千筆



波の白浪さしなみも又おかし  
契情よ袴着せて見る心  
今宵年忘戀の榮を盡すらん  
終か枝よ小壽たてまつりける  
庭稻荷櫻よかくれて仄なる  
いたらぬ役者藝冥加あれ  
豊さわき院よ日待を催され  
かすみの外の權田樂をなん召  
紫の鯛を花よ折しきて  
齒朶のみ荒し株の宿  
去年ウラの月の三十日の月くら  
雪ものくるひ筆を杖つく  
山鳥の音よ羽ぬけ子や尋ぬらん  
鶴の箔衣ありし  
夢よ入玉落の漉雲の洞  
日を額ようつ不二の棟上

堂曉角昨尺千蕉堂雲角曉尺千似昨蕉

松髪ニッの祖父萬上下よ出立て  
城主よ靈の密柑此スル  
成トよ火あての鯉生キかへり  
旅小刀の吼ぬけて行  
世捨木や世捨の松よ名を朽て  
からすの衣堤よくらら  
橋上の番太の鐘をうらみたる  
西瓜のしらす潮満らむ  
露くたるしたれ角豆の散柳  
月ニッの築地の古きよやどる  
遁世のよそよ妻子を覗き見て  
つぎ哥耳よ残るよし原  
歩チ別レ馬のまつらん覆蔭  
百姓の家よ入て腹切  
是此年先祖の櫓の火の消ぬ  
時ならず米よ生る菌

峽嵐

時菌水曉角堂千曉時蕉峽角蘭昨千



雨を聞て放下の村に閑ある  
燕尾小勝か暮に落來る  
衣裳草もえ出る翠り紅  
雪ふしき茶や花の端つしき  
御池漕扈從の渡守まはし  
薫りふるふか水引の簑  
張雀鳴子くよおどろきて  
無情人秋の蟬  
月の間山寺とのを離を  
石風その跡の哀ありける  
箒木の茂キハ鉄と天せられ  
今共とかけ金色の玉  
袖に入蟻夢を契りけん  
涙の玉あり明け暮にかわかす  
我聞き鈍士の胸の中黒しと  
聞思君境町よ潮るし

堂曉曉角昨昨昨昨昨昨昨

肩を踏て短冊とり立躁く  
奥よての御遊園堀戀  
篝火を刀よかけて玄のふ山  
浪の井積よかくす落人  
ち物洗ふ鹽をふせて暮るほどよ  
藍つくく白のどほくし聲  
市賤の木ひらをおへる木陰の  
日傘さす子と嫗と男と  
玄關よて神樂をまうけ給ひけり  
夜とくも照す袋挑灯  
花のおく盗人狩よ泊りして  
八重く霞飛行小天狗

曉蕉蘭千峽時曉蘭昨堂蕉角

天和年中

時節さを伊賀の山越花の雪

杉

風



身のこしもとよかすむ武藏野  
店賃の高き軒端よ春の來て  
とうやらからかうやら暮る年なみ  
發句脇されて名殘の月遠し  
誰そ來以鐘の八か七か  
寢くるしき例の瘡よ夢覺て  
きのふの酒を訪ほとしきす  
浮雲のきえて跡なき扣帳  
親仁以來の山おろしの風  
古郷の松はひこる境杭  
朱印をそめて時雨降ゆく  
探幽か筐の雲よ殘る月  
京はし渡る初厂の聲  
伏見駕さて其頃の秋の風  
かこひを高よ手枕の露  
一生の起る氣のなき我思ひ

芭

全風全蕉

世をうきものよかるうして置  
張ぬきよ都の辰巳山見へて  
ふのりを舞し寺さふらふな  
前髪よ立名をつくむ絹のきれ  
涙をむすふ編笠のひも  
落らるし心の中を哀ある  
眞さかさまま岸のしく露  
又ひとりつしいて進む法師武者  
いさこを蹴立尻馬よむち  
寢とほけて夜深き月よ旅衣  
三里はかりの跡よ朝霧  
追剝よさてもあふなき野路の露  
うけて流いた太刀風の米  
吉岡の松よかしれる雲晴て  
雨や黒茶を染てゆくらん  
消殘る手摺の幕の夕日かけ



火繩のはしの一ニ寸ほと  
何ものか詠め捨たる花のかけ  
江戸よも上野國もどの春

同

夏馬の通行我を繪み見る心かな  
變手ぬるゝ瀧洞む瀧  
落の葉よ酒灑竹の宿懲て  
弦なき琵琶よとまゝる黄鳥  
面洗ふ瀧の鏡なとてり  
さくららに二十八計けん  
ささらさや武者物語や  
後家御靈雨の翠簾の居かくれ  
かくとても旅ねり少し矢背の里  
更てははるかよ門たしくおと

一 麩芭

品 塙蕉

斯る雪詩を買よ來る人あらん  
一爐の粥よ江の燒屋舟  
國荒て憎しと爲肥よけり  
暮風鎮ムル倫の宿  
クツワ子か鞘卷望む月照せ  
妹萩米也もうき世萬葉  
花あはせ櫻の判をまゝりそいて  
燕尾の風の裾をかへす  
陽炎の具殿屋作る日の大工  
嫁よ嫁咲百年の粟  
今朝のくうかれ道者の袖を引  
櫛のり坂の清水濁るな  
血よ染る甲を松よかけ置て  
餅を拜する大年の例  
長史なる乞食の京の榮卿  
千本をふとる牛菜の糞



崩たる頸の又鳥の媚をかり  
古佛の腹よ仮寝せし月  
身をしくれ荒山伏の袖ぬれて  
涕白雲の后こかる  
ちさき守牡丹の晝のかり火  
白袋袖躍あやめ髪結  
我ほめる乙智はかり雨降な  
夕影長者旦まつらん  
九の鼎よ赤き花を煉  
序を書残す藤の文橋

胡艸垣穂よ木爪も無家かな  
笠おもしろや卵の實むら雨  
散ほたる香に櫻を拂らん

同

芭一麩

蕉品時

市よ小言を荷ふ朝月  
良寒の殿の小袖を打かけて  
紅白の菊風よ暮を採  
静なる卵塔雨の日をくらく  
舍人の椽をかりて居眠る  
揚弓の反矢の御簾よとまりて  
上氣の神といはふ三線  
うは玉の躰を箔よ彩けり  
密夫恥よいのちつれなき  
朝かほのくねるよゆすり起されて  
うしと髪きる葛のいつはり  
母の親よあまえて月を背けをり  
うもれてはてぬ身を支離よて  
通夜堂の階暮花を覗くころ  
櫻兒消て釣鐘よよる  
春風の池よ鏡をほり出す

時蕉品時蕉品時蕉品時蕉品時蕉品時



からすの縁を告るふく鳥  
院の田は餅米菊ん君と連て  
青菘染のはかま織する  
風の絹煙りの聲をや括すらん  
月野をたどる道行の感  
新しき塚ゆさくとを呼すこし  
奢を後の臣よいさめる  
千金はいやしく糞土を賣とす  
麗姫も捨れぬ油くさしや  
よし原の三十年を老の九十九髪  
閨のはしらよ念佛書をく  
蓬生よ火を消狐來さりけり  
獨故弓を盡す終夜  
鳥守の髭等酒を買せつ  
松よ巢をもる蝙蝠の千代  
俳諧の空寒花の浮狂人

品 時 蕉 品 時 蕉 品 時 蕉 品 時 蕉 品 時 蕉 品

馬 蹄 よ 鼓 お く る 春 風  
天和三癸亥年

花 よ う き 世 我 酒 玄 ろ く 食 黒 し  
ね ふ り を 盡 す 陽 炎 の 瘦  
鶴 啼 て 青 鷺 夏 を 隣 ら ん  
童 子 磔 を 手 折 唐 梅  
月 を 濁 す 汀 の 蓼 を 芦 かりて  
浪 の さ し れ 又 た 赤 こ 釣 影  
琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし  
朝よゑほしをふるふ紙衣  
浪人の戀するを詰り思召  
やふの一夜よ入かひそあき  
散櫻同じ宗旨を誓ひける  
藤の退之か肝魂を奪  
雷鳥の初音の鶯を鳴あらん  
沙照海よ松魚孕る

芭 一 嵐 共 嵐 執

蕉 品 雪 角 品 蕉 品 雪 角 品 蕉 品 雪 蕉 品 筆 蘭 角 雪 品 蕉 雪



契情の鏡を撫し神代より  
羽織よ角をかくす風流雄  
あたし野の棺を出て草の月  
破蕉誤って詩の上を次  
朝解よ西瓜を贈るはるか  
つくししまらぬひの松浦片撥  
めつら見る揚屋くの萱庇  
蚤の私のさかつきをのむ  
櫛入ぬ影の六十の荆よて  
御所よ都坐かく世を夷之  
人の怪異穂長の宵の熨子黒く  
松たかくひなき雪のわけほの  
きたなしや陣中よ似をいひさかく  
山野よ飢て餅を貪る  
盗井の月よ伯夷か足洗ふ  
木賊の武士の憤艸

品角蘭雪品蕉雪蘭角品  
品角蘭雪品蕉雪蘭角品

ニ見くるしき艶書を焼や柴柁  
笑ひさんや又歸るたましひ  
曉の寝言を母よ覺されて  
終よ發心ならすなりけり  
花よ栖廬山の列をはねたらん  
柳よすねて瀑布を酒飲

蘭品雪蕉角蘭

同

酒債尋常往處在  
人生七十古來稀

詩あさんど年を食る酒債哉  
冬湖日暮駕馬鯉  
干鈍き夷又關をゆるすらむ  
三線人の鬼を泣しむ  
月の袖こほろき眠る膝の上に  
鳴の羽えはる夜深き

共芭

蕉全角全蕉角



恥しらぬ僧を笑ふか艸芒  
時雨山さきからかさ舞  
笹竹のとてらを藍染なして  
狩場の雲よ若殿を戀  
一の姫里の庄家よ養はれ  
尉名よたつといふ題を責けり  
ほととぎす怨の靈と啼かへり  
浮世よまつむ寒食の瘦  
沓の花貧重し笠はさん俵  
芭蕉あるしの蝶たしく見よ  
腐れたる俳諧犬も喰すや  
鰯々として寝ぬ夜ねぬ月  
二鐺入の近付まよ初礎  
たしかひ止て葛うらみなし  
嘲<sup>ウ</sup>黄<sup>ウ</sup>金<sup>ウ</sup>鑄<sup>ウ</sup>小<sup>ウ</sup>紫<sup>ウ</sup>  
黒鯛くろしおとくめか乳

全角蕉角蕉全角蕉角蕉全角蕉角蕉全角蕉

枯藻髪榮螺の角を巻折ん  
魔神を使<sup>ス</sup>荒海のさき  
鐵の弓取たけき世よ出よ  
虎懷よ姪るあかつき  
山寒く四陰の床を吹あらし  
埋火消て指のともし火  
下司后朝を妬み月を閉  
西瓜を綾よつしきあやまく  
三哀いかよ宮城野のほた吹洞るらん  
みちのくの夷しらぬ石臼  
武士の鎧の丸寝枕かす  
八聲の駒の雪を告つし  
詩あさんと花を食る酒債哉  
春湖日暮<sup>ラ</sup>鷺<sup>レ</sup>興<sup>ニ</sup>吟

全角蕉角蕉全角蕉角蕉全角蕉角蕉全角蕉



一年三百六十日

開レ口咲「無三三日」

飽や今年心と曰の轟きと  
 世のまら涙も大根こく舟  
 月雪を芋の編戸や枯つらん  
 こほろさの書をよみ明す聲  
 百をふる狐と秋をなくさめし  
 傾婦を蘭の肆もうる  
 敵ある涙の色をいはす艸  
 然の天下一番の顔  
 文盲な金持の金をもつて鳴る  
 まはどり豚はつち養ふ  
 其池をまのりすといふかひ屋しき  
 士峰の雲を望む加賀殿  
 柳召て國も千曳の鏡わり

其季

下角下角下角下角全下角下角

名よたつかさし黒木申柿  
 髭荒の花見る男内ゆかし  
 春宵君とほりあひのなき  
 月も啼く生憎のうかれ上戸や  
 芒もまろくたぶさ菊録  
 朝かほり道歌の種を植たらん  
 院の後家のあるかなき宿  
 都近き島原小野を思ひ出る  
 仕組をくたす八重のどち文  
 墨染も女房ふたりを頼む哉  
 寝みたれかもし蛇とある夢  
 笛もよる骸骨何を其情  
 風そよ夕切籠燈の記  
 酔はらふ冷茶の秋のむかしよて  
 こぬ夜の格子鳴を憐む  
 名月の前の涙もくもりつら

下角下角下角下角全下角下角



金橙徑よ粕かみをおもふ  
葉生姜を世捨ぬ奴またとへけん  
すり鉢かふる草堂の霜  
寸法師切れの衣のみしかさよ  
昔を力む卒都婆大小  
師の多門を見せよ花の雲  
凡夫三百人の春かせ

寛文十成年

君も臣もさそな三肌をあはせ衣  
夏まりかははよゆるり國民  
かけ作り河原おもてよ見渡して

同

抜の露の玉散太刀か一葉切  
はなつ矢の根よつよき秋風

冷しき石のさなから虎よ似て

同七未年一句附

肩よ着物かゝるものかいらき難所  
今をたうけとあつき日の岡

後生ねかひとみさふらひかた  
まやかかぬ鎗あみたやすりのつは刀

賤か寝さまの寒さつらしさ  
かた巻のへそかねて酒をかはん

延寶六戊午

大鋸屑の煙りもともよ不二の嶽  
蚊よさゝれ舟田子の浦ふね

芭  
全角下蕉角全下

宗正助  
房朝勝

定長  
就忠

宗房

宗房

宗房

宗房

桃青



虫の鬣白髪とこそなりよけれ  
瓜の中この實盛か道

青

孔子の鯉魚のさしみよあてられ  
夜起する糞土の垣よ月更て

全

説 經 芝 居 う つ ら 啼 へ  
萩 す し き さ あ 刈 萱 し や く

全

捨る身も鬼の餌食の生肴  
南無や酒樽醬油來迎

全

鉄橋よ大焦熱の苦を受る  
仁藏菩薩よ槌を打せて

全

膳棚の少しこふかき山見へて

大宮の御在所箸箱と哉覽

全

碓のうたよも集よや入ぬらん  
大津奈良屋も奈良の御時

全

武者ふりを引つくりひてよいくと  
敵ようしろを見せる尻つき

全

桶ひとつ物の哀をとしめたり  
それ人間ぬかみその虫

全

馬の沓かゝる處の秋なりけり  
唐網打の須磨の浦浜

全

もすそを見れぬ駕の装束  
中かへりかへす處をまらんとて

全



うなる聲既よ平家と聞時の  
脚布をさせたる鎌倉の山

青

あつたら具桑泥水の末  
此界をひつくりかへす大砂鉢

全

相場よ立しよさの浦浪  
紗綾とんす茶う島の子か玉手箱

全

上の脇さし中の竹籠  
爰もどよ紙子おとしの鎧着て

全

心よかなふ長持のふた  
送り膳道少したよへたてねの

全

魚の腸其まゝ海よ沈められ

女院誰かれ二位の尼鯛

全

大屋の退屈うす紅葉する  
吟増焼の七日つしきし稲葉山

全

寶いくつあつらへの夢明の春  
みの笠小槌あら玉の宿

全

手鹽よ五日の雨と流す  
菅蒲のかつら剃刀をとく

全

経よよう似たうくひすの聲  
是も又うばそく優婆夷あま蛙

全

寝覺わひしき澤庵の耳  
菩提もと木枕ひとつかと有て

全



なかむれい松浦とや五郎兵衛町  
はや舟よのりのほる京橋

天和年中

伊賀御集物

栗野老山齒朶尉か秋こそあれ  
目禮飾るか炭かまの松  
御幸へたつ霞の坂をゆかむらん

青府 一青 桃青

天和四甲子

芭蕉野分其句よ草鞋かへよかし  
月と紅葉を酒の乞食

李下 芭蕉 素芭

枯枝よ鴉のとまりけり秋のくれ  
銀かたけけゆく霧の遠里

芭蕉 素芭

俳諧一葉集附合之部二

貞享元甲子冬

狂句木枯の身の竹齋よ似たるかな  
たそやどはしる笠の山茶花  
有明の主水よ酒屋作らせて  
かしらの露をふるふ赤馬  
朝鮮のほそりすきさの句ひなき  
日のちりくよ野よ米を蒔  
我庵の鷺よ宿かすあたりよて  
髪はやす間を去のふ身のほと  
僞のつらしと乳をまほりすて  
消ぬ卒都婆よすこくと泣  
かけほうの曉さふて火を焚て  
あるしの貧よたえし虚家  
田中なら小まんか柳落るころ  
霧よ舟ひく人んちんはか

翁野荷重杜正

水五分 翁五分 翁五分 水五分







かくのきさらきを只泣まなく  
床更て語れはいとこなる男  
線さまたけのうらみ残りし  
口をしと瘡をちきる力なき  
明日のかたきよ首ふくりけん  
小三たよさかつきとらを一ッうたひ  
月ひ遅かれ牡丹ぬす人  
繩あみのかたり破れ壁落て  
こつくとのみ地藏さる町  
初花の世とや嫁のいかめしく  
禿いくらの春そかゆき  
櫛箱は餅すゆる圍ほのかなる  
うくひす起よ紙燭ともして  
篠深く梢の柿の葉さひし  
三線一から美濃で打ける碁を忘る

水翁 五 水翁 五 水翁 五 水翁 五 水翁 五

奉加めすの堂よ金打荷ひ  
ひとつの傘の下とそりさす  
運池は鷺の子遊ぶ夕まくれ  
窓よ手つから薄様を漉  
月よたてる唐輪の髪の赤かれて  
戀せぬ碓臨濟をまつ  
秋蟬の虚は聲さく静さの  
藤の實つたふ車はつちり  
袂より硯をひらき山かけよ  
ひとりの典侍の局か内侍か  
三夕の花鸚鵡尾長の鳥軍  
ちらかあひいさむ越の獨活効

水翁 五 水翁 五 水翁 五 水翁 五 水翁 五

杖をひくことわつかよ十歩



つゝみかねて月とり落す霽哉  
氷ふみゆく水のいなつま  
齒朶の葉を初狩人の矢よおひて  
北の此門をおしあけの春  
馬糞搔あふきよ風の打かすみ  
茶の湯者をしむ野邊のたんほ  
うらうたけよ物よむ娘かしつきて  
燈籠ふたつよ情くらふる  
露萩の角力ちからをえらはれす  
蕎麥さへ青し滋賀樂の坊  
朝月夜双六打の旅ねして  
紅花買道よほどきすきく  
忍ふ間の業とて雛を作り居る  
我婦の君より米なんどこす  
籬まて津浪の水よ崩れ行

杜重野翁荷正

國五水平翁國水翁國五水翁國五

縣ふる花見二郎と仰かれて  
五形すみれのはたけ六反  
うれしける囀る雲雀ちよくと  
眞晝の馬のねふたかほえ  
岡崎や矢矧の橋の長き哉  
庄屋の松をよみておくりぬ  
捨し子の柴蒔たけよのひつらん  
三十日を寒く刀うる年  
雪の狂吳國の笠珍らしき  
襟よ高雄か片袖をとく  
あた人と樽を梢よ飲ほさん  
けしのひとへよ名をこほす禪  
三日月の東のくらく鐘の聲  
秋湖幽よ琴かへす者  
烹とをゆるして沙魚を放ける  
聲よき念佛藪を隔る

國五水翁國五水翁國五水翁國五



影うすき行燈けしよ起侘て  
ふもひかねつも夜の帯引  
こかれ飛玉しひ花の蔭よ入  
其望の日を我もおなじく

難波津よあし火たく家いすしけたれど  
炭うりのおのか妻こそ黒からめ  
人の粧ひを鏡磨寒  
花蘇馬骨の霜よ咲かへり  
鶴見る窓の月かすかえ  
風吹ぬ秋の日瓶よ酒あき日  
萩織笠を市よ振する  
加茂川や胡麻千代祭微近み  
いはくらの簗なつかしの頃  
思ふと布搗哥よ咲れて

羽翁野杜荷重

水五分笠 水國分五 翁今五水

うさりの二十をこゆる三平  
捨られてくねるかをし離れ鳥  
火置ぬ火燧あき人を見む  
門守の翁よ紙衣かりて寝る  
血刀かくす月のくらきよ  
霧下て本郷の鐘七ッ聞  
冬まつ納豆たしくなるへし  
花よ泣櫻の懲と捨よける  
僧ものいはす款冬をのむ  
白燕濁らぬ水よ羽を洗ひ  
宣旨かしこく劔を鑄る  
八十年を三ッ見る童母持て  
なかたちそむる七夕の妻  
西南よ桂の花のつほむ時  
蘭の油よト木うつおと  
賤の家よ賢なる女見て歸る

五翁笠國水五分笠翁水國分五翁笠國



釣瓶よ粟を洗ふ日の暮  
流行来て撫子かざる正月よ  
つしみ手向る辨慶の宮  
永の日の旦を鍛冶の急起て  
雲かうはしき南京の地  
いかさして誰ともしらぬ人の像  
泥よこころの清き芹の根  
粥すしる曉花よかしこまり  
狩衣の下よ鎧ふ春風  
北の方なくく籠おしやりて  
ねられぬ夢をせむる村雨

田家眺望

霜月や鶴のつくく並ひ居て  
冬の朝日のあはれなりけり

翁荷

兮

流國水翁兮五水翁笠國

橙檜山家の体を木葉降  
ひきする牛の塩こほれつ  
音もなき具足よ月のうすくと  
酌とる童蘭さりといて  
秋の頃旅のは連歌いとかりよ  
やうやくはれて不二見ゆる寺  
寂として椿の花の落る音  
茶よ糸遊をそむる風の香  
雉おひよゑほしの女五三十  
庭よ木曾作るこひの薄衣  
夏深き山橘よ櫻見む  
麻かりといふ歌の集あむ  
江を近く獨樂庵と世を捨て  
我月出よ身ん臙なる  
旅衣笛よ落花を打はらひ  
籠興ゆるす木瓜の山間

重杜羽野

五國笠水兮五水翁笠國水



骨を見て坐よ涙くみ打かへり  
乞食の籠をもらふまのしめ  
泥の上よ尾を曳鯉を拾ひえて  
御幸よ進む水のみにくすり  
殊よ照年の小角豆の花もろし  
萱屋まはらに炭團つく日  
芥子尼の小坊まじりよ打むれで  
折る蓮の實立る蓮のみ  
静さよ飯臺のそく月の前  
露ふく狐風やかなしき  
釣柿よ屋根ふかれたる片庇  
豆歎つくりて母の喪よ入  
元政の草の袂も破ぬへじ  
伏見木幡の鐘はなをうつ  
いろ深き男猫ひとつを捨兼て  
春のまらすの雪掃をよふ

翁 五 國 水 笠 五 翁 五 國 水 笠 五 國 翁

同

水干を秀句の聖わかやかよ  
山茶花匂ふ笠の木からし

いか見よとつれなき牛を打おられ  
樽火よあふる枯原の松  
木賊かり下着よ髪を茶笠して  
檜笠よ宮をやつす朝露  
銀よ蛤かはん月海  
ひたりよ橋をすかず岐阜山

羽 荷 重 杜 翁 野  
笠 分 五 國 水

同年臘月十九日

海暮て鳴の聲ほのかよ白し  
申よ鯨をあふる鷹

翁 桐 葉



二百年我此山よ斧取て  
檜の種まく秋の來よけり  
入月よ鶉の鳥のわたる空  
駕あき國を露ふれゆく  
降雨の老たる母のなみたかど  
一輪咲し芍薬の窓  
棋の工夫二日どちたる目を明て  
周よ歸ると狐あくなり  
靈芝ほる河原はるか暮かしり  
華表はけたる松の入口  
笠敷て衣の破れつゝ居る  
秋の鳥の人喰よゆく  
をとつひの野分の濱の月澄て  
霧の車よ龍を書つく  
花くもる石の扇をおしひらき  
美人のかたち拜む陽炎

工東

山藤葉山翁葉山藤葉山藤葉山藤葉山藤葉

蝦夷の聳聲なき蝶と身を侘て  
生海鼠ほすも袖のぬれけり  
木間より西よ堂の壁えろく  
敷よ屑屋の十ばかり見ゆ  
ほつくと炮礮作る祖父ひとり  
京よ名高し瘤のましなひ  
不二の根と笠着て馬のりなから  
寝よゆく鶴のひとつ飛らむ  
まつ暮よ鏡を忍ひうす粧ひ  
衣かつく小姓萩の戸を押  
月細く時計のひらき八ッ鳴て  
棺いそくきえかたの露  
破れたる具足を國よ贈りける  
高麗の縣よはたけ作りて  
紅染の唐紙よ花の香を絞り  
ちひさき宮の永き日の伽

山藤葉山翁葉山藤葉山藤葉山藤葉山藤葉



春雨の新發意 藤荷ひ来て  
春草ちらす 藤の撮折

宿まゐらせむ西行ならん秋のくれ  
芭蕉とこたふ風のやれ笠

花の咲身なから草の翁かな  
秋もえほるし蝶のくつをれ

師の櫻むかし拾はむ木葉かな  
すしきよ霜の髭 四十一

霜寒き旅ねよ蚊帳を着せや  
古人かやうの夜の木からし

翁美濃路へ打こへんと聞へけれり

雷 藤葉

勝 翁枝

嗒 翁延

如 翁山

如 翁行

檜笠雪をいのちのやどり哉  
樽一つかね足つしみゆく

桐葉

えのふさへ枯て餅かふやどりかな  
えのひふしたる根深大根

桐葉

馬をさへ誘る雪のあしたかな  
木葉よ炭を吹かこす鉢  
はたくと機織音の名のり来て  
年のよるほど伯母のせはしき

閑水翁  
東藤葉  
桐葉

此海よ草鞋捨ん笠しくれ  
むくもわひしき波のから鯛  
木枯よ残る冬瓜のふら付て  
まはらよ垣のいつ結たやら  
細うても影のとうから月の空

桐葉翁  
東藤葉  
叩端行  
如



暮ての露よしめる脇道  
工山  
能ほどよ積りかはれよ簀の雪  
木  
冬のつれとて風も跡から  
翁因

貞享二乙丑年

三月廿七日

何どのなしよ何やらゆかし董卿  
編笠敷て蛙聞居る  
田螺わる賤の童のあたしかよ  
桐叩  
公家よ宿かす竹の中道  
月くもる雪の夜桐の下駒すけて  
酒のむ姨のいかよさひしき  
双六のうらみを文よ書つくし  
琴爪をしむ神のうつり香  
葉端翁葉端翁葉端翁

野の宮のあらし妓王寺の鉦  
虚樽よ色ある草をかたけ添  
藝者をとどむる明月の關  
翁葉端翁葉端翁葉端翁  
おもしろの遊女の秋の夜すからや  
燈火風をまのふ紅粉皿  
川瀬ゆく髻を角よ結わけて  
舍利とる瀧よ朝日うつらふ  
翁葉端翁葉端翁葉端翁  
かしこまる石の御坐の花久し  
羽折よ酒をかへる櫻や  
二歌よみて女よ蚕ふくりけり  
枕屏風の繪よ涙くみ  
翁葉端翁葉端翁葉端翁  
聞なれし笛のいろえの遠さかり  
三股の舟深川の夜  
庵住やひとり杜律を味ひて  
花かすかなる竹くきの蕎麥  
翁葉端翁葉端翁葉端翁  
いかよ啼鳥の吹矢をひかから



水汲 小僧袖ひやしかよ  
月明て打抜山をへたつらん  
雲の夜盗の跡うつひなり  
村雨のそしき捨たる馬の沓  
ひとつ 兎の瓜喰ふおと  
笠見ゆる人の葎よどちられて  
男やもめの老そ悲しき  
風くらき大年の夜の七ッ聞  
御門をたしく生鯉の奏  
常盤山常盤之助か花咲て  
霞よ残る連歌師の松

日  
つくくくと榎の花の袖よちる  
ひとり茶をつむ藪の一家  
日影山野雞の雛をおはえ來て

同

桐  
葉端翁葉端翁葉端翁葉端  
葉端翁葉端翁葉端翁葉端

清水をすくふ馬柄杓よ月  
おもしろき野邊よ鮎うる艸の上  
宿の土産よ撫子をほる  
鼻紙よ都の連歌書付て  
暮る大津よ三井の鐘さく  
雪を侘漁の姥か袖を見よ  
寝よゆく鴨の四五の空  
松風のひくさよ酒を飲盡し  
佛をささむ西谷の僧  
鳥羽玉の髪さる女夢よ來て  
戀を見破る朝かほの月  
秋の猶只言さ物くらひけり  
白子の太夫我霧の海  
浪よする鯨の骨よ花裁て  
陰ほす於期のかつらはふ道  
笠持て霞よたてるやせ男

工東黄

口藤山端翁口藤山端翁口藤山端翁口藤山端翁



同

牡丹薬を深くはひ出る蝶の別哉  
 朝月涼し露の玉餘  
 歌袋望みなき身又打かけて  
 たましく膳又ついで箸とる  
 新家根よなしまぬ板の雨東  
 二百ちかひ又馬の落札  
 たぶさ引跡の小聲の男同士  
 涙又濁る池の人かけ  
 竹蜂のするどき月の夕嵐  
 茶の實こきゆく牛の嘸  
 年ふりて吾妻祭りの關か原  
 かちんのくくし高き宿老

叩桐

端葉翁 端葉翁 端葉翁 端葉翁

つししのふすま着たる西行

楫

五重の塔のほどり夕くれ  
 鶴鶴の尾を脚の圍に掛られて  
 風よ身を置けふの討死  
 筆とりて朴の廣葉を引撓め  
 田舎祭りよ物見そめたる  
 打かつく前たれの香をなつかしく  
 たはれて君と酒かひよ行  
 白かねの鉢よ鮎およかせて  
 おほん歸京の時を占ふ  
 鞆鞆の東の寺の月凄く  
 猿手の粟の何をまねくそ  
 蟬啼てまた澁柿の秋の空  
 草家かすかよ馬の尾の琴  
 哀なるのり物焼て歸る野よ  
 入日の跡の星ニツみつ  
 宮守か油さけつく花のふく

桂

翁葉藤山翁 端藤山葉翁 口藤山葉端 楫



うすくらき簾よはさむ紙の屑  
硯のはらの合ぬひら筆  
くりくどさめたる酒の酔心  
谷真風をかつく舟の真下り  
花敷て近き見こしの角矢倉  
燕の泥を落す肩衣  
出代の腰よさけたる持草履  
午時の日あしよ過る風空  
地雷火よ逆立浪の赤走り  
鷺の時を替る枯柳  
僧正の天窓の寒き簀子椽  
わすれて焦す飯の焚えり  
お茶壺の雨よむかひて扇敷  
旅の乞食の奢る小處  
物賣の袂へおろす上蔀  
鉦の音ひしく盆の燈籠

翁端葉翁端葉翁端葉翁端葉翁端葉翁端葉翁端葉翁

同

蝙蝠のかけ廻りつる月の暮  
風冷初る馬場の白砂  
ニ<sub>ミ</sub>振舞をいくつもしたる仲間入  
妾あふりて貞を繪よ書  
燃口の煙りよからき糠油  
湯さやの杉の廣き本宮  
花垣よ邊りの青葉引撓め  
かれも角組春の蝸牛

端葉翁端葉翁端葉翁端葉翁

おもひ立木曾や四月の櫻狩  
京の杖つく岨の夏麥  
牛の子の乳をのむ日影閑よて  
かけろふとまると竹の編棚  
侘つしも栗の毬たく細けふり

翁東桂叩桐  
應杵端葉



ひとりのうけたる有明の松  
薄雪の淀の天守を降兼て  
狂歌の僧よ駕を只かす  
鼻紙の涙をつしむ女あり  
なさけの市よ上の袍うる  
螢うつ夜半の黒戸よ宴盡て  
よせる車のさしるなりけり

工

閑

山藤翁水楫葉水

同年六月二日東武於小石川興行

涼しさの疑くたくるか水車  
青鷺草を見こす朝月  
松風のはかた箱崎露けくて  
酒店の秋を障子明るさ  
社日来よけり尋常の煤はくや  
舞蝶仰く我よえたしく

清翁嵐共才

風雪角丸齋

みちの記も今の共まらよ霞こめ  
氈を花なれいやよひの雛  
老てたよ侍従の老をへりくたり  
氷さよしとらち守りたり  
戸隠の山下小家の静よて  
阿闍梨もてなす父の三年  
笑顔よくうまれ自慢の一器量  
舟よ夜くいのちあきなふ  
雨そほつ蚊遣火いたく煙てし  
草庵あれも夏を十疊  
既またつ碁よまれ人をあさむきて  
鴻鴈高く白眼どもおちす  
晩稻蒨干みちのくの月よ日よ  
淨瑠璃聞ん宿からむ秋  
椎の實の價算る半蒨よ  
うしろ見せたる美婦妬しき

素

堂風翁雪角丸齋堂風翁雪角丸齋堂風



花散す五日の風の誰かいのり  
北 京 遠 き 丸 山 の 春  
三 尺 の 鯉 よ 小 鮎 よ 料理 の 間  
は や 兼 好 を よ く 心 此 と し  
幾 回 の 戦 ひ 夢 と 覺 や ら す  
逝 水 や み を 捨 ぬ も の か  
白 鳥 の は ふ り 湯 立 の 十 五 日  
夫 醉 醒 の 愚 よ 噫 し て  
露 の す し み か ね た る 黄 昏 よ  
を し 恩 愛 の 澤 を 二 羽 た つ  
棧 造 り 曲 輪 の 罪 を 指 を ら ん  
さ ぬ く の 衣 薄 さ よ そ 泣  
い かな れ づ つ く し の 人 の さ わ か し や  
古 梵 の せ か さ 花 皿 を 花  
ひ く ら し の 聲 絶 る 方 よ 月 見 窓  
引 板 を 業 と す を の こ 嘯 く

雪翁風堂齋丸角雪翁風堂齋丸角雪翁

ニ 武 士 の も の す さ ま し き 穢 ひ  
七 里 法 華 の 七 里 秋 風  
丑 三 の 雷 南 の 雲 と 化 し  
槐 の 小 鳥 高 く ね く ら す  
陰 陽 神 の 留 主 其 ま くの 仮 屋 建  
狂 女 さ ま よ ふ 跡 ま と ふ ち る  
情 し る 身 の 黄 金 の 朽 て よ り  
輕 く 味 ふ 出 羽 の 鱗  
寒 月 の と も つ な わ か ら さ ま な り し  
枯 て あ ら し の つ の る 萩 萩  
獨 樂 の 茶 よ 起 臥 を 舍 る の み  
三 里 も す 急 す 不 二 い ま た 見 す  
鹿 を お ふ 弓 咲 花 よ 分 入 て  
春 を 愁 る 小 の 晦 日  
陽 炎 よ 坐 す 縁 低 く 狭 かり き  
砥 水 さ よ び る 五 郎 入 道

雪翁風堂齋丸角雪翁風堂齋丸角雪翁



悴もたのし上戸も譲るかかくこ  
雲ちりくよ風かほる藪  
伊豫すたれ湯術の敷いさしらす  
入院見舞の長よ酌とる  
一陽を襲正月はやり来て  
汝櫻よかへり咲すや  
染殿のあるし朝日を拜む哉  
まのふのみたれ瘡もしたひ  
うき世というき川竹をはつかしめ  
名をわふ坂をこしてあらぬす  
后の月家よ入尉出る兒  
わけてさひしき五器の焼米  
ニミの虫の狂詩つくれと鳴ならむ  
忠よ死たる塚よイむ  
初雪の石凸凹よ  
小女郎小まんか大根曳ころ

丸角雪翁風堂齋丸角雪翁風堂齋丸角

血をそしく起請もふけの翻り  
見よもの好の門の西むき  
はあかしの夜をさしかよの影消て  
汗深かりし憤る夢  
はらからの旅等閑よ言葉あく  
ふることささる小夜の中山  
枝花をそむくる月の有明て  
ふらこしつらん何かしか軒  
符して修理する舟の春となり  
立初る虹の岩をいろとる  
名されたこよ乳人が魂の空よ飛  
麻布の寢覺はどしきすなけ  
わくら葉やいなりの鳥居顯れて  
文治二年のちから石もつ  
みたれ髪俣くしどしと偽らむ  
礫よかよふこしるくるいし

堂齋丸角雪翁風堂齋丸角雪翁風堂齋



三日月の影西須广<sub>ニ</sub>落てけり  
秋の月のか<sub>ニ</sub>あけ捨の棟  
燈心をかへ<sub>ニ</sub>かならず初嵐  
只一眼も道<sub>ニ</sub>一すし  
特のくろきもさすか夕間暮  
定家かつらの撓む冬され  
低く咲花を入手と見るばかり  
桶の輸入の住ひいやしく  
まひたるさを鎌<sub>ニ</sub>かへたるこころ太  
瀧を惜ぬ不動尊さ  
聲なくてさひしかりけるむら雀  
出る日はれて四方静<sub>ニ</sub>  
花降<sub>ニ</sub>我を匠と人やいはむ  
さくらく<sub>ニ</sub>奥深き<sub>ニ</sub>口

秋

風翁雪角丸齋堂風翁雪角丸齋筆

梅まろしきのふや鶴をぬすまれし  
杉菜<sub>ニ</sub>身する牛二ツ馬ひとつ

秋翁風

我さくら年魚さく枇杷の廣葉茂  
笈<sub>ニ</sub>うこく山藤の花  
日の霞夜銅の氣をま<sub>ニ</sub>りて

秋翁風  
湖翁春

樞の木の花<sub>ニ</sub>かま<sub>ニ</sub>ぬ姿かな  
家する土をばこふ乙鳥

秋翁風

梅絶て日永し櫻今何日  
東の窓の蚕桑<sub>ニ</sub>よつく  
巢の中<sub>ニ</sub>燕の良の並ひ居て

湖翁春  
全翁

からさきの松の花より臚<sub>ニ</sub>よて  
山のさくらを絞る春雨

千翁那



芭蕉翁行脚の比

夏草よ東路まどへ五三日  
笠もてはやす宿の卯の花

翁 知足

貞享三丙寅

初懷紙

日の春をさすかよ鶴の多ゆみ哉

其 角

元朝の日はなやかよさし出て長閑よ幽  
玄なるけしさを鶴のあゆみよかけていひ

つらね侍る祝言の外よあらはる流石よと  
云手よ葉感おほし

みきりよ高き土手の桐の實

交 鱗

貞徳老人玄服体四道ありと立られ侍れど  
も當時の古くなりて景氣を云そへたるを  
よろしとす梧桐遠く立てまかも木枯のま

よとして枯たる實の梢よ残たるけしきと  
葉こまやかよして桐の實といふの桐の木  
といふんと同じ事ながら元朝よ梢の冬め  
きし木からしの其まよなれどもほのかよ  
かすみ朝日句ひ出てうるのしく見へ侍る  
体なるへし但桐の實と附たる新しき俳諧  
の本意斯る所よ侍る

雪村の柳見よゆく棹さして

積 風

第三の体長高く風流よ句を作り侍る發句  
の景と少しかひりめあり柳見よ行とわれ  
のいまた景よ不對なり雪村の畫の名筆よ  
柳を書へき時節其柳を見て畫んどみつか  
ら舟よ棹さして出たる狂者の体珍重よ桐  
の立木詠やう奇特よ侍る附様大切よ

酒の幌よ入逢の月

コ 齋

四句目なれの輕し其道の様体酒屋と云も



のよく出し侍る幌の暖簾などいはん爲之  
尤夕の氣しきあるへし

秋の山千束の弓の鳥賣ん

芳重

狩の鳥をえて市は持出て賣体さも有へし  
酒屋またよりたる珍重の付やうへ手束の  
弓のみしかき弓へ秋季を持たる鳥の名多  
くあれともいはずして秋の山と大やうよ  
置たる五文字大切の所へ見る人心を翫味  
すへし

炭かまこねて冬のこしらへ

杉風

前句山家の体は見なして侍る獵師の鳥  
をかり山賤の炭竈を捨て冬をまつ体別條  
なき句といへども炭かまの句作終人の  
せぬ所を見付たる新しき句へ

里くの麥ほのかなるむら緑  
附様別條なし炭かまの句を初冬の末霜月

仙化

頃などの体ようけて冬畑のわきまよくい  
ひのへ侍る其場へ

我のる駒よ雨おほひせよ

李下

是等奇意之何を付たるともなく何を詠め  
たるともなし里くの麥といひたるより  
旅体をおもひ出しむらみどりなとうるの  
しきより雨を催し侍る景氣辨口筆頭よ不  
掛

朝またき三鳥を拜む道なれり

翠白

これさしたる事もなくて作者の心は深く  
思ひ込たるなるへし尤旅体之箱根前よせ  
まりて雨をわひたる心深切に侍る

念佛よ狂ふ僧いつくより

采弦

此句わつかは興をあらわしたるまで之神  
社よ佛者をいむもの之參詣の僧も神前  
よ狂僧之三嶋町よある社なれり道通



る里の僧もよるへきこ

淺ましく連歌の興をさますらん

蚊 足

連歌の興をさます附やう珍らし度く我

人の上よもある事よて一入珍重よ侍る

千 豆

かたきよせ來るむら松の聲

聞へたる通りよて別意なし連歌に軍場を

おもひよせたるこ

翁

有明の梨打鳥帽子着たりける

附様別條なし前句軍の噂よして又一句更

よいひ立たり軍を梨打ゑほしよてあしら

ひ付やう軽くしてよし一句の姿道具眼を

執 筆

付て見るへし

うき世の露を宴の見おさめ

前句を禁中よして付たる句へゑほしを着

ると云よて却て世を捨ると云心を儲たる

觀 想

よくまれし宿の木樫の散度よ

文 隣

宴の只酒もりと云心かれの世の無爲より

戀の句を儲たり木樫の花のはかなくまほ

み我身のおもひえほると云より憎れし

と云五文字を置たり戀の句作尤感情あり

後 住 女 きぬたうち

其 角

後住女の後そひの妻といはん爲よくま

れしと云よて後添の物と和せざる味ひを

ためたり礎打くどかさねたるよ千萬の

物おもひつるやうよ聞へ侍る愁思ある心

よて前句をのせたるこ斷味淺からず

山 深み 乳をのむ猿の聲 悲し

コ 寮

礎の里水邊濱浦等よおほくよみ侍る尤姨

捨更科よしのなど山類よも讀侍る砧を山

類よてあしらひたる句之乳を吞猿と云よ

て女と云字をあしらひたるこかすかある



意味しかもよく通じたり  
いのちを甲斐の筏とも見よ

積風

猿の聲悲しきより山川のはけしく冷しき  
体を形容したる付様尤山類をあらひた  
るこ

法の土我剃髪を埋み置ん

杉風

筏の危く物すさまじきを見て身の無常を  
観したる之甲斐と云の古人佛者の古跡等  
おほく自然は無常もおもひ寄たる之剃髪  
を埋み置作意新しく哀をこめ侍る

はつかしの記を閉る艸の戸

芳重

別意なし草庵隠者体んさも有へき風流さ  
り

咲日より車かそゆる花のかけ

李下

前句隠者の体をとりたる之尤官祿を辞  
してかくれ住人のいかめしき花見車を日

日よかそへ居る体ん只句毎句作の和ら  
かよ珍しき眼を留へし

橋の小雨をもゆる陽炎

仙化

春の景氣之季のつかひやう軽く安らかよ  
したる所を見へし懐紙の緘目などい安  
くどかろく付るものこ

残る雪残る案山子の珍らしく

朱弦

是又春のけしき之付様させる事なし野邊  
田畑は雪の残たるは破れたる案山子の立  
たる姿あはれなるけしき見へたるあり秋  
冬こめて春まで残たるようす雪のかしこ  
たる体尤感情なるへし

まつかよ酔て蝶をとる歌

寧白

句作の工なるを興して出せる句は蝶を取  
たる歌の酔てと興したる体誠は面白し

殿守かねふたかりつる朝ほらけ

千里



此句附所少し骨を折たる句之前句の蝶を  
現在よしたる句よあらず蝶を取歌と云を  
諷物よして付たるに殿守の禁裏の下官の  
もの之蝶とる歌と云ふ風流なる禁裡よお  
もひあして夜すから夜明し興有て殿守等  
か夜明て眠る有さま珍らし一句長高く見  
ゆるん

兀たる眉をかくすきぬく

翁

朝朝と云よりきぬく常の事之兀たる眉  
と云の寝すしてまよけなき体之伊勢物語  
よ夙に殿守司か見るまよと書る之此句  
の餘情ならんか

けし咲て情よ見ゆる宿なれや

積

兀たる眉と云ふ老長たる人のおどろへて  
賤の家などよひそかよ住たる体へけし  
哀あるものよして上つかたの庭よのまれ

之爰よ取出して句をかさり侍る是等の句  
よて植物草花のあしらひ所句々分別ある  
へし

葉分の風よ矢筈さりよ入

二

齋

矢筈切と云言葉先新し前句民家よして武  
士の若者ともふと珍しき物かけなど見付  
たる体之大形の物語などの体をやつした  
る句へ或の中將なる人の鷹居て小野よ入  
浮舟を見付たるおどのためしならんされ  
とも其故事をいふよあらず其餘情のこ  
もり侍るを意味とすへきか

かしれとて下手のかけたる狐畏

共

角

敷かけの有さまありくと見へ侍るまか  
も句作風情をぬき侍て只有のまよいひ  
捨たる句續心を付へし

あられ月夜のくもるからかさ

文

興



冬の夜の感深き体を言のへ侍る傘は霰降  
音いと興ありまかも月たえくしと見ゆる  
尤おもしろし狐畏と云よこまか又侍る  
のわろし

石

の 戸 廻 鞍馬の坊は音すみて

學 白

霰は雪霜と云より少し寒風冷して聞ゆる  
ものなるよよりて鞍馬と云所思ひよせた  
り昔の色所の出しやう礎は須廣の浦十市  
の里芳野の里玉川などし附て語寄は便て  
付るあられの那須の篠原雪は不二月は更  
科と侍侍るを當時の句の形容よよりて名  
所を思ひよする尤心得ある事

わ

れ 三 代 の 刀 う つ 鍛 治

李 下

此句詠中の奇特な鞍馬の尤人くいひ傳  
へて僧正か谷など打物に便る事なり石の  
戸廻たと云ふ鍛冶近頃遠く思ひよせたる

珍重な淨き地清き水などをえらひ名剣を  
打へきとおもひより一句感情少からす三  
代と云よて猶粉骨の鍛冶の名人といはん  
爲

永

祿 の 金 ともしく松の風

仙 化

永祿の其時代をいはん爲の鍛冶農人おほ  
くの貧なるもの依てこかね乏しといへ  
るへ前句まかも明か又聞へ侍る是等よく  
心を付て齟味すへし

近

江 の 田 植 美 濃 は 聡 ら び

朱 弦

古代の体の金乏しと云より昔を云句に昔  
の物毎管略よして金も乏しき事人く云  
傳へ侍る美濃近江のちかき所よて田植な  
どの風流も遠き田舎とい違へし

疾

起 て 聞 か ち よ せん ほととさす

芳 重

時節を立合せたる句に美濃を江と一所を



舟

云よて時鳥をあらそひあとする心持よて  
聞かちよせんどく起てど句作れり

其角

よ茶の湯の浦あはれ  
時鳥水邊津浦などよ云事勿論之船中よて  
茶の湯などしたる風流奇特之思ひかけぬ  
所よて茶の湯を出すの茶道の好士之され  
の思ひよらぬ物を前句よおもひよせたる  
又俳諧の逸士之

筑紫

紫まて人の娘を召つれて

李下

此句趣向句作付所おのく具足せり船中  
よ風流人の娘など盗て茶の湯などさせた  
る作意戀よ新し感味すへし松浦の御息女  
をうはひ或の飛鳥井の君など盗取たる心  
はえもおのつから筑紫人のよそほひよ便  
りて餘情かきりなし

彌勒

彌勒の堂よおもひ打ふし

枳風

待

此句尤やり句よて侍れども邊土の哀をよ  
くいひ捨たり句々たんく其理語りたる  
時を見て一句よろしく付捨たる逸句不勞  
かひの鐘の墮たる草の中

翁

彌勒の堂といふ時の観音堂釋迦堂など云  
やうよ參詣繁昌よも聞へす物淋しき体を  
心よかけて鐘の地よ落てむくらの中よ埋  
れ龍頭わつかよ見へたる体見る心地せら  
る五文字よて一句の味を付たり注釋よ及  
す能味ひ聞へし

友

よふ蟾の物うきの聲

仙化

友呼蟾近頃珍らしく侍る艸むらの体物凄  
さ有さま前句よ云残したる處よくうけた  
りうき聲と云よてまづ便なき戀をあしら  
ひたり

雨

雨さへそいやしかりける鄙曇

コ齋



蟾の聲と云より田舎の体を云のへたり雨  
と付る事珍しからすといへども鄙曇珍し  
まかも私よ云詞よあらす古き歌よよみ侍  
る惣して句よ折く古歌古詩等の詞所  
く有といへどもまひて名句よすかりた  
るよも非す侍れいさのみとくしく不記  
門の魚干磯際の寺

擧白

理不盡よ物くふ武者等六七騎

芳重

此句秀逸之海邊の軍みたれたる体之民屋  
寺中よ押上て痕籍したる乱國のさまま  
よ斯有へし世の中のおたやかよ安樂の心  
はえ有かたし思ひ合せて句を見るへし  
あら野の牧の御召えらひよ

其角

前句の勢をよく替りたり野馬取よ出たる  
武士の体尤面白し三句のはかれ句の替り  
やう句の新しみを能く眼よとむへし  
鴉の一聲夕日を月よあらためて

文麟

たんく附様さひしく續たる故よ能云な  
かし侍るかやうの所功者の心付へき事  
夕日さひしき鴉の一聲と長嘯のよめるよ  
西行の柴の戸よ入日の影をあらためてと  
よめる月を取あはせて一句を仕立たるよ  
長嘯を本歌よ用るよいあらず侍れども俳  
諧の童子の語をもよろしきいかり用ひ侍  
れいいつれよても當るを幸よ句の餘情よ  
用る事先矩よ

糺の飴屋秋寒きなり  
洛下の景色尤やう句よ月夕日よ其地思ひ  
はかりて見ゆ

季下



稻妻の木間を花のこゝろはせ

翠白

はたらき言語も述かたし乱あたりの道す  
から森の木間勿論木間も稻妻おもしろ  
し誠も秋の夜の花ともいふへし

つれなき聖野も笈を舞

積風

此句の付様一句又秀逸之物凄き闇の夜の  
稻妻ひか〜とする時分聖野も臥たる作  
近頃新しく俳諧のまゝこそ是等よと〜まり  
侍らん

人あまた年とる物をかつき行

楊水

此句又秀逸之聖の宿かりかねたる夜を大  
晦日の夜と思ひ付し之先珍重聖の野も臥  
わひたるよ世もある人の年取物をかつき  
はこふ体近頃骨折へ前句の心を替る所猶  
々齧味すへし

酒もりいさむ金山か洞

朱弦

金山の我朝の大盗の前句をよくうけたり  
註も及す付様明らか

右芭蕉翁の註之當時の俳諧の意味心得か  
たし願くは句を舞し給んやと侍りけれり  
即興も加筆し給ふ終日の席翁持病快らす  
五十韻よして筆をたち給ふ

此國の武仙を名ある繪も書せ  
京よ汲する醒か井の水  
玉川やおのく六ツの處見て  
江湖くも年よりよけり  
卯の花のみな精もよめる哉  
竹うこかせの雀かたよる  
南むく葛屋の畑の霜さへて  
親と棋を打晝のつれく  
餅作るならの廣葉を打合せ  
契も買るる秋のこゝろり

其角 翁 齋 仙 化 芳 重 楊 水 不 麟 文 下 積 風 翁



鹿の音をものいはぬ人も聞つらめ  
 よくき男のいひさすむ月  
 蓬の雨袂七里をぬらすらむ  
 伊駒河内の冬の川つら  
 水車米つく音はあらしよて  
 梅のさかりの院くを閉  
 二月の蓬萊人もすさめすや  
 姉まつ牛の重きよの影  
 胸あはぬ越の縮を織かねて  
 おもひあらぬよ夢の菊さし  
 菱の葉をまからみふせてたかへ啼  
 木魚開ゆる山かけよしも  
 田をやかて休むる朝月夜  
 萩さし出す長かつれあひ  
 向し時露と禿よ名を付て  
 こゝろなからん世の蟬のから

朱不李揚其千芳翁積文李千朱  
 弦下ト水角春齋下鱗風重齋春角水下ト弦

三度踏芳野のさくららのよしの山  
 あるしん春か草のくつれ家  
 名契情をわすれぬきのふけふとし  
 經よみ習ふ聲のうつくし  
 竹深き筭折よ駕かりて  
 梅また若きよほひありけり  
 村雨よ石のともし火吹けしぬ  
 咆とる夜の沖もまつかよ  
 伊勢をのる月よ朝日のありかたき  
 樽よりきて橋つくる秋  
 信長のおさまれる世や聞ゆらむ  
 居士と呼るく唐國の兒  
 紅よ牡丹十里の香を分て  
 雲すむ谷よ出る湯を聞  
 岩根踏おもき地藏を荷ひすて  
 咲へや三井のわか法師ども

仙李文芳李仙不李楊文千峽其  
 化下鱗重白齋水化ト下鱗水春角齋



逢ぬ戀よしなき奴返歌して  
管絃をさます宵の泣るも  
足曳の廬山よとまる淋しさよ  
千聲唱る観音の御名  
舟いくつ涼みなからの川傳ひ  
をなこよましる松のまら鷺  
寝むしろの七符よ契る花よほへ  
連衆くるる春そ久しき

仙 芳 楊 其 積 不 舉  
化 重 水 角 風 水 卜 白

南窓一片春と云題よ

久かたやこなれくと初雲雀  
旅なる友をさそひこす春  
かれのかす櫻の葎掃置て  
よしと口さる一瓢の酒  
月はれて澄火赤き海の上

去 翁 其 風 翁  
來 角 雪

峠の底よ吹あきのおと  
牛蠅よ拾持せて羽折ける  
官位あたへて美女召具せり  
提灯よ大蠟燭の高けふり  
出水よ下す宮の材木  
世わたりぬ關よ道ある寺の背戸  
つらむよあまる腹氣おさえし  
仇人の爲よ斯まで氏を捨  
何よ付たる歳暮の雪  
啼送る八重山もどの犬の聲  
軍の加減うとき長おひ  
去ほよ心よそまぬ月も花も  
彌生へかけて蝦夷の帳合  
雨催ひ陽炎消るばかり  
小姓泣ゆく葬禮の中  
丁寧も事よよるへき杖袋

來 雪 角 翁 來 角 雪 翁 來 角 雪 翁 來 角 雪 翁



敷ものどても須磨の盪菰  
 哀ますむかしかたりの時鳥  
 たちはなやせし竹の夕かけ  
 冥加なう夜食すしめよお腰元  
 毛氈をしき書畫のはしまり  
 こち明る庇の下よ十萬家  
 日何時そ酔さめの月  
 きりくすいかて浮身のなさけなき  
 莖たぐましき筒の雞頭花  
 さいつども南部の護摩の片燃よ  
 四の智恵より過た窓の子  
 鼻つまむ晝より先の生肴  
 あはつよまけぬ公事の有さま  
 繩きれて架木よ咲る花もろき  
 遊ぶ思案のわけて長閑き

雪角翁來角雪來翁雪角翁來角雪來

三月廿日

花咲て七日鶴見るふもどかか  
 懼て蛙のわたる細橋  
 足踏木を春また氷筏して  
 米一升をはかる闕の戸  
 名月を隣り寝たる草枕  
 枝見くるしき桐の葉を蒨  
 墨衣ふるへん虫のから落て  
 内外の下向まつかなりけり  
 既よ立討手の使いかめしく  
 一夜の契り錢かつけたる  
 松明よ貞見んといふ君の誰  
 生て捨子の水よなかるし  
 影かたちしらぬ敵を世よなけき  
 としの餅をおもふ山寺

其コ曾舉清翁

齋良風角翁良白風角齋良白風



雪を持櫛やさはらゝ露見へて  
 虹のはしめり日も匂ひきき  
 沈みてゝ温泉をさます月すこし  
 三ゆく鹿のひとつ矢を負  
 いさくと軍ゝ氣ある朝すき  
 男なから白粉をぬる  
 膝琴ゝ明の風雅を忘れさる  
 なみた折く牡丹散つゝ  
 耳うとく妹か告たる郭公  
 つれなき美濃ゝ茶屋をして居る  
 札焼て刀はかりの傳へけり  
 我うつ鷹を殿のお擧  
 檜紅葉狂歌やさしくよみそへて  
 京の月夜のさそをとるらん  
 物どなく物やむ人のひとりぬ  
 眉ぬく袖の翠簾うつつさ

嵐

翁白雪齋角風良翁白角風雪齋翁角白

ニッ唐のふみよめぬ處を打やりて  
 葱かひゝ雪の山みち  
 哀さゝ蓬屋ゝ拾し破れ網  
 何やらなくて盪焼ぬ浦  
 相國の裁給ひけん花と松  
 車を下て春の休らひ

和

漢 破風口ゝ日影や弱る夕すしみ  
 煎茶蠅避烟  
 合歡醒馬上  
 かさなる小田の水落すこ  
 月代見金氣  
 露繁添玉涎  
 張旭か物書なくる酔の中

全素翁

翁全堂翁堂

白角翁風齋良







潮落かゝる芦の穂の上  
霧の外の鐘を隔る松こみて  
沓ははさまる石原のつゆ  
入月は薄粧ひたる武者ひとり  
柴の篋は笙をあやどる  
山寺の晝も狐のさまかへて  
花とひ來やと酒造るらし  
夕かすみ日々よかさなる鞠の音  
まろき胡蝶の垣を飛こす  
絹張を欄の柱は筋かひて  
みたれし髪を直すかんさし  
調へなき形見のつゝみ音も出す  
何も焚火はみな盡しけり  
棒の月はひとつの窓は僧やせて  
澁つきそめし裏の藪かけ  
木兎のかのか碓や啼ぬらん

露翁

翁 沾 荷 翁 沾 荷 翁 沾 荷 翁 沾 荷 翁 沾 荷

四十雀こそ風も身よしめ  
年立や家中の禮は星月夜  
筆紅梅をたしむ國紙  
春も雪茶道の手前ゆたかよて  
山より見たる夕くれの町  
ひとりは只身を遊せて鳴子引  
蚊遣草はす秋はなりけり  
有明はすくなき鯖の刻みもの  
帆を八合は棹郎の聲  
古池や蛙飛こむ水の音  
蔦のわか葉はよかゝる蜘蛛の巢  
漆せぬ琴や作らぬ菊の友  
葱の笛はふく秋かせの園

嵐

雲

其 介 岩 積 彫 横 翁 仙 翁 其 翁 素 翁  
角 我 翁 風 棠 几 化 角 堂







大口着たる庭の雪はき  
うへもさく鳩のむれ立千木さひて  
ひどりすたれをあみくらす妻  
ニ一軸の記念の連歌膝よ置  
名を恥ぬへき越えたりかひ  
面かけて鏡よむかふ男つぎ  
階をのほる唐獅子の聲  
襖織花のよしきのおさ打て  
柳の水のすみかへる春

同  
江戸さくら心かよはんいく時雨  
薩埵の霜よかへりみる月  
貝ひろひくゆく磯おれて  
酔てり人の肩よどりつく

翁 露 沾 露 沾 沾 翁 執  
沾 荷 沾 蓬 荷 筆

濁 翁 嵐 其  
子 雪 角

けふの賀のいとおもしろや祖父か舞  
根 松 苗 杉 蟬 の 啼 聲  
池の橋わたしはしめぬ垣結て  
みなど入帆の見ゆる屋根を  
世の中を畫よのかれたる茶の煙り  
妹かかしらの唐輪やさしき  
記念てふ袋のきれのはつくよ  
夢を占きく閨の朝風  
津の國のなよんくど物うりて  
二夜とまりの筑紫さふらひ  
一卷の連歌をとくむ此寺よ  
昔代もゆる雨こまかななり  
鶯の巢のいくつか花よ見へすきて  
禰宜下替る春の夕月

翁 角 子 雪 翁 子 雪 翁 子 雪 翁 子 雪 翁 子 雪 翁 子 雪



冬景や人寒からぬ市の梅  
 隣をまよふ入あひひの雪  
 年の貧儀おひゆく路して  
 火をたく舟の星くらき空  
 驚うこく松おもしろき磯の月  
 かさしよ折んすすき一むら  
 太刀持る童のぬれし露時雨  
 車の翠簾よつゝむ鈴虫  
 尋來る友引地藏茅朽て  
 うれしと飢よいちこ拾ひむ  
 櫛からみ枕よそへて残しけり  
 御歌合明日とちさる夜  
 加茂川のなかれを胸の火よほさん  
 萩散かゝる市原のほね  
 鳴の啼方よ杖つく夕間くれ

濁共翁仙枳

文

子角化齋風化子角化齋翁鱗

牛を彩なす月の染きぬ  
 花の日を亡八の長とかしつかれ  
 桃よなみたか一國の酔  
 朝かすみ賢者を流す舟見へて  
 詞のうみと繪よ讚を乞  
 松島や雲居の庵よ酒を飲  
 心の媚すいくとせの旅  
 四の時冬のあられのさらくと  
 水仙ひらけ納豆さる音  
 片里の庄屋の息子角入て  
 伊勢思ひたつ草鞋菅笠  
 美濃なるや蛤舟の朝よはひ  
 なかれよ破る切籠折かけ  
 月入て電残る蒲すこく  
 ことしの勞を荷ふ焼米  
 ニ塚の下母寒からむ秋の風

李

子下風翁角下齋鱗子下化齋翁鱗



邦を軍よとられゆく道  
花のおく鳥うつ音よ鐘つきて  
すり餌をゆるす目白黄鳥

齋化下

十月十一日餞別會

旅人ど我名呼れむ初時雨  
また山茶花を宿くよして  
鶺鴒の心はと世のたのしきよ  
糧を分たる山かけの鶴  
かけありく芝生の露の浅みどり  
新し舞臺月よ舞はや  
中の秋畫工一連歸る  
鱸てらしして送る漢船  
神垣や次第よひくき波のひま  
齡とをしれ君か若松

翁之由其積文仙魚觀全嵐  
之角風鱗化兒水峰雪

酒飲よ早乙女連のならひ居て  
卯月の雪を握る筑波根  
鰓釣袖つくはかり早瀬川  
萬一面よ残る橋杭  
道しらぬ里よ礎をかりよ行  
月よや泣ん泊瀬の籠人  
葛籠舞句も都なつかしく  
おもはぬ事をうたふ傀儡  
途中よ立る車の簾を巻て  
沖こく船よめされし誰  
花故よ名のつく波そ珍しき  
別るよ鴈を歸す琴の手  
順の峰えはし浮世の外よ入  
萱のぬけけめの雪を焼家  
老の身の繩なふほどよほそりける  
君あかさされし跡の關守

執

翁之角風鱗化峰翁之雪兒水化翁



明くれの干瀉の松をかそへつし  
いのちをおもへ舟はふ鱗  
起出て手水つかはん海のはた  
えらぬお寺を頼む有明  
朝かほや石ふむ坂の日えほれ  
小畑さひしき案山子作らむ  
草の戸の馬を酒債よおさえられ  
常見る星を妹よ教る  
薫のえゆりおもしろき夕涼み  
幟よさして氏の天王  
御牧野の笛ふき習ふ童聲  
僧くるのしく腰よ杖さす  
見苦しと文字の子昂を睨て  
堺のよしき蜀をあらへる  
隠家や寄居虫の友よ交りなん  
篋よ出て海苔すくふころ

翁 水 雪 角 風 峰 角 化 兒 翁 風 峰 水 雪 角 兒

谷深き日うらな花の木芽のみ  
聲えたれたる春の山鳥

之 兒

我名呼れんと云旅人の句を聞て

旅人ど我見はやさむ笠の雪  
さかつき寒し諷ひさふらへ  
有明の鉢の木賊を対そめて  
露よなりけり庭の砂原  
小御門よ駒ひきむかふ頭ども  
椎の古枝を腰よ折そへ  
覆盆子踏山より村の雨はれて  
老聲苦し夏の黄鳥  
物くはて晝寝かちなる物思ひ  
またふみ書て車かへしつ  
櫛籠よ見よと摘たる山の艸

桐 翁 如

翁 行 葉 翁 行 葉 翁 行 葉 行



えるしくつれし柴人の花  
欄作る家もさひしき春の風  
三日月ほそく節句知り  
鶉を入る初川いそく花の陰  
美濃侍のえたりかほなる  
御即位よき白髪とえり出され  
植て常磐の百本の竹

芭蕉翁不快にして止ぬ

鳴海寺鳥氏業言亭と飛鳥井雅章卿の御路

草のかしと侍りしを和す

京まてはまた半空や雪の雲  
千鳥えはらく此海の月  
小蛤ふめとたまらす袖ひちて  
酒氣さむればうらなしの風  
彈捨し琵琶の囊を打はらひ  
僕のかくれて牛いそくえ

翁業知如安自

言足風信咲

業翁行業翁行

うふたつ三反哺の鴉啼つるし  
明日の命の飯けふり立  
わたし舟夜もあけかたは山見へて  
鐘いなく處よしか東か  
其姿わかれの後も一咲ひ  
なみたをそへて鄙の腰折  
髪けつる熊の油の名もつらく  
身よ瘡出て秋の寝苦し  
釣簾の外またはこを疊む月の前  
楊枝相撲のちからあらそひ  
小袖して花の風をもいとふへし  
こかるゝ猫の子を捨てゆく  
憂年を取て二十もやく過ぬ  
父の軍を起ふしの夢  
松かけよ少し草ある波の聲  
翅をふるふ鴉一つかひ

重

辰信咲翁足言言風信足信辰言



静なる龜は朝日をいたしきて  
三度ほしたる勅のかはらけ  
山守か車よ削る木を荷ひ  
燈ならして巖うちかく  
瀧津瀬よふこなふ法の朝あらし  
狐かくるゝ蔦の草むら  
殿破て月のむかし影なから  
老かむ姥かこるも打音  
言ふすほりし櫓の煙のえらけたる  
陣の仮屋よ碁を作るほど  
山さらよ横をりふせる雨のあし  
氣をたすけなん時鳥なけ  
花盛文を集る窓とちて  
御燈かしくくる神垣の梅

執

信 咲 翁 足 風 咲 言 翁 辰 信 風 足 言 筆

ためつけて雪見よまかる紙衣哉  
凍るる土よ拾はれぬ塵  
松風よ眠る日向のすくなくて  
鶴白鳥のかりておもし  
水浅く舟押ほどの秋のくれ  
もう山の端よ月の一尋  
さぬくや烏帽子置所わすれけり  
眉ほそむるも恥るうかれ女  
寄手等いつともなけり歌よみて  
干飯の水のつめたさもよし  
着て來たる布子苦よなる晝の頃  
涙うつりて能いおほへす  
門跡の顔見る人いなかりけり  
笈よ雨もる峰の稻妻  
能ほどよ寝てから後の礎聞  
夜の明なりと膽つふす月

翁 昌 龜 荷 野 聽 越 舟 執

碧 洞 兮 水 處 人 泉 筆 洞 碧 兮 水 翁 處 人



うか／＼と律儀よ花の待れつる  
唯ともしらて飼る黄鳥  
尼寺の春雨くらくまどくど  
釣瓶なけれぬ水のとさるる  
夕かほの軒まよりつく久しさよ  
布杭二本よるのさひしき  
ひまくれし妹をあつかふ人も来す  
食たくことをわひて泣けり  
旅立の心いむさき物なれや  
けふ髪剃よ加茂川の水  
蟬の音よひとへの衣も身よ付す  
ほそき肘の枕いたけよ  
月まのふ紙燭をけしてすへり入  
物着て君をおどす秋風  
ニ此橋を好て歸る霧の中  
山ひき出してのり初る駒

泉 洞 碧 處 人 兮 翁 泉 水 洞 人 兮 翁 泉 處

まてかけて鴈股つかふ弓太く  
獨ころひてより隙ころひけり  
何事も花よなりたる花の陰  
藪の中よも椿山ふき

洞 人 水 處

星崎の闇を見よとや啼千鳥  
船調ふる海士の埋火  
築山のあたれよ梅を植かけて  
遊ふ子猫の春よあひつゝ  
うその聲夜をまつ月のほのか  
岡のこなたの野の青き風  
一里の雲母あかるし川上よ  
祠さためて門よはひこる  
市よ出てまはし心を師走哉  
牛よななかみて寒さわするも

翁 安 自 知 業 如 重

信 咲 足 言 風 辰 言 足 信



初日の音聞なから我いひき  
月をほしたる螺の酒  
高紐よかふとをかけて秋の風  
渡り初する宇治の橋守  
庵造る西行谷あはれとへ  
啄木鳥たしく杉の古枝  
咲花よ晝飯の時をわすれけり  
山もかすみとまていつしけし  
辛螺壳の油なかるうす氷  
角ある眉よ化粧ひする霜  
まつ宵の文をくひさく帳の内  
ねられぬ夢よ枕あつかひ  
罪なくて配所よりたひ慰ん  
庶子よゆつりし家の彫物  
式日の日にかたふきてころせく  
淺草米の出る川口

風 翁 咲 風 足 信 風 言 翁 風 足 辰 信 足 風 辰

欄干よ願ならふ夕すし  
笠もてあふつ盛火のかけ  
初月よ外里の嫁の神通ひ  
すしきいさねく荆袖ひく  
朝霧よつらきい鴻の背あらず  
あかしね瓦なめらかよして  
氏人の庄園おほき花さかり  
駕いてむれの春としまらす  
田をかへすあたりよ山の名を問て  
かすみの外よ鐘をかそふる

翁 咲 辰 翁 足 翁 咲 言 風 信 筆

十一月廿四日みまゆふく有し熱田の  
御社よふたしひ詣て

磨 直す鏡も清し雪の花  
石 しく庭のさゆる曉

翁 桐 葉



時く松かさ落る風止て  
我鳩歸る山のかけるひ  
秋くれて月なき岡のひとつ家  
鈴ももらひし唐たひのから  
肌寒くならぬ錢をえり又掛  
こほるゝ鬢のくろき強力  
明わたる鐘ぬすむ夜いさらくと  
破れし國の境もる庵  
古畑よひとりはえたる麥蒔て  
物呼聲や野馬どるらん  
松明よ食荷ひゆく秋の風  
宮もよしのゝあはれしる月  
就中峯の礎よ開ゆなる  
温泉のよえて人もすすめす  
此塚の女の花の名よをられ  
誰泣顔を咲るつゝしそ

葉全 葉全 葉全 葉全 葉全 葉全 葉全 葉全 葉全 葉全

朝鷹にくまれて侘るさしの聲  
ゆらぐ下る坂の乗掛  
水濁る一里の河原わつらひて  
あらしよえつむ軒の砂除  
初曇いく度こけて起直り  
勅衣をまとふ身こそ高けれ  
鰐そふて經つむ船を送るかど  
潮こす岩のかくれあらぬれ  
打ゆかむ松も似たる戀をして  
あかたの聾の尻目ある月  
秋山の臥猪を告る聲くよ  
道一筋をかり分る萱  
優婆塞か御廟つとむる文讀て  
落人起す夜の明よけり  
煎薬よぬれ柴いふす雨の音  
水桶のほる蝸牛はかなき

全葉 全葉 全葉 全葉 全葉 全葉 全葉 全葉 全葉 全葉



西行の言葉よならふ花咲て  
春の袂よつゝみ打なり

珍らしや落葉の頃よ翁卿  
衛士の薪と手折冬梅  
御車のまはらくとまる雪かきて  
錢を袂ようつす夕月  
矢中の聲ほそ長き萩の風  
かしこのすゝきこゝの篠庭  
岡の邊の心を外の家建て  
妾かなつけしひよこ啼へ  
木綿機はてぬ涙よぬらしける  
とはん佛の其日ちかつく  
まら雲をわけて古郷の山おろし  
放てる鶴の啼かへる見ゆ

如翁安重自知

翁葉 風 信 辰 咲 足 言 信 風 足 咲 翁

霜おほひ蘇鉄よ冬の季をこめて  
煤けし額の軒よもる月  
秋や昔三よわけたる客とかや  
いろくをける夕くれの露  
ちれとこそ簀着てゆする花の陰  
瘦たる馬の春よつなかる  
米かりよ草の戸出る朝かすみ  
山のわらひをつゝむわら苞  
わか戀の岸を隔るひとつ松  
うき名をせむるさしなみの音  
けふのみと北の櫓のそひふしよ  
琵琶よあはれを楚の歌のさま  
いるまろき有鬢の僧の衣着て  
疊よ似たる岩たしみるあけ  
往ひく御代のはしめのうねひ山  
さしらよ削る伊勢の濱竹

信辰足風信翁辰信風足辰信翁



貝のから色とる月の影清く  
部屋こやしなふ籠の松虫  
母のいのちをちかふはつ霜  
羊啼其あかつきの朝嵐  
外山の花のまた夢よ咲  
日の永く雨の船よ蓬菅て  
鴈の名残をまねくおのく

箱根こす人もあるらしけさの雪  
舟よ焚火を入る松の葉  
五六丁布網干せる家見へて  
拐むれつゝ葎の中ゆゑ  
明るまて戻らぬ月の酒機嫌  
蔀くを揚る盃の夜

翁聽如野越荷

處行水人兮

辰信翁辰咲足信言

帷子よ袷羽折も秋めきて  
食早稻くさき田舎なりけり  
神主も常の太かたゑほしなく  
塘見へすく藪の下蒨  
とやくと還御の跡よ鶴釣て  
誰やらや出す念佛  
忍ひ入戸を明かねて蚊よ喰れ  
うき名えれつる月の傘  
長さ夜を泣たるまみの重たけを  
人よ抱れて船をあかりぬ  
花の賀よけふ狩衣を皺よする  
其まゝ梅を裁る幕申  
是より人くのおもひき有て出かちよ物  
せんといさみあひて

下こしる彌生千句の俳諧よ  
故罪喰ふ人の臭きよ

執

筆翁處行水人兮行翁



ところくど一寢入して目の覺る  
 堂もる雨の鑑通りぬ  
 ころつくのみな團栗の落し  
 共鬼見たしみの虫の父  
 布袋破れ次第の秋の風  
 松島の月  
 ひよつとして歌の五文字を忘たり  
 妻戸たききて逃て歸りぬ  
 泣くしてしやくりの留る果もなし  
 あたら姿よ頭そられす  
三世の中の茶筌賣こそ嬉しけれ  
 眠たき晝のまるひ轉けて  
 旅衣尾張の國の十藏か  
 富士晝かねて又馬よのる  
 懐よ盃入る花かかし  
 影和らかよ柳なかるも

人行水兮處兮行水翁處人行翁水行人

十二月九日一井亭興行

旅寢よし宿の師走の夕月夜  
 庭さへせはくつもる薄雪  
 とやくと篋をあふる稿焚て  
 紙漉を見よ御幸ある頃  
 琴持のむしろの上を傳ひ行  
 障子明れぬ消るどもし火  
 起もせて聞しる句ひかそろしき  
 みたれし鬢の汗ぬくひ居る  
 投られて又取付るをかしさよ  
 乳をのむ子の我よ似るらし  
 麻布を煤ひるほどよ織かねて  
 蘭をとりこめぬこたせぬしき  
 夕立の先よ聞ゆる雷の聲

東楚荷昌越一翁

竹兮碧人井翁睡竹兮碧人井



錢

馬もありかぬ山際の霧  
小男鹿の翦矢を袖に射付させ  
飛あかるほどあはれなる月  
木からしむ悴けて花の二つ三  
はたけよつしく野はるかへ

別  
時雨くま鑑かり置ん草の庵  
火燧の柴も侘をつく人  
松風よそれたる鳴を見のかして  
朝氣にくらき湯の山の月  
鐘ひとつ三郷よかよふ秋の聲  
葛の繩面をゆるされし文  
繼子をもいたる嫁の名を逐て  
餅二かさねえよしそふ帯

翠翁溪 共ト嵐

白雪千角齋石 白

睡翁人 吟

同

よし原の土手よ子日の松ひかん  
誰ぬしありて飜ずる宮

えろかねと蛤をめせ霜夜の鐘  
一羽わかかるく千鳥一むれ  
新草よいなく松のみどりして  
田中の道の通り暮ゆく  
月おそくおのか家しる放し馬  
秋風上る門の半蔀  
露の糸錦を通す椽の音  
雨よに見せし蘭のさせ綿  
旅枕女あるしのなさせえて  
契情かけをかくす曙

松翁會 依泥水 風夕 蒼執

江 良々 萍泉 菊翠 筆

石翁



としの秋鹿嶋行脚のよし首途も近よらぬ  
間むさし野の月見んと芭蕉庵を訪て

深川のすみれ咲野も野分かな  
春のはたけよ鴻のあし跡  
初雷のはしめの市の日和えて  
朝とき月の都ふかみよ  
牛車我等か霧の道安き

卯の花も母なき宿よ冷しき  
香さく残るみしか夜の暮  
いろくの雲を見よけり月澄て

時せよわら千宿のむらすしめ  
秋をこめたるくねのさし杉  
月見んと汐ひきのほる船しめて

はせを翁本見し人を訪ひ三河國よ越序お  
もしろけれの伊良古崎見んとをら浪よす  
る渚をつたひ辛して歸り給ひし旅の哀を  
聞て

燒食やいらこの雪よくつしけん  
砂寒かりし我あしの跡  
松をぬく力よ君か子日して  
いつかゑほしのぬける春風  
眠るやら馬のありかぬあたしかさ  
くもりをかokus驢夜の月

寫照庵よ旅ねして

置炭や更よ旅とも思はれす  
雪をもてなす夜すからの松  
海士の子か鯨を告る貝吹て  
背戸より直よ踏こはす垣

風 瀑

翁 一

琴 品

虚 洞

翁 共

其 角

鼠 雪

松 江

翁 良

知 足

翁 人

越 足

翁 人

越 人

知 足

翁 人



歌よせん此名月を只よやの  
蕎麥の貢を通す關守  
翁足

鳴海鍛冶出羽守氏雲宅よて

おもしろし雪よやならむ冬の雨  
氷をたしく田井の大鷺  
船つなく岸の三股萩枯て  
翁自  
知足

寫照庵知足の許へ翁を尋來て

いく落葉それほど袖も綻ひす  
旅ねの霜を見するあかしり  
今朝の月替る小荷駄又鞭當て  
里のおどりよ野菊折ける  
市人よいてこれ賣ん雪の笠  
酒の戸たしく鞭の枯梅  
翁荷  
抱翁  
月水

朝かほみ先たつ母衣を引はりて  
社國

霞かど聞ほとうれし笠舎  
夜の更るまて竹牙る聲  
船あてし擡もさらるし磯際よ  
汐のはやきをこゆる洲走魚  
海鳴て山より曇る暮の月  
鐘つく秋の階子はくく  
翁野  
執翁  
筆

麥蒔てよき隱家やはたけむら  
冬をさかりよ山茶咲へ  
晝の空蚤かむ犬の寝返りて  
社國更  
野越  
翁人

いさしら雪見よ轉ふ處まで  
硯の水の氷る朝起  
同じ茶の焙したらぬ氣香もなし  
翁左  
怒翁  
風見



三十餘年もどの良あり  
あの山のあかりの月の御出やら  
かや釣せはもやめて此頃  
薬のむさらても霜の枕かな  
むかしわすれ劣草枯の宿  
かちならば杖突坂を落馬かな  
角のどからぬ牛もあるもの

貞享五戊辰年  
何の木の花とにしらすよほひかな  
聲よ朝日をふくむ黄鳥  
春深き柴の橋守雪はきて  
二葉のすみれ御幸まちけり  
有明の草紙をきぬよ引つらみ

野人 支考 故江 起翁 倒 土翁 芳 翁益 又平 勝延 翁玄 光

ねさめりの長き夜のあふら火  
釣柿よ鼠のかよふ音聞て  
門ほそめなる田の中の寺  
山路来て清水まれなる袖の汗  
煩ふ鷹をたのむ悲しさ  
女のみ古き御館の破すたれ  
棋よ肘つきて涙落しつ  
いねかてよ酒さへなくす物思ひ  
陣の仮屋よ僧の籠りて  
白雲よのはれと鴈を放らし  
はしめてえたる國の初稻  
もる月を賤か横窓よ見て  
藍よえみつく指かくすらん  
神役よ雇れ來ぬる注連の内  
返歌よつまるきぬの傍  
戀種と池のあやめを折かねて

清里 野人 支考 故江 起翁 倒 土翁 芳 翁益 又平 勝延 翁玄 光



水 雞 を 追 ん 起 し 曉  
 たはこ吸かしの跡のけふりたる  
 誰のりものそ霜かゝるまで  
 あくかるゝ樂の一手を聴とりて  
 釣の王子の浦のさひけり  
 聲立て華表も残る秋の蟬  
 時 雨 る 風 も 銀杏 吹ちる  
 笈かけて夜毎の月を見ありさし  
 心とすさむ家の圖もさえ  
 親ひとり茶も能水となけきつる  
 先 初 瓜 を 米 も 代 な す  
 此坊を時鳥聞やどりよて  
 ゆりこむ櫂も舟つなきけり  
 ものしふの弓弦も花を引撓め  
 たん さ く 残す 神垣の春

正

人 延 玄 水 翁 光 庵 人 延 玄 光 翁 里 庵 玄

紙きぬのぬるども折ん雨の花  
 澄てまつ汲水のなまぬる  
 酒うりか船さす棹も蝶飛て  
 板屋のまじる山もど  
 夕暮の月まで傘を干て置  
 馬も西瓜を付てゆく  
 秋寒く米一升も雇れて  
 騰半の糊のたちてさひしき  
 吹付て雨もぬけたる赤申  
 夕も駕をかゝる都人  
 我こそとけふの連歌を懐も  
 寺も祭りし業平の宮  
 世の中を鶴鴿の尾もたとへたり  
 露もどはしる萩の下末  
 いなつまの光て来れば筆投て

路草更

葛 應 杜 一 乙 翁

有 孝 森 宇 翁 國 森 國 翁 森 宇 國 有 孝



野中のわかれ片袖をもく  
君か琴瑟の風雅をまたひつ

幽蘭集よ此末翁の句のみ擧てと有て

沙は干て砂よ文字書須廣の浦  
日毎よ加はる家を荷ひて  
乞食としとる櫓の木の中  
聖して究なからの月も見つ  
目前のけしき其まし詩よ作  
八ツよなる子の貞清けん

時鳥こゝを西へかひかしへか  
うすくはれるさみたれの暮  
萱葺のわつかな蘆を掃もせて  
人のたからんとしの数え  
有明よ土圭の加減直し置

桐翁閑呷如

葉 水 萱 行 翁 翁 翁 宇

植木のかげよ今よ残る蚊  
物好の律よかなふて静さよ  
晝かまはれいつも零風  
篠竹の虎も居さうな谷續  
はらくと火うち出の手のさえ  
觸事も田舎となれゆるやかさ  
蜘蛛手の橋のかげつはつしつ  
戀種を其中將とおもひ侘  
かくせは文の袖よおもたさ  
隙明の用の序よなまもせず  
一里まてなき産神の森  
散花をまたせて月の山際よ  
窓から東風のけふもきのふも  
暖な空にはやくもかはる雨  
談義すみたる椽のとりく  
はさみての有かど腰の汗拭ひ

執桂工東

葉 藤 行 端 楫 山 藤 葉 翁 水 端 行 筆 楫 山 藤



非人も都そたちなりけり  
脱かぬるひとつ羽折の一ッ紋  
五寸と書て一寸の雪  
寒梅の床から添る茶の匂ひ  
やかましい日ハ鐘もおほへず  
又してもわすれた物を月あかり  
何所やら凄き秋の水おど  
眞黒な石のそはたつ霧の中  
手前の杖をいたしいて置  
お十二又過た何かの御器用さ  
不淨をよける金繡の徳  
釋教も末か末ほどあちよ成  
おさめかねたる儒者の小宅  
六經の花を古瀬戸よ秘藏せん  
邪なしとおもへ日なかく

翁水行山藤翁葉水端楫翁葉山行水翁

燕子花我よ發句の思ひあり  
麥穂なみよるうるほひの末  
二ッして笠する鳥夕くれて  
かへさよ袖をもれし名所記  
任なれて月まつほどの浦傳ひ  
それどはかりの秋の風音  
捨かねて妻よふ鹿よ耳ふさき  
念力岩をはこふえたしど  
道の邊の松よ一喝えめし置  
長者の興よ沓を投こむ  
虚樽を荷ふ下部のうつしあや  
岸よかそふる八百の鷺  
森透み燈籠みつよつ幽なる  
子をおもふ親の月さかしけり  
その秋すなる手打の悔しくも

翁知桐叩自如安重

足葉端言咲風信辰翁足葉端辰足



猫ならぬ猫霧はれてから  
鳥部野も葛どる女花わけて  
妬めるすちを春をしまるし  
乙鳥も短冊つけてはならやり  
鶯さかつきをせおふささみ  
天氣さへ勅も應して雲なひく  
五日の風の宮雨の宮  
菓子うりも木隠れてのみ住はつる  
長屋の外面立名恥らひ

同六月十九日

蓮池の中も藻の花ましりけり  
水おもしろく見ゆる駕の子  
さしなみやけふそ火どもす暮待て  
肝のつふるし月の大ささ  
菊萱も道つけ人の通るほと

風葉言端翁信風咲足  
文分翁然  
芦荷翁越人  
芭蕉梅露鷗拾用東  
梧笠百餌歩景呂巡翁人翁然玉

鹿打小家の晝いさひしき  
眞鉄ふく烟の空もほそくと  
檜たつ岨の風のよめふり  
古寺の瓦ふきたる軒あれし  
夜くちさる盗人の妻  
涙より雨もえめりて簑おもく  
馬の乗たる舟のせいなさよ  
須广明石見残すほど暑くなり  
筆ゆひかぬる茄子ちひさし  
蓬生の垣根も機を巻かけて  
齒ぬけの祖父の念佛をかしき  
足跡も米のこぼれていまくと  
つちける舟も在明の月  
秋の風橋杭つくる手斧屑  
はかまをかけて薄からする  
花さかり節句を山も暮しけり

炊玉  
落梧  
芭蕉  
梅餌  
露歩  
鷗景  
拾呂  
用巡  
東翁  
然翁  
玉



僧のめしくふ鐘かすむ空  
 高欄又冠ならひて長閑之  
 蹴あけし鞠又夕日はゆき  
 みどりなる朴の梢の蟬の聲  
 辨當洗ふ清水なりけり  
 微塵はかり片よせ通る風の跡  
 荷をまちかけて馬士のいさかひ  
 手杵つく賤かかしらのとけなから  
 もえまざる火よいとせはしき  
 雪の日の内まて鳥の餌をはみて  
 琴ならひ居る梅のまつかさ  
 朝霞生捕れたる物おもひ  
 衣着かへねのわるき春雨  
 時鳥初音まつ夜はひして  
 まかきの月又車まのはせ  
 此里の糶する音のさらくど

梧餌百翁呂景歩巡笠然人翁玉百

孝子密柑を折持て行  
 まらぬ川人の渡るを詠め居て  
 餘所の降らん神のとろき  
 土どり又此片山をほり崩し  
 牛のくひする松うこきけり  
 おほひなき佛又鳥のとまりたる  
 はしりあかりてわたる反橋  
 土産よと拾ふ沙干の空せ貝  
 風ひき給ふ聲のうつくし  
 いつくからわかる人そ衣かけて  
 御隔子あくる月の寒けき  
 木枯よ花ちる庭の笛鼓  
 懐紙をつしむ玉たれの霜

呂景巡笠然人翁玉百

七月十三日鳴海眺望



初秋や海も青田の一みどり  
のりゆく馬の口とむる月  
稿庇霧ほのくらく茶を酌て  
瘦・たる藪の竹まはらへ  
蛤のからふみわくる高砂子  
笠ふりあけて船まねく聲  
白雨の雲つゝみゆく雨のあし  
田面よむれし鷺の羽をのす  
お乳そひてわかうよものや云ぬらん  
おもひ残せる遠の國替  
琵琶弾て今宵泣て明すへき  
納簾の一重も恥る黒髪  
軒高き瓦の鬼の影さひし  
施餓鬼過たる入あひの幡  
淺瀬川向よ角力とり初て  
樽さりほどき月を酌けり

翁重知如安自

辰足風信咲風足風咲信風足辰

花の雪鷹よ見せたき泊山  
水おもしるき寺の春風  
勢多の橋なかは霞たへくよ  
白壁遠く炭をうる市  
芝原の朝霜はらふ布衣  
けふ一七日戸帳ひらきて  
かしてまる百首の歌をよみ終り  
妻よ聞せん尺八の曲  
湯あかりの肌よ伽羅を炷かかし  
むかしはつかし今の竹垣  
このころの踏あらしたる蘭の鉢  
魚つむ船の岸よよる月  
露の身の鳥の乞食と黒み果  
次第よさふき明くれの風  
猿の子の親なつかしく叫けむ  
鴉も鳩も柴の戸の伽

牛

足歩信足咲足信足咲足信足



石ふみてかた下りなる岨の道  
杉葉まじりのつくくし摘  
かんさしよ花折娘打むれて  
胡蝶をはやす鶴龜の舞

村竹柴軒興行

粟稗よまつしくもあらず草の庵  
藪の中より見ゆる青柿  
秋の雨歩行鶴よ出る暮かけて  
月なき岨をまかる山間  
ひたるしと人のゆせひたるさよ  
稿もちよりて家根ふきよけり  
木葉ちる覆の末も神無月  
つてまぢ兼る島の喰物  
筵着て蚊の啼聲よ眠られず

翁長荷一越胡鼠

虹翁彈及人井兮虹

風足信咲

我よ狂ふや妾よおどろへ  
水付す立たる髪のすさまじく  
死て間もなき靈まつるこ  
石籠もあらはれ出るよるの月  
簀をくむとてねぬ渡し守  
火ふりして歸るをのこ何ものそ  
えろき袂の見ゆる興かき  
雨乞よすいゝ花のうるほひて  
竹結そへる軒の連翹  
長閑さよけふの氣相の少し能  
木馬なをして子ものせよけり  
色黒き下部つまけてかこまり  
切籠折かけ凄き夕くれ  
さまくの香薫りけり月の前  
人一代の戀をとふ秋  
捨し世の葛のうらみも引むし

兮井人及彈井翁兮井人翁虹



きたなくなれと良もあらぬす  
ふところも脇さし指て又出る  
下戸をよくめる雪の夜の亭  
早咲の梅を我身またとへたり  
嫁せぬ娘の眉かして居る  
ニッまのひ音よすかしきならず垣のおく  
踏さやさせる松のともし火  
明やすき夜をますらをか腹立て  
何を啼ゆくほどきすやら  
花よよる硯の蓋も物書ぬ  
すたればり出す春の夕暮

元祿元 九月改元

いろくの菊もひとつの匂ひかな  
松のひくきを草庵の秋

桐 町

葉 端

人 及 彈 翁 虹 人 及 彈 翁 乃 及 人

眞丸よ有明月の影見へて  
道のはやき人のとりえか  
聲高な咲ひも腹を立より  
揚場へ船の着かぬるやら  
此あたり何をえるへ住ひせん  
芥子などありて竹やせし村  
被とる顔も驚く一むかし  
此髪剃んとこの安さよ  
精出して金持こころ恥しく  
紅葉をのみよ薪きる山  
雨降の鯛聲のあはれ  
硯をさくる月の小くらさ  
氣はらしん何を思ひの窓のもと  
また目の覺ぬ眉のらうたき  
散もせず撞樓も近き花盛  
飛ゆく蝶の高くなりけり

執 閑 工 東 翁

水 端 藤 翁 葉 水 山 藤 翁 葉 端 筆 水 山 藤



青くとうこかぬ石の長閑よて  
酔て又寝る此橋の上  
夕暮の謠ひも聞ぬ蓮池も  
行水したるさまの兒とも  
追歸る木幡の馬をかさり連  
半よこれし蔀おろしつ  
いそくほど繪を書さして横よ成  
女師走の月と契るか  
雪の日の砧よ涙落しける  
栗たぐ壁のゑみてほろく  
砂川を關よこちらも宮ありて  
息る牛を捨す釣ゆく  
奥深き事も悟れぬ近い管  
行燈の火のほそき明方  
くもるかと思へぬ果の風よなり  
筆一本よ花の一時

山翁葉端藤山端藤水葉藤山翁葉端藤山

誰かえる桃源洞の芳しき  
茶よ酒よ先水のあたしか  
えら菊よ高き雞頭おそろしや  
泥かふりたる稻を干家根  
月何日海なき國よ旅ねして  
笠よ玉子をぬすむなりけり  
ほつさりと折ておかしき雪の竹  
はかま着あから箒たはぬる  
ウ内よて念佛やと名をいぬれ  
箒捨て行濱の海苔賣  
左義長の火よおとさるゝ在郷馬  
かはら鹿よ臙なる月  
鴈を片手よ人を引すりて  
くらへまけたる名所の貝

杉越翁友夕依泥

山葉風人八翠五菊々岸人風翠五



香の香も物調子や狂ふらん  
小袖もれ出る翠簾のかさねめ  
談義の場泣のさしゆ上る人さうな  
うつくしい子の膝も眠りて  
里遠き花の木陰も豆獸焼  
くるふ胡蝶の編笠も入

苔翠亭

月出の行燈けさむ坐しき哉  
朝夕かゝる柴垣の櫂  
此君と名をいふ竹の露落て  
まつ片仮名のいろは習ひも  
南から聲も雨もつほととさす  
よもきをのそく山の草かり  
打くたく燧のかけのさひしくて

依 兆 夕 友 翁 苔 越

を 芹 菊 五 翠 八 菊 五 翁 人 風 依

女房もどれの留主わたす  
聾と物かたりする戀の友  
瘡おさえてあかつきを泣  
また止ぬ雪の戸明て怕とさよ  
さし残したる曲舞の章  
秋風や子を持ぬ身の哀より  
谷の庵のあたらしき月  
行鷹もおかれて一羽残りけり  
沖も船見ると敦盛の塚  
唐人の頭巾も花の散かきり  
酔て牛より落る春風

深川の夜

鴈かねも静も聞のからひすや  
酒まひならふ此ころの月

翁 越

八 翁 菊 芹 菊 依 人 菊 翠 翁 五 人



藤はかまたれ窮屈よめてつらん  
理をはなれたる秋の夕暮  
瓢箪の大きき五石はかりん  
風よ吹れて歸る市人  
何事も長安のこれ名利の地  
醫のおほきこそめくるほしけれ  
いそかしと師走の空よ立出て  
ひとりせいのやく寺の跡とり  
此里よ古き玄蕃の名を傳へ  
足駄はかせぬ雨のあけほの  
きぬくやあまりかほろくわてやかよ  
嵐ひき給ふ聲の美し  
手もつかす晝の御膳もすへり來ぬ  
物磯くさき舟路なりけり  
月と花比良の高根を北よして  
雲雀啣るころの肌脱

全人全翁全人翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁

破れ戸の釘打付る春の末  
見世のさひしき麥の挽割  
匣なくて服紗よつしむ十寸鏡  
物思ひ居る神子のものいひ  
人去ていまた御坐の匂ひける  
初瀬よ籠る堂の片隅  
時鳥鼠のあゝ最中よ  
垣穂のさしけ露のこほれて  
あやまくよ煩ふ妹か夕なかめ  
あの雲の誰涙つしむそ  
ゆく月のうらの空よて消さうよ  
砧も遠く鞍よ居眠り  
秋の田を蒔せぬ公事の長引て  
さいくなから文字問よ來る  
いかめしく瓦庇の木薬屋  
馳走する子の瘦てかひなき

全翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁人翁



花の頃談義まかりもうらやまし  
田よしを喰て雁き口

翁人

大通庵道圓追善

其かたち見るや枯木の杖の長  
千鳥来て啼よし垣の池  
簞作りみの作りさす雨止て  
風のしきりよならず物の音  
内洞のくほかなるより洩る月  
油單をかける葛の紅葉々  
包めともやかて冷たる物くひて  
吾をかもはぬ家童子ども  
君の来て鴉の森を出るまで  
聲うつくしき念佛聞ゆる  
いつかはと央かたふく島の御所

曾路素友苔夕翁

通翠五堂良通堂五翠菊

隣を起す雪のあけほの  
藪の月風吹たひよ影ほそく  
地に稻妻の種を蒔らん  
拾われぬ金の氣なから秋の來て  
無理よ望みをかけし師の坊  
峰の供花の岩屋もつらからめ  
のほる小鮎を汲ん谷川  
若き身の隠居と成て日水し  
貞のほくろをくやむ乙女子  
舞衣をむなしく疊む箱の内  
猿の木末の松かさ<sup>二</sup>を打  
苔生し佛か膝を枕して  
夢とおもひて覺かぬる夢  
振袖よいつまで拜む月の影  
興してぬすむ菊の一株  
露深き無言の僧の戸を明て

翁翠通菊良五翁通翠五通良堂翁良菊



身の賣代を子よ残しゆく  
泣顔をうつす島のわされ水  
奈良よも恥ぬ脇師なるらん  
酒を名よ付けての人よ憎る  
蓮をも置ぬ庭の砂くひ  
くみあくる御堂の朝時はのか  
蚊よせしられてかふる笈摺  
清き地よ骨を納る花のかけ  
春暮てゆく香の一時

雪の夜の竹馬の跡よ我連よ  
花屋をとどはん梅の早咲  
打渡す外面よ酒の食干て  
鶴啼あはす旅立の空  
轉ひたる船の乗場よ残る月

路宗友翁 通波五 菊良翁 通翠良 菊五  
水 五波通

火を焚窓をさし覗く秋  
てうくと機おり虫の聲踏て  
朝日よむかひさるし珠数の緒  
生れ付見よくさ人のうらやまし  
親ようらるし品もありけり  
世のさわき關もこさせぬは調物  
蔓のわこたをあらす野鼠  
不二詣おひねたわらを草枕  
母の佛を飯よあつかる  
産棚よ白繪の桶を居並へ  
濁りをすます砂川の水  
夜もすからつふねは月よつかはれて  
破れ扇の骨をつなかん  
初秋のまた帷子のけしき  
腹わつらひてよくむ喰もの  
さんといふ娘の顔の美しき

會夕 良菊水 通波五 菊良翁 通翠良 菊五 水翁菊五



いやしき家も積る文塚  
 舞分る垣ねも黄なる綿掛て  
 うはより先も白髪おろさむ  
 菊頃もいつかなるへき糯の稻  
 鼠も月を吐出す雲  
 秋山もあらし山伏のいのる聲  
 こる人もなくこけし神の木  
 打みたれ何をか蟻のいそかしき  
 心をけししも入るかくれ家  
 文字ひとつふしての習ふ腹の上  
 まなこくじいてあはれ幾年  
 身を浮世袋も残しけり  
 馬うりかへて酒ひらく家  
 花も舞二男も名乗讓るらん  
 貧もほこりし鍛冶の春風

通水五翁菊通五翁良通五翁菊

雪毎も梁たわむ住ひかな  
 けふらて寒し浦の盥焼  
 さまくの魚の心も年くれて  
 はしめて鴈の北もむく只  
 のけそりて峯の梅咲朝月夜  
 瓢箪荷ふ春のあけまさ  
 一里の其時よりの神さひて  
 尺どりて見む頼朝の釜  
 からけたる書物を夜の艸枕  
 かたふく松も母の飾  
 宿かりて此頃うつる三井の坊  
 力もちするたわら一俵  
 放されてねりかむ牛の夕涼み  
 つかえも障る旅の稻妻  
 西行の像を拜する浦の月

俗路翁友曾宗嵐雨夕緑

通水五翁菊通五翁良通五翁菊



誰か住らむ碑の銘の露  
若生を朽木の花も植そへて  
春の遊ひも母衣かゝるらん  
餽賣の霞をわくる矢瀬の里  
野火焚捨て道かはるん  
後の世の罪とやらならん毒なかし  
九輪の落ちて青石の塔  
一かいの松うこくほど吹嵐  
むくろはかりを残す夕月  
秋寒くあられど拾ふ虫のから  
瘦たる乳をまほる露けさ  
とはぬ夜も膳さし入る蚊帳の内  
蛭か小島もなさけまゐらん  
其まゝも剝たる僧を師と頼む  
生木を燃てあたる冬の日  
ニかたは袖なき衣ももる時雨

洞良通絲竹五良水竹菊絲翁通良水竹

悴四五人ほえて苦しき  
菅笠も哀も見ゆる熊野道  
峰よの猿の小猿手を引  
優婆塞も花よ心やうこく覽  
麻の羽折よつゝ山吹

翁通絲五菊

昔拜め二見の七五三を年の暮  
篠竹うたふ煤掃の風  
翳うる儀の小口舞そめて  
村の地取よかこす鍬形  
珍敷湯の湧出る峰の月  
葉を巻松の霧よ横たふ  
霜置ぬ常盤の里の菊買よ  
立かちひたる家根の繩あみ  
三味線を曉とよはつくと

翁岱曾嵐宗路友泥夕

水良竹波通五菊



まくりて歸る榻のねむしろ  
茶ひとつの情を思ふ衛士か妻  
稻荷まおりの縁かりし庵  
朝月の柱よかゝる作の面  
尊とや僧の施餓鬼よむ聲  
侍の身をかへよとや秋の蟬  
笈のうちよも夢の見へけり  
羊腸の道散埋む花の坂  
清水ほり出すきさらきの雪  
蛙啼窓のあかり又舟よせて  
硯をほとく顔のけたかさ  
髪それの國なつかしき須磨の寺  
花のさかり又茄子ちひさき  
男なき妹かすたれを守かねて  
涙火桶よ鼻紙をほす  
老ぬれの針のみくすの背けたる

五翁通菊波翁竹菊五通翁波水良通翁

子あから僧のはつかしきそや  
賤の家よ茶碗二の手を置す  
ぬすみするさへ掟さためし  
甲斐信濃月をわらそふ濁り酒  
突はつされてのほる初鮭

水通良波五

我も寫よ梅よりかくの敷椿  
茶の湯よ残る雪のひよ鳥

雅良翁

さまくの事おもひ出す櫻かき  
春の日はやく筆よくれ行

翁探丸

笠寺や乗敷さます一すゝみ  
二人していさ大なる瓜  
裁物の麻のきれ端悦ひて

翁其闍指角



えるへして見せはや美濃の田植哥  
笠あられためん不破の五月雨

已百  
翁

藏のかけかたはみの花珍らしや  
折てや掃ん庭の帚木  
七夕の八日の物のさひしくて

荷落翁  
翁

林鍾十七日

何處までも武藏野の月影涼し  
水相似たり三股の夏  
海老喰よ群たる鳥の名を問て  
ゑほし着ぬ日の更よ樂  
懐をあけてうけたる山さくら  
蝶くるひゆく欄干の前

寸翁  
荷越翁  
落梧  
秋芽

見せはやな茄子をちきる軒の烟  
其葉をかさねをらん夕かは

惟然  
翁

賀新宅

能家や雀よろこふ背戸の粟  
蒜よ見ゆる野菊荳  
投はたす岨の編橋霧こめて  
風呂焚よ行月の曙  
杉垣のあなたよ凄き鳩の聲  
初霜おりに紙子捫つ  
ひよろくと猶露けしやをみなへし  
菫菊かひよゆく朝の月  
木からしの寒さ重ねよ稻葉山

翁知翁  
翁足翁  
翁全  
翁落  
翁梧



よき家つしく雪の見處  
賜のゐる里の垣根よ餌をさして  
黍の折あふ道ほそきこ  
有明の夜半は人の影もあし  
みなとよ舟の入かゝる聲

翁 荷 越 羽 舟

吟 人 笠 泉



文京区本駒込  
四一三三  
高橋三郎



